

文化と文明

「祖國再生の道も念じて」

長内俊平



文化と文明

「祖國再生の道を念じて」

長内俊平



来訪の少年を囲んでひと時を過される著者ご夫妻
(平成 21 年 9 月・大町憲朗氏撮影)

はしがき

元富山県立富山工業高校教諭 岸本 弘

『文化と文明』の再版を企画したものの一人として、「はしがき」を書かせていただくことになりました。私などまことに相応しからぬものであると恐縮してをりますが、再版にいたるいきさつなど取りまとめ、「はしがき」に代へさせていただきます。

まづ「再版」といふことについてであります。これは著者・長内俊平先生が本書の第四回（三十六頁）に触れてをられますやうに、青森県・春秋東奥社の月刊『春秋東奥』に、平成十年六月より二十二回にわたって連載されたものであります。

そのコピーを数回に分けて著者からお送りいただきましたのは昨年の春でありました。読み進むうちに、これは自分一人が読ませていただくだけではまことに勿体ないことに思ひをいたし、再度コピーをとり懇意な方々にご紹介いたしました。お読みになられた方々からの反響はまことに大きく、出来れば正式の書籍として出版してはどうかとのご意見が多く寄せ

られました。再版といふことになれば、まづは春秋東奥社にご相談するのが筋と、お問ひ合はせをいたしました。が、事情あつて既に廃業してをられ、原版の所在も確認できず、結局自分たちで版を起すところから今回の再版作業がスタートいたしました。

ワープロ作業をお願いした方々は、二十代の学生諸君から六十代の方々まで総勢二十四名、加へて編集に関はつたもの、私を含めて五名でありました。二十代三十代の多くの若い方々に加はつていただけことは、ご著書再版の意図からしても、まことに願つてもないことであつたと思つてをります。(ご協力いただいた方々全員に「あとがき」を書いていただきました)

著者並びに今回の再版作業に関はりましたものは、みな社団法人国民文化研究会(以下、国文研と略記)に連なるものであります。ここで国文研といふ団体について簡単に触れておきたいと思ひます。この国文研は、戦後ほぼ十年を経た昭和三十一年に発足し、発足の年から今日まで、一年も欠かすことなく、毎年八月に「全国学生青年合宿教室」を主催してきた団体であります。私を含め今回の再版作業に関はつたものは、この合宿教室に参加したことから国文研につらなり、著者・長内俊平先生とも出会つたといふ経緯を同じくしてをります。

さらにこの国文研の道統は、戦前に、全国の旧制大学・高校・高専校に横断的に組織されてゐた「日本学生協会」に遡るわけでありますが、この「日本学生協会」並びに「国文研」の活動の根底に求められてきたものは、具体的には著者が、本書『文化と文明』に切々と訴へてをられるところと申し上げてよからうと思ひます。そして著者・長内先生は、戦前戦後を通じて今日まで、学生青年の育成に献身的な一努力を傾けてこられたお一人でありました。「全国学生青年合宿教室」に於ける先生の御講話は、国文研叢書No.37に『若き友らへ語りかける言葉』として一書にまとめられてをりますが、今回の『文化と文明』は、その続編とも言へるものであらうと思つてをります。

さて、著者・長内俊平先生のお人柄につきましては、「あとがき」を書かれた方々がそれぞれの角度から描いてをられるところがありますが、加へて私は、最近次のやうなことを感じてをります。長内先生を含めてこの年代の方々は、一度は命を捨ててお国のために戦はれた方々であります。そして、命を落とされた方、生き残られた方は、紙一重のことであつたでありませう。さうした方々が、今は亡き友らを偲ばれるとき、どうしてもあとに続く私共に伝へずにはをられない思ひをお持ちなのでありませう。

しかし、それを伝へようとされる方々にも、それを受け止めなければならぬ私共にも、今日の日本のありやうは余りにも惨めな状況に思はれてなりません。然らば、私共にはどのやうな方途が残されてゐるのでありませうか。どれだけ性急に事を構へてみても、やはり著者が、この『文化と文明』に訴へてをられるところに共感をもち得ない限り、何も始まらないやうに思はれるのです。私共の父祖の時代に、当然のこととして大切にされてきた生き方を、昨日のごとく私共が受け継いでゆくしかなからうと思はれるのです。

今回の再版にあたり著書が付された副題、(―祖國再生の道を念じて―)は、正しくさうした願ひをこめて付されたものでありませう。読者各位のご賢察を願ひ上げます。

末筆ながら、出版に関して全面的にご助力いただいた磯貝保博さんをはじめ、ご協力いただいたすべての方々に深甚の謝意を表して「はしがき」に代へさせていただきます。なほ、この一文の日付を著者のお誕生日と致しました。今年、満八十八歳をお迎へになりました。

平成二十二年一月二十日

目次

はしがき …………… 1

第一回 …………… 11

中学時代の思ひ出

文化とは

陸羯南くがかつなん先生の文化観

司馬遼太郎氏の文化観

我が国の今日の昏迷の源は何か

「文化」と「文明」の訳語についての註記

第二回 …………… 20

やだらど多い横文字

英語はそれほど高尚な言語なのか

外に向って叫ぶ前に先づ自らをみつめよう

文化の定義についての註記

第三回 …………… 29

知解ちげと体解たいげと心解しんげ

良寛さんの話

カンニング

第四回 …………… 36

世の中で一番難しいこと 「知解」と「心解」の違い 昭和十二年頃の思ひ出

第五回 …………… 43

ヒラリー卿の言葉 自然保護 益虫と害虫 「共生」といふ言葉について

「共生」についての註記

第六回 …………… 51

戦に敗れて 忘れ得ぬ一夜^{ひとよ} 帰郷を決意し百姓になること

第七回 …………… 58

百姓をやめ大学へ 大学時代私の心を捉へたもの ある神秘的な体験

概念の遊戯を逃れて

第八回 …………… 65

知解^{ちげ}と体解^{たいげ}と「心^{しん}解^げ」の違いのまとめ

第四の違い 叩くなら学校から帰ってからにしる

第九回 …………… 72

知解と体解と「心^{しん}解^げ」の違いのまとめ（その二）

分教場で学んだ者は、人生問題につき抽象的思考はしないといふこと

屁理窟

第十回 …… 79

第六の違ひ―論証―(承前) アレキシス・カレルの生命観

この世には論証出来ぬ世界があること 水は靈妙なものである

第十一回 …… 86

私達に今求められてゐるもの 福田恆存先生の言

教養と教育 文化とは過去の時代の集積、あるいは成果ではない

第十二回 …… 93

文化観光立県宣言 あづましい 少欲知足

世界には今も飢えてゐる方が沢山をる

第十三回 …… 101

観光といふことについて ねぶた 三坪の庭

第十四回 …… 109

「時」と「時間」と 「時」とは文化である 眼にみえぬものの導き

「時」とは如来様

第十五回 …… 116

文化力といふことについて—生き方としての文化と国の盛衰—

第十六回 …… 123

文化力といふことについて—生き方としての文化と国の盛衰— (承前)

お前はよく分るのか 「聖諭記」に仰がるる大御心

第十七回 …… 130

侍講元田永孚の奉答 修身の学とは 学んで時に之を習ふ

第十八回 …… 138

人類は自然の秘密を利用出来る程成熟してゐるであらうか (承前)

渚の憩ひ 「教育者に与ふ」といふ論考

第十九回 …… 146

自行化他 (承前) 生きてる全体と部分 修身といふ学

第二十回 …… 153

修身の学を奪回する道（承前）
レーナ・マリアの「希望の歌声」

松山千春氏のライブとトーク
祖神の祈り

第二十一回 …… 161

勝鬘しょうまんは我が女むすめなり
我が村・我が母校・我が国

い、ふりして青年に殴られた話

第二十二回 …… 168

道は近きちかにあり
働くことは心身の平安を得る最勝の道

文明思想について
真に普遍なるもの
我々日本人が今為さねばならぬこと

著者略歴 …… 181

あとがきに代へて …… 183

〔凡例〕

- ・ 基本的には常用漢字、歴史的かなづかひに統一しました。但し固有名詞及び國（国）、神（神）、佛（仏）、萬（万）など、正字を用ひた場合もあります。
- ・ 引用文献のかなづかひは引用原典に従ひました。
- ・ 漢字ふりかなは漢字音で読む場合は現代かなづかひ、和訓で読む場合は歴史的かなづかひを用ひました。

表紙題字・著者

表紙デザイン・磯貝咲子

著者がお庭で拾はれた落ち葉をもとに空の色を配色してみました。

第一回

中学時代の思ひ出

私はこの齡とくになつても幼いころ、ことにも中学時代に教はつたことをよく思ひ出します。数学の時間に、垂線の説明をしてをられた先生が突然、黒板に「垂んとす」と書かれ、「これは何と読みますか？」と問ひかけられる。皆、頭をかしげてゐると、「これは『なんなんとす』と読みます。青森市の人口は今や三十万人に垂なんとしてゐる、といふ様な時に使ふのです」と教へて下さつたが、その教へは今なほ脳裡なに焼きついてはなれない。

また国語の先生に、已な、已な、己のの読み書きに戸惑つてゐるとき、「已なはふさぎ、己の、己つ、己つ、下したにつき、半なば明あくれば已な、已な、已のと覚えればいいんだよ」と教へて頂いたが、今でも便りや文章を書く時に自づく口遊くちさまれ師の恩を思ふ。

そんな例は数へ切れぬ程多いが、さうしたみ教へを思ひ出すたびに懐かしい先生の姿やそ

の時の教室の光景等が浮んで来てならない。

文化とは

そのなかの一つに英語の先生から、「cultureとは文化、教養などと訳してをりますが、語源は cultivate 即ち土を耕す、といふことから来てをります。そのことをしつかり覚えて置きなさい」と教はりました。その時は、一つよいことを覚えたといふ位に軽く聞いて居ったのですが後年、敗戦によって生きる力も失ってしまつてゐた時、

産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける（明治三十七年）

といふ、明治天皇の「地」と題された御製を拝するに及び「よし、百姓となつて、今一度生き直さう」といふ勇気を恵まれ、土を耕してゐるうちに自然にこの cultivate の持つ意味の重大さに今更の如く気づかせられるに至りました。

即ち文化とは、人と風土との付き合ひのなから生れて来るその民族に特有の生活様式、習慣、伝統と言つたもの、即ちそのなかに居れば母の懐ふところに抱かれてゐる様な安らぎを覚える様なもの――我々津軽衆が津軽弁で話し合ふときのあづましさ、ねぶた囃子ばやしや登山囃子が聞えてくるだけで血が騒ぐ、あの心の弾み、裏山で採つた山菜や、前の海でとれた魚などを親や妻や子と食む時のよろこびなどを言ふのではないか、と気づかされるに至つたのであります。

今日、文化は文明 (civilization) と同義語として使はれることが多く、その根源的な違ひ、両者の関係などに深く思ひを馳せる方が少い様に思はれますが、私はこのことは非常に大事だと思つてをるのであります。

陸羯南先生くがつなんの文化観

我が郷土の誇るべき明治の先覚者陸羯南先生は、夙つとにこの「文化」と「文明」の根源的な違ひに注目され、「文化とは実に国民特有の性格を成す所の言語、風俗、血統、習慣、其他

国民の身体に適當せる制度法律等を綜合せるもの」であると言はれ、「明治維新の大業は日本民族が日本の文化を開発せざる可らずと自覚したるの氣運に成れり」と言はれてをるのであります。即ち文化とは国民生活の元氣の基もとであり、それを基礎としてはじめて政治も経済も善美なものとして展開させることが出来るのであり、各国、それぞれ自国の固有の文化を大切にすることがやがて「世界の化育かいくに賛する」(筆者註・力をそへて助ける意) ことにな
るのだ、と述べてをられますのであります。(『陸羯南』小山文雄著による)

司馬遼太郎氏の文化観

また、わが郷土青森を心から讀へ『街道をゆく』の四十一集として『北のまほろば』と題する著書を残された司馬遼太郎氏は、一寸寄り道となりますが、この著述のなかで陸羯南先生を敬慕され「私は羯南が明治時代きつての偉材の一人だとおもっている」と述べられたあとに次の様な心に沁みる一文を綴つてをられますのであります。即ち

——社業は、ふるわなかつた。ただ羯南のもとに多くの明治後期の文章家、思想家、言論人があつまつた。壯観といふべきだった。おもいつくままにならべても、『同時代史』の三宅雪嶺、在野の地理学者で『日本風景論』の志賀重昂、終生新聞人の良心といわれた長谷川如是閑などがいた。

正岡子規もいた。かれは「日本」を拠りどころとして俳句・短歌の革命をなしとげた。

子規については、羯南は子規の叔父——羯南にとって司法省法学校の同窓——の加藤拓川からたのまれて、子規の学生時代から死にいたるまでの保護者でありつづけた。「以テ六尺ノ孤ヲ託スベシ」(『論語』)とは、羯南のような人をいうのかもしれない。

子規も羯南を慕い、住まいまでその近所にもとめて病軀を養い、その若い晩年には、羯南のことを思うだけで落涙した。

子規は背中に膿の穴がいくつもできるといふ結核性のカリエスで、ときに激痛が襲つた。ところが羯南がきて病室にすわると、痛みまで薄らいだ。羯南は、痛みに哭く子規の手をとり、「ああよしよし、僕がいる僕がいる」といった、という。

「徳ノ上カライフテ此様ナ人ハ余リ類ガナイト思フ」

と、子規が夏目漱石への手紙のなかで書いているのは、最高の羯南評であつたらう。子規は明治三十五年、三十五で死に、その五年後、羯南その人も五十で死んだ。新聞「日本」も、ほどなく消滅した。——（同書一二六頁）の一文であります。

話は一寸それましたが、その司馬遼太郎氏は『アメリカ素描』のなかでこの「文化」と「文明」の問題に触れ、両者は全く異質なものであるとして、次の様に述べてをられるのであります。即ち「文明とはたれもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なもの」であり、之に反し「文化はむしろ不合理なものであり、特定の集団（たとえば民族）においてのみ通用する特殊なもので、他に及ぼしがたい、つまりは普遍的でないもの」だと言はれ、一つの例として「交通信号」と「襖十文字のあけ閉め」を示し、青は進め、赤は止め、の交通信号は、どの国にも及ぼし得るし、げんに及んでもある。普遍的であるといふ意味で、交通信号は「文明」である。之に反し、日本の婦人が襖をあけると、両膝をつき、両手であける様なものが「文化」である。とされ、そのあとを

「立つてあけてもいい、という合理主義はここでは、成立しえない。不合理さこそ文化の発光物質なのである。同時に文化であるがために美しく感ぜられ、その美しさが来客に秩序

についての安堵感あんどをあたえ、自分自身にも、魚巢にすむ魚のように安堵感をもたらず」のであると言ふ言葉で結んでをられるのであります。

我が国の今日の昏迷の源は何か

私は、我が国の今日の昏迷は、この「文化」と「文明」のとらへ方の曖昧さ―物事の本質を見抜く努力を怠つてきた思想の貧困―にその源みなもとがある様に思はれてならないのです。

次回以降そのことに関する愚考を述べさせて頂きたいと思つてをりますが、津軽弁や南部弁を方言といやしみ―正確には方言ではなく、お国言葉と言ふべきでせう―標準語（共通語）を尊む。標準語は日常の生活の処理や知識の伝達には役に立ちますが、情こころの世界に於ては役に立たないばかりか時には邪魔さへすることに私達は気付いてをります。私は永い間東京へ働きに出かけてをりましたが、青森駅に降りた途端青森弁となり、何とも言へぬ心の安らぎを覚えて涙さへ出さうになつたことが幾度かありました。

一足飛びになる様であります、標準語―世界的に言へば万国の共通語（昔は 에스ペラン

ト語などありましたが、今は英語でせう)——は「文明」であるに反しお国言葉は「文化」でせう。

「文化」と「文明」の違いの根幹は何か、二者を融合統一する道は何かについて皆様と共
にしばらく考へてみたいと思つてをります。

「文化」と「文明」の訳語についての註記

(註一) 小山文雄著『陸羯南』によると(同書三三二頁)

——そもそも、「文化」という熟語がカルチャーの訳語として辞書に登場するのは明治も後期になつてのことであつた。

慶応三年の江戸再版『改定増補英和对訳袖珍辞書』、明治五年の横浜版『C・ヘボン』和英語林集成』、あるいは六年の日執社原版『英和字彙』には「文化」の語はなく、cultureの訳語は「耕種、育殖、教導、教化、修善」である。ちなみにこの時期には「文明」も“enlightenment”の訳としてあげられ、civilizationの訳には「行儀正しき事、開化、教化」

があてられていた。

二十一年のウェブスター辞書の抄訳本には、“Enlightenment”の訳に「照ラス事、文明、教化、文化」と文明との同義において「文化」が登場し、二十九年の三省堂『和英大辞典』には「Bunka」として“civilization”と“refinement”があてられているが、それらはやはり同時に「Bunmei」の訳語とされていた。そして、三十五年の三省堂『英和辞典』になって、culture ①耕作 ②培養 ③教化 ④鍛練 ⑤文化

civilization ①文明・開化 ②教化スル事、開化ニ導ク事

enlightenment ①啓蒙 ②開明・文化 ③照明

と、ようやく現代風の訳に近づいている。——と記されてゐます。

(註2) 小生の不勉強で文中に引用させて頂いた陸羯南先生の説は右記の書からの孫引きであります。一言おゆるしを乞ふ次第です。

第二回

やだらど多い横文字

私も中学時代、西洋に憧れたことがありますので、大きなことは申し上げられませんが、近頃はやたらと横文字が多く使はれてゐて、ここが日本か、と物悲しくなります。

「コミュニティーセンターで、今日催し物があります」と市の公報に載つてをっても、「コミュニティーセンターで何だば」「集会所のことせ」「なして年寄りにも分るえんた名前コ付けねんだべな、そこさ集まる人あ英語でも喋るんだな」とでも言ひひたくなることは一度や二度ではない。

自分で建てた借家に「マンション」だの「ドエル」だの「メゾンド」だのと名前コ付けるのは、「あのいいふりコぎあ」と、冷笑で済まされるとしても、どうして公共施設にまで、舌齧るえんた名前を付けようとするのだらうか。

一番耳障りなのは新幹線のホームや列車の中での英語での放送である。土地の名前（盛岡とか仙台とか）を何故私達日本人が使つてゐるアクセントで放送しないのであらうか。外国人にも正しい日本語の発音を教へるべきなのに、外国人に阿おまねつてゐる様で気分が悪くなる。

言語は、その国民性の表現であり、文化の中核をなす最も大事な国民の宝である筈なのに、国語を疎うとんじ、外国語を多用することは、その外国語圏の文化に同化（物の考へ方や態度や行動までも）し、我が国固有の美しい文化を失つて行くことになりはしないか。

明治の初め（明治五年）、後に文部大臣までされた森有礼ありのりが、日本語を廃して英語を国語にしようといふ考へを持ち、まことに恥づかしいことながら当時アメリカの言語協会の会長をしてをられたW・D・ホイットニー氏にその考への是非を糺ただしたのに対し、「世界の歴史のなかで父祖の言語を捨てて新しい言語を採用した国民の例は多いが、大抵の場合、双方に文化面でも政治面でも圧倒的な優劣の差があり、新しい言語を採用した国民は、その言語圏の文化に同化し、その社会の一部に組み込まれてしまつてゐる。日本が英語を採用するといふことは、日本が英語圏の一部となり、その文化に同化することを意味する。（中略）日本国民が日本語自体に低い評価を与えたり、日本語を高貴にし、豊かにし、自らの文化を發展

させうる言語にしようとする努力を妨げる様な如何なる計画にも私は反対である。」と言はれた忠告は、私達日本人の実に安易な生き方に対する今日的な警告ではないだらうか。

英語はそれほど高尚な言語なのか

そもそもその英語なるものは、五百年程前迄は、イギリス人にとって軽蔑された言語であったことを知ることは、私達のこの行き過ぎの横文字愛好の頭を冷やしてくれる様な気がする。

——イギリスはつい先頃（五百年程前）まで、フランス語の世の中で、十五世紀全般にわたって書かれた本の序文の全部と云つていい位「英語で書いて申し訳ない。こういう粗野な粗雑な言葉で書いて申し訳ない。それは、しかし教養のない人にも読ませるためなので、よろしく博学の士のご容赦を乞う」——と、書いてあるといふことです。（渡部昇一氏の『民族と文化の発見』（大明堂）の中での発言の筆者要約）

その言葉に続けて

——やがてバイブルの翻訳運動を中心とする国語復興運動が勝を制し、十六世紀半ばごろか

ら英語でも、書き始めるようになったが、しかしその後もイギリスにはずっと劣等感があった。つまり英語というものは、どうも文法も決まっていない。綴り字がでたらめであるし、発音と綴りと関係があまりないのが英語であり、書く人によってまた綴りが違うということ。綴りがインテリに劣等感を与え続けていた。やっと一七五五年にアメリカ生れでイギリスに帰化した法律家が隠居仕事にたのまれて書いた英文法が出、これが大変いいという訳でアツという間に、アメリカ・イギリスを始めとして全英語圏に伝わるようになったのです。イギリス人が英語に対してやや誇りが出て来たのは大体一七五〇年ごろからはつきり時点を指定することが出来ると思います。——（同前）といふ言葉です。

いまの日本は、明治二十二年帝国憲法が發布されたその日に『日本』といふ新聞を新たに刊行された、陸羯南先生（先生については前回紹介いたしました）がその創刊の辞に、「近世の日本は其の本領（筆者注・もち前、特色）を失ひ自ら固有の事物を棄つるの極、殆ど全國民を挙げて泰西（同注・西洋）に帰化せんとし、日本と名づくる此の島地（同注・島国）は漸く將に輿地図（同注・世界地図）の上にただ空名を懸くるのみならず」と日本の国情を憂へられ、「このままでは日本はなくなってしまう。そこで自分は『日本』といふ新

聞を発刊して、日本古来の道を説くのだ。」とのお言葉は、先生の孫や曾孫ひまこに当る私達に対して「まだやってゐるのか、そろそろ眼を覚ましたらどうだ、このままでは日本はとんでもない国になってしまふぞ」との切々たる叱声の様に思はれてならないのです。

外に向つて叫ぶ前に先づ自らをみつめよう

どんなに横文字を使ひ、髪を赤く染めたところで、まなこの色まで、毛唐人けとうじん（甚だ失礼な言ひ方だが）になれる訳はない。第一西歐人は、日本人の黒髪に大変憧れてゐるといふことを、外国に留学した友人の娘さん達から聞いてゐる。

私達日本人は、父祖から頂いた黒髪を大事にし、日本語を美しく喋れる様になることが世界に伍つしてゆく第一の資格であらう。そして私達青森県民は縄文の子孫であることを誇りとするといふのであれば、昔（せめて、父母や祖父母達が）遣つかつてゐた様な惚々ほれぼれとする下北弁や南部弁や津軽弁を復活させることが、私達の第一に心すべきことではないのか。

ねぶたや津軽三味線やお山参詣や三社祭やえんぶりや各部落に伝はる神楽かぐらをはじめ、津軽

塗りやコギンなどの工芸、版画や昔語りや、ことわざなどの尊いふるさとの伝承を大事にすることと併せて、津軽・南部の文化の中核をなすお国言葉を大切にしたいものと切に思ひます。

外に向って観光青森を叫ぶ前に――私は外に向って叫ぶ必要はないと思つてゐる。真に価値あるものは、自おのつから人の知るところとなる筈であるから――我が郷土に永い間伝へられて来た尊いものを先づ我々青森県民一人一人がとり戻す努力をすることではないだらうか。

あの美しい下北弁（私は四歳から十二歳まで下北郡大畑村字二枚橋――戸数七十戸――で育つた）や南部の方々のあの柔らかい語り、弘前の女性達の遣つてゐた様な優雅な津軽弁を何と少しでも私達はとりもどさなければならぬ。

青森県に来た人に、心をこめて下北弁や南部弁や津軽弁で案内してあげたなら、恐らくほのぼのとした思ひを胸にして帰られるであります。それは私自身の永い間の体験（私は十八回引越しました）であり、多くの友人達の語るところである。

私の家内は岡山生れの仙台育ちです。

戦後、二人で平賀町（大光寺）で五年ばかり百姓をし、五十代半ば頃、勤めの関係で三年

程青森市に住んだ経験はあるが、津軽弁はあまり知らない。(ちやこいどぎおべねばまいねもんだいねは)しかし二年程前、私の望郷の思ひ切なるにほだされ、三十数年の都住ひを引き払ひ、私に従つて青森に帰つて来た時、親戚友人達が帰山をよろこんでくれて歓迎の席を設けてくれた、その折りに詠んだ津軽弁の詩を恥づかしながら記し、お国言葉の効用を称たへたいと思ひます。

わのけやぐ 津軽弁の詩コ (高木恭造先生の詩)

うだひ出すたと思つたきや

隣のわのかが(嬢)泣いでらおん

わかるんだべな 何しゃべてるんだが

こころコあふとつだものなあ

わも胸あづくなつて

あっちば向いでらおん

文化の定義についての註記

戸田義雄博士は「諸民族の精魂」と題する論文「民族と文化の発見」(大明堂)のなかで、「そもそも日本文化とはなんであるのか、という問いに答えるためには：何よりも文化とは何か、つまり文化の概念を明らかにすることから始めなければならぬ」として次の様に述べてをられる。即ち

——そこで、まず、文化という言葉と切り離しては考えられないところの文化の科学である文化人類学での扱いを見てみる。文化人類学では、文化の概念は学者によって多少の出入はあるが、共通の認識としては、(一)文化を社会的・集団的に見ていること、(二)歴史的に獲得せられたもので、過去からの遺産であり、社会的伝統であるとする事、(三)統一体であるとする事、の三つが挙げられる。——と述べられ、註として左の如く附記してをられる。

——著名な代表的な文化の定義をあげる。タイラーによれば、文化とは「知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習、および社会の成員によって獲得せられたその技能および慣習

を含む複合的全体」(E.B.Tylor, *Primitive Culture*, 1871)。ロキーによれば、「個人が社会から獲得する全て」(R.H.Lowie, *History of Ethnological Theory*, 1937)。「社会的伝統の全て」(R.H.Lowie, *An Introduction to Cultural Anthropology*, new edit. 1940)。リントンによれば、「生活様式であつて社会の成員があずかる慣習、観念、および態度の組織せられた集積」(R.Linton, *The Scope and Aim of Anthropology* (The Science of Man in World Crisis, ed. Linton, 1945))。クラックホーンとケリによれば、「一集団の全員若しくは特定の成員があずかる傾向のある生活の為の陰陽の工夫の歴史的に獲得せられた一体系」(C.Cluckhohn, & W.H.Kelly ed., *Concept of Culture*, (Linton ed: *Science of Man in World Crisis*, 1945))。ボアズによれば、「一社会集団を構成する諸個人が集団的個別的に、彼らの自然環境、他の集団、その集団の他の成員および各個人が彼自身に關係しての行為を特徴づける精神的肉体的反応および活動の総体」(F.Boas, *The Mind of Primitive Man*, revised edit. 1938) ——

第三回

知解と体解と心解

何だか、あちゃこちゃになってしまひましたが、この辺で「文化」と「文明」の根本的な違ひはどこにあるかを探る手だてとして、人はどの様にして物を知るかといふ問題を先づ考へてみたいと思ひます。

私の尊敬する奥田克巳先生（『科学の限界と日本の教学』—善本社刊—の著者）から、物を知るのには三つの型があることを教はりました。その教へを私の拙い体験に照し合せながら申し上げると次の様になるかと存じます。

一つは「知解」と言はれるものです。

一般に使はれてゐる言葉で申し上げると「頭で知る」といふことであります。その特徴は、観察する物と、それを見る自分との間に一定の距離を置いて見る目から知識を得るといふ知

り方です。今日の大学をはじめ小学校に至るまでの授業は、この「知解」の伝授といって良いでせう。

二つ目は「体解」と言はれるものであります。

教室でスキートの滑り方をいくら教へ、その滑り方の筆記試験で百点採った（知解）としても、いざゲレンデに出てみれば、その知識は殆んど役に立たぬだけでなく筆記試験で零点に近かった児童や生徒の方が、はるかに上手に滑るといふことを私達は経験してをりますが、あれは「頭で覚える」ものでなく、「身体で覚える」ものだからです。これを「体解」と言ひます。

職人さんの技や芸事などは皆この「体解」による習得です。

私は、法隆寺の宮大工の棟梁をしてをられた西岡常一師（平成七年四月逝去）のお弟子さん・小川三夫氏の話を知ったことがあります。弟子入りをゆるされたあとに言ひ渡された言葉が「これから一年間、新聞、ラジオ、テレビ、さういふものは一切見ることならん、ただ刃物研ぎだけをしなさい」と言はれ、教へてくれたことと言へば、ただ一つ、自分で削られた鉋屑を一枚（それは透通る様に美しい一枚の紙の様であったと言ふてをられました）く

れたことだけだったさうであります。

小川さんは今、棟梁として何人かのお弟子さんを持ってをられるさうですが、源ちゃんと呼ぶ、学業成績零に近い子が一番弟子で、学校を終わった者は皆その子から教はると言つてをられました。小川さんは「無垢で素直が一番です。学校へ行ったものは知識（知解）が邪魔してゼロに戻すのが大変です。」と仰しやり「体解」の大事を教へてくれました。これが「体解」といはれるものであります。

孫の可愛さは、孫を持つてみなくては分からぬ（「眼まなこを入れでもいだくねきゃ」といくら説明されても、持つてみなくてはその可愛さは分かりません）。親の有難さは、親に死なれて初めて分る。親の有難さは、子を持つてみて初めて分る、といふのもこの「体解」でありませう。

良寛さんの話

いま一つの知り方は「心（信）解」と言はれるものであります。

良寛さんの弟に由之よしゆきといふ方が居られ、息子馬之助の放蕩ほうとうにほとほと困り果てて、兄の良寛さんに「何とか馬之助の放蕩が止む様に説教して下さい」と頼みますが、良寛さんは「分つた」、「分つた」といはれるだけで、いつまで経つても何もしてくれません。

さうしたある時、たまたま用があつて良寛さんは弟の家は何泊かされます。由之さんは今度こそ説教してくれるものと期待していましたが、何一つしてくれぬま、出立する朝になつてしまひました。

玄関に出た良寛さんは「馬之助すまんが草鞋わらぢの紐ひもを結むすへてくれぬか」とたのみました。たのまれた甥なまこの馬之助はいそいそと伯父良寛さんの草鞋の紐を結むすへてをりましたが、ふと気がつくとか襟元えりに冷たいものが落ちてくる。何かと思ひ頭を上げてみると良寛さんの両眼には涙が溢あふれてをったといふことであります。このことがあつてから馬之助の放蕩はピタリと止んだといふことであります。(上田三三生著『新編人物講話集』所載文を筆者要約)

この様な、ある一つの出来事や出合ひを契機として瞬時に「心の故郷」、即ち「真心」の世界に立ち返る様な知り方が「心解」と呼ばれる知り方であります。

昨日まで親を泣かせてゐた少年が、ある吹雪の朝早く、母が一生懸命に自分の弁当を作つ

てくれてゐる姿をみて、「あ、悪かった、この母を泣かせるとは何といふ親不孝者だ」と愕然として目覚め、生活態度が一変するといふ様な知り方がこの心解であります。

しからばこの三つの知り方の違ひは何処にあるのかをしばらく皆様と共に考へてみたいと思ひます。

カンニング

いい訳語がみつかりませんので、そのまま使はせて頂きますが、「生涯に一度もカンニングなどしたことはない」とか「心のささやきさへ聞いたことがない」といふ方がをられたら、その方とは杯を交す氣になれませんが、実はカンニングが出来るのは、今申し上げた三つの知り方のうちの「知解」に限られてをります。

疑問をお持ちの方は、入社試験で「青森県の市町村の名を知れるだけ記せ」といふ問題が出たとしたら、試験官が居眠りでもしてゐる間に、隣の友人から低い声でいくつかの町村の名を言ってもらつて、そ知らぬふりして、自分の忘れてゐる町村名のいくつかを答案用紙に

書き足すことは、その行為の善悪は別とすれば、それは出来ないことではないでせう。

これに反し、面接試験の時「花子さん貴女の素晴らしい笑顔（体解）を一寸だけ貸してくれない」と言はれても貸してやる事が出来ないでせう。また親孝行の真似をしようとしても、さき程申し上げた少年の様な愕然として己の不孝に気付く、といふ様な心の転換（心解）なしには永續きはしないでせう。

さうです。「知解」の第一の特徴は、人から借りて来れる、人に貸すことも出来る、といふことであります。授業に出てゐなくても他人のノートで勉強が出来るし、本やテレビやラジオでも勉強が出来ます。オウムの信者が大量殺人の猛毒サリンの製造法を知ったのもこの「知解」だから出来たのです。

第二の特徴は、人を選ばないといふことであります。これは第一の特徴と深い関係がありますが、その知識を本当に必要としてゐる人と、さうでない人とを自分で見分ける力をもつてをりません。今申し上げたオウムの信者がサリンの製造法を調べようとしたところ「お前にはそれを知る資格はない」と猛喝を食はす力を「知解」は持つてをりません。これが「頭でっかち」、津軽弁では「おべ」を生む所以ゆゑであります。

近頃は親が子供が悪いことをしたので叩かうとしたら「僕にも人権があるんだよ」と言つたとか、説教しようとしたら「民主的にいかうよ」と言つたとか、といふ悲しむべき事態が珍しくなくなつてゐるといふのも、この「知解」が、それを真に必要としてゐる人とさうでない人を見抜いて、猛喝を食はせる力を持つてゐないからであります。

なほ「人権」「民主主義」は、実は「知解」の産物であり、それ自体批判されるべき「文明」の落とし子であることは、後程ゆっくり触れさせて頂くつもりであります。

第四回

世の中で一番難しいこと

また横道に逸れて恐縮ですが、ソクラテスが真夏のある晴れわたった日に親友パイドロスと、アテネ郊外イリソス川のほとりを跣で歩きながら、人生を語り合ふ、プラトン著の「パイドロス―美について―」（岩波文庫・藤沢令夫訳）といふ本が好きでこれまで何度となく読ませて頂いてをります。

そのなかに、「この世で最も難しいことは何か」と語り合ふ場面があり、その結論として、「それは自分でよく分つてをらぬことを人によく分る様に話をする事だ」といふソクラテスの言葉が出て参ります。

春秋東興社社長の中島鉄心さんから、畏友・柴田重男さんを通して何か書く様にといふ依頼があり、友人の熱意にほだされて筆を執ったのはよいのですが、書き進むうちに、これは

大変なことを引受けてしまった、といふ悔悟の思ひに駆られてをります。それと言ふのも、「お前はいま、ソクラテスが言つてをられる自分でもよく分つてゐないことを、人に分る様に話さうとしてゐるのではないか、善は急げ、といふこともある、さつさと降参してしまつたらどうか」といふ心の囁きささやが聞こえて来てならないからなのです。何卒御同情の程よろしくお願ひ申し上げます。

さて、その『パイドロス』のなかに、文字を発明したテウトといふ神様が出て参ります。テウトは当時エジプト全体に君臨してゐた王様の神であるタモスのところに行つて、「王様、この文字というものを学べば、エジプト人たちの知恵はたかまり、もの覚えはよくなるでしょう。私の発見したのは、記憶と知恵の秘訣なのですから」と、得意気に申し上げたところ、タモスから次の様なお叱りを頂きます。

——「たぐいなき技術の主テウトよ、技術上の事柄を生みだす力をもつた人と、生み出された技術が、それを使う人々にどのような害をあたえ、どのような益をもたらすかを判別する力をもつた人とは、別の者なのだ。いまもあなたは、文字の生みの親として、愛情にほだされ、文字が実際にもつてゐる効能と正反対のことを言われた。なぜなら、人々がこの文字という

ものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人たちの魂の中には、忘れっぽい性質が植えつけられることだろうから。それはほかでもない、彼らは、書いたものを信頼して、ものを思い出すのに、自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり、自分で自分の力によって内から思い出すことをしないようになるからである。じじつ、あなたが発明したのは、記憶の秘訣ではなくて、想起の秘訣なのだ。また他方、あなたがこれを学ぶ人たちに与える知恵というのは、知恵の外見であって、真実の知恵ではない。すなわち、彼らはあなたのおかげで、親しく教えを受けなくても物知りになるため、多くの場合ほんとうは何も知らないでいながら、見掛けだけはひじょうな博識家であると思われるようになるだろうし、また知者となる代りに知者であるといううぬぼれだけが発達するため、つき合いくい人間となるだろう。」——とたしなまれるところが出て参ります。

「知解」と「心解」の違い

前回、物を知る方法に、「知解」と「体解」と「心解」の三つの型があること、並びにそ

の違いと特徴につき、いくつか述べさせて頂きましたが、「知解」のもつ欠点の大事を、タモスは「知解」の最大武器たる文字の持つ欠点に置きかへて我々に警声を発してをられるのだ、と受けとることが出来るかと思ひます。

さて次に、「知解」と「心解」の違いの大事の一つは、「知解」は物の意味を知る、即ち理解の段階で止るに反し、「心解」は物のいのちの本源に立ち返る様な知り方である、といふところに大きな特徴があります。

児島乙子さんといふ方の詠んだ詩に「肝苦りさ」と題する次の様な詩があります。

「肝苦りさ」といふのは 沖繩の言葉で

「胸が痛い」いふことなんやて

沖繩には「可愛想」といふ様な

同情の言葉はないんやて

他人のことを自分のこととして

初めて言へる「肝苦りさ」

私はこの言葉を心から言へる様になりたい

といふ詩であります。

同情といふのは、その人が何で悲しんだり悩んだりしてゐるのかの理由が分る、即ち理解出来るといふ段階の心情であるに反し、「肝苦りさ」といふのは、相手の悲しみが我が悲しみとなる、他人事とはどうしても思へない、自他一体の心情となる「心解」の世界を言ふのでありませう。

分り易く申し上げますと、お腹なかを空すかして困まどつてゐる人に出会った人が、たまたまお握りを二つ持つてゐたとすると、そのうちの一つは分けて上げるが、もう一つのお握りは自分の為にとつて置く、といふのが同情の段階で、一つしかないお握りを半分はんぶんに割わつてあげる、さらには母が子の為にする様に自分は食たべずに、そのお握りを与たまへてしまふといふのが、この詩で「肝苦りさ」と言ふ言葉が表現する「心解」(慈悲)の世界でありませう。

昭和十二年頃青森県は大変なけがじ（飢饉）になりました。南部地方は殊にもひどく、お昼の弁当を持って来れない児童が続出しました。県ではその対策として昼食にお握りを配ることにりましたが、ある小学校の四年の女子の児童は、そのお握りを食べないといふのです。先生が大変不審に思ってその児童の家へ行ってみたところ、その児童は学校で頂いたお握りを大事に持って帰り、学校にまだ行ってゐない二人の幼い弟妹にそのお握りを分けて食べさせてゐた、といふ話を私は中学の二年生の時に父から聞いたことを今でも忘れることは出来ません。

この四年生の児童の姿が、この「肝苦りさ」を体現してゐる観音菩薩様そのものの姿ではないだらうか。この弟妹は、姉から身体を養ふ栄養と共にこの世で最も大切な、他人に対する思ひやりといふ、真心を長養する養分を別けて頂いたのだと思ひました。この弟妹は、よしんば、何の教育も受けずそのまま世の中へ出たとしても、慈悲深い惚々とする様な青年・婦人に成長することだらうと思ひました。この四年生の女子児童の様な心情を体現することが「心解」と呼ばれる世界であります。

最近自然保護といふことがよく言はれます。「自然征服」といふ考へ方とは違ふのだ、といふことでせうが、実はこの二つは表現は異つてゐても、その境地は同根であります。即ち双方共未だ「知解」の段階にあるからであります。

また近頃「共生」といふ言葉をよく聞きますが、これも同根の「知解」の段階であります。その理由は次回に、詳しく述べさせて頂くつもりであります。が、「保護」といふのは、自分より、か弱い者をかばふといふことでせう。

自然は、そんな我々人間がかばふべき、か弱い存在なのか、自然によつて生かされてゐるのが実は、我々人間の方ではないのか、自然は我々人間が合掌低頭すべき生命の根元ではないのか。(それなくして一瞬たりとも私達人間が生きてゆくことが出来ない、空気や水を例にとつてみただけでも、それは大自然からの大きな恵みではないのか)。小鳥や花や草木など、この世の生きとし生けるものは、私達人間と同じく、皆この大自然の恵みによつて生れてきた生を共にする兄弟ではないか。これを妙法蓮華經の「隨喜功德品」のなかで、お釈迦様は共生—共生ではありません—と言つてをられるのだと聞いてをります。

第五回

ヒラリー卿の言葉

私はエベレストの登頂に世界で初めて成功したヒラリー卿が、自分の登頂の様子を写した録画に、「征服」といふ題名が選ばれたと聞いたとき、涙を浮かべながら語ったと言はれる次の言葉を忘れることは出来ません。即ち、「私は山を征服したのではない。山によって山に助けられて、静かに登ったおかげで頂上を極めることが出来た。若し征服の意思が覗いたら転落して今日はないだろう」といふ言葉です。私はこの言葉を聞いた時、ヒラリー卿に対し、自分の祖先達に会ってゐる様な懐かしさと敬虔な思ひに浸されました。

そして唐突の様ですが、直ちに

春の野に董採みにと来し我ぞ野をなつかしみひとよ宿にける（萬葉集卷八）

といふ山部赤人の歌が、つれて行基様の

山鳥のほろほろと鳴く声きけば父かと思ふ母かと思ふ

の歌が思はれたのでした。

私はヒラリ―卿に、山の声がきくと聞えたに相違ないと信じました。

昭和天皇様は「雑草といふ草はない。どの草も皆それぞれ名前を持つてゐる」と常々仰しやつてをられたと聞いてをりますが

秋ふくる行徳の海を見わたせばすすがもはむれて渚にいこふ（昭和五十七年）

といふ御製（行徳野鳥観察舎にて）を拝誦致してをりますと、「すすがもの群は」と詠まれず、「すすがもは群れて」とお詠みになられる御調のなかに、一羽一羽のすすがもに寄せ給ふ広

大仁慈の大み心が伝はつて来るを覚え肅然とせしめられるのであります。

本居宣長は「そもく天地あめつちのことわりはしも、すべて神の御所みしむぢ為にして、いともく妙たへに奇くしく、靈あやしき物にしあれば、さらに人のかぎりある智さとりもては、測はかりがたきわざなるを、いかでかよくきはめつくして知ることのあらむ」(直毘靈なほびのみたま)と言つてをられますが、自然といふ大物は到底我々人間の理知を以つては測り知ることの出来ぬ存在であります。人知(知解)の世界をさまよひ歩き、ほとほとに疲れ果てた身に遠くより聞えてくる天の囁ささきとでも言ふべきものを、我々の祖先達は聞き合掌低頭せしめられた(心(信)解)のではないでせうか。

「自然征服」といふ同胞の思ひ上りの心情に対し、ヒラリ―卿がいかに悲しい思ひをなされたか、「知解」を至上とする現代の風潮に、人類の暗澹たんたる未来を予見し、悲しみの涙を流さずにをれなかつたのではないでせうか。

自然保護

これに反し「自然保護」といふ言葉は、如何にも自然を大切にする心情から発した言葉の様に見えますが、自然を人間の手で守れるもの、守ってやらねばならぬ、か弱いものと見る姿勢は、自然は征服出来るもの、征服すべきものと見る姿勢（自と他を分つ姿勢）と極めて親しい間柄にあります。そもそも自然とは何か、といふことを我々人間は全く分つてゐないといふ謙虚な姿勢が足りない点で同根です。

科学の世界（知解）に限つてみても、現在まで人類が（生物学上）発見した地球上の生物は、百五十万種程に過ぎず、しかし実際には、数千万種程の生物が居るであらう、とは生物学者、岩槻邦男氏のお話であります。その数千万種にも及ぶ生物を、適切に保護する智慧を我々人間が持ちうると考へるのは、健全な魂の持ち主である限り出来ない筈であります。

益虫と害虫

私が小学生時代、試験用紙に沢山の虫の名前が書いてあり、「右のなかから益虫を選び出して記せ」といふ問題が出て、小さな頭を悩ませましたが、その疑問は、今でも、と言ふよ

りは長ずるにつれ、いよいよ大きくなるばかりでした。果して人間の人知でさういふ区分を
していいのだらうかといふ深い疑問であります。

先日アイヌの媼おきなの方の話がテレビで放映されましたが、その方は「この自然界には決して
害になる生物はをりません。それを食べれば人が死ぬ様な植物（申し訳ないことですが、そ
の植物の名前は忘れてしまひました）でも、芋を植ゑるときにはその植物を埋めた土の上に
植ゑるとよく稔り、虫も寄りつかないのです。私達アイヌ人は、この自然界には絶対害にな
るといふ生き物はゐないと信じてゐます」と言はれた言葉が大変懐かしく聞え、私の心を温
めてくれました。

頭山とうやま満翁みつゑは、蚊に手足を好きな様に食はせてゐたと聞きますが、それ程の境地にはなれ
ない迄も、蚊をみれば殺虫剤を吹きかける様な「知解」の世界を脱して、せめて昔（私の幼
い頃まではさうでした）の日本人がしてゐた様な、除虫菊だけで作った線香―蚊遣り―（煙
を吸った蚊は失心して一度地に落ちますが、やがて息を吹きかへしてまた飛んでゆく、そん
な線香でした）を焚く様な慎しみ深い生活を取り戻したいものと切に思ひます。

「共生」といふ言葉について

また最近「共生」といふ言葉をよく聞きます。これを言ひ出された方は恐らく、深く自然と人生の関係を考へられて「自然はわが友である、自分と一体である」との痛切感情（心解）を伴った表現として「共生」といふ言葉を使はれたものと思ひますが、近頃は、さうした自他一体の痛切感情を伴はぬ、一つの觀念として軽々しく使はれてゐる感じがしてなりません。法華経のなかに、法華経を世に広むる功德を、お釈迦様が弥勒菩薩に説いて聞かせるところが出て参ります。（随喜功德品）

お釈迦様は、或る人が「法華経といふ有難いお経があります。一緒に行つて聴きませんか」と言はれて、「それでは聴きに参りませう」と、法華経の教へをしばらくの間でも聴いただけで、その人は「身を転じて陀羅尼菩薩と共に一処に生ずることが出来ませう」と言はれたところから「共生」といふ言葉が生まれたと聞きました。（『聖徳』所載・法隆寺長老柘田秀山師のお教へによる）

数学者の岡潔先生は「数学の問題を考へ抜いて、理知の限界を通り越え、ほのほのとその

答へが訪れて来る時は、草一本さへ踏めぬ境地になる」と仰しゃつてをられます。これが「共生」と言はれる境地を体现された方の「心（信）解」の姿だらうとつねづね敬慕せしめられてをります。

私の住んでゐる処は「月見野」といふ美しい名を持った里です。そして隣りの里は「蛍沢」といふ「月見野」に劣らぬ慕はしい名の里です。昨年隣近所の方々とその蛍沢の上の溪流に蛍狩りに出かけました。少年時代蛍のあとを追つて歩いた頃の懐かしい思ひ出が甦り、時の移るのも忘れて夏の一夜を楽しみました。

私の団扇に二匹の蛍が飛び移り、帰る迄離れませんでした。私はふと亡くなった父母かと思ひました。

「共生」についての註記

広辞苑には、「共生」とは①共に所を同じくして生活すること。②別種の生物が一所に棲息し互いに利益を得て共同生活を営むと考えられる状態、やどかりとイソギンチャ

クの類とあり、そのあとに、「共生感」として、「人間が自分以外の事物と共通の生命をもつとみなす未開人の世界観」とあります。

第六回

戦に敗れて

私は先の大戦で、昭和十七年十月、北部第十九部隊（弘前）に入営し、やがて幹部候補生として東京の機甲整備学校で訓練を受けてをりました。

しかし戦局は容易ならぬ状況に立ち至り、日本は航空兵が不足してゐるといふことを知り、勇躍志願して、戦斗機乗りとなり、首都防衛の任に当つてをりましたが、明日は沖繩から進攻してくる米軍を迎へ撃つため、熊本県の健軍飛行場へ転進するといふ前日に終戦を迎へました。お国の為何一つ、お役に立つことも出来ぬまま敗戦の日を迎へたわけであります。

私は神洲不滅を信じてをりました。私にとって神洲不滅とは、日本は戦争には絶対負けぬ国であるといふ信でした。それが敗れたのです。私は生きてゆく力を失ひ、一たび死を決意しました。

しかし、その決意を青森中学時代の校長・吉田弥三先生に打明けましたところ、「そんなに死にたかったら今ここで死ね、俺が介錯してやる!!」との一喝で決意が殺がれ—その程度の決意だったのか、とお笑ひになる方もをられませう—、先生によつて新たな生を恵まれたのでした。(私は東京都の調布飛行場で終戦となり、校長先生はすぐ近くの吉祥寺に住んでをられたのです)

人にとって良い師を持つほどの幸はありません。私は、小学・中学・大学と進むなかで、それぞれに良い師に恵まれましたが、なかでも生涯お慕ひ申し上げお世話になったのは、吉田校長先生と奥様でした。中学時代もよく友人たちと誘ひ合つてお宅に遊びに行きましたが、先生が東京へ移られたあとも、学生時代は勿論のこと、会社勤めをする様になつてからも、地方に勤務してゐる時は上京の度に、そして東京勤務になつた後は折にふれてはお邪魔し御教導を賜りました。

なかでも忘れることが出来ないのは、私が三十五歳の頃、北海道の山中で発電所の建設に従事してをりました折、東京の本社へ出張を命ぜられ、先生のお宅に泊めて頂いた夜のことであります。私が泊めて戴いたのは、先生の寝室のすぐ隣りの部屋でしたので、先生と奥様のお声が自然に聞えて参ります。

やがて奥様の「今日一日有難うございました」と言はれるお言葉が聞えて参りました。さうしましたら、校長先生が「何がそんなに有難いんだい？」と言はれます。奥様は「さうぢやありませんか。かうして貴方が無事お勤めからお帰りになり、そして子供達も皆元気で、こんなに有難いことは無いぢやありませんか」と言はれます。校長先生は「そんなことか」と、とぼけた様な返事をなさってをられました。そのお声から奥様の優しい心根をいとしく思つていらつしやるお気持ちに伝はつて参りました。やがて話声が聞えなくなりました。

私は今でも「今日一日有難うございました」と言はれた、奥様の世にも美しい声音を忘れることは出来ません。そしてその夜私は、極く当たり前の事のなかに、人生の大事がひそんでゐることを教へて頂いたのであります。

しかし、この境地になることは至難の業わざであります。折角校長先生と奥様から、有難い

導きを賜はりながら、いまだに世の中や、妻や子らに不満を抱き、愚痴ばかり溢こぼしてゐる自分を省みるとき遣やる瀬せない思ひに駆られますが、先生と奥様はそれぞれ慈愛深きお家庭の芳縁のなかに生育なされ、やがて良き伴侶を得られ、良いお子達に恵まれていよいよ、「無事」のなかに人生の真の幸があることを、「心（信）解」なされたのだらうと、敬慕の念いままほ切なるを覚えます。

「父、母は大事にせよ」「今のひとときを大事にせよ」「ごく当たり前のことに感謝せよ」とは、いくたびか学校で教へられ、知識としてその文言をよく知つてをったとしても、毎夜、寝に就くとき、自おのづから感謝や祈りの言葉として口遊くちずさまれる迄に至ることは、身に沁みて、その大事を「心（信）解」した者でなくては出来ることではありませんまい。先生を思ひ出すとき、きつとその夜のことつが連れて思ひ出されてくるのであります。

帰郷を決意し百姓になること

話は逸それましたが、先生の「一喝」によつて、いま一度生き直さうと思ひ立った時、私の

行く手を導いて下さったのは、

産みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける（明治三十七年）

といふ、「地」と題された明治天皇の御製でございました。私は今迄、机上でだけの勉強（「知解」の世界）しかして来なかつた。よし!! この際この御製のお教へのまにまに土を耕してみよう。そしたら、何か観えてくるのではないか。「神洲不滅」と仰せられた御神勅の眞のころといふものが観えてくるのではないか、と百姓になることを心に決し、父の故郷平賀町大光寺に帰って参りました。

帰るや否や、村の民家の二階に間借りして、父祖伝来の田を、小作人からいくらか返して貰つて、田造りの準備に入りました。先づ実行したことは、肥料にするために道路に落ちてゐる馬糞を拾ふことでした。村人達は「ホラ、気狂ひが村さま来たど!! 高等工業まで出た男が百姓だなんて出来るもだな、見でろ!! そのうちにすばさみとって（尻をまくって）逃げで行くに決まつてらね!!」と噂しました。

冬には肥樽こんだるを二本つけた櫛せりを小作人から借りて、二里ばかり離れた弘前迄、便所汲みに通ひました。しかし便べんは当時大事な肥料であつた為に、何処の家でも見知らぬ者には容易に汲ませてくれません。「餅か何か持つて来たな？」と言はれては門前払ひです。

やつと親類の家を捜し当て、「今度だけだはでの」と言はれながら、やつと汲ませて貰ひ、吹雪のなかの雪道を帰りますが、昼飯は、拳大こぶしの、それも大根の葉が半分以上も入つたお握り二個だけでした。(留守をしてゐた祖母と家内は米粒が浮かんでゐる様な大根菜だらけのお粥かゆをすすり、私にだけは堅い握り飯にしてくれたのです)、ですから途中腹が減つて減つて倒れさうになります。やつと村へたどり着き、家の框かまちを跨またぐや否や、そのまま倒れてしまふといふ有様でした。

そんなことを重ねながら、やがて親友も出来、村の方々の暖かい励ましをうけながら、生まれて初めての田造りに家内と共に精魂を傾けました。

さうしたことを続けてゐるうちのある日、私が心に久しく蔵して来た、「神洲不滅」についての答へが、ほのほのと訪れたのでした。それは後程述べさせて頂くつもり、一瞬のひらめきによる覚醒、とは違ひまして、桜の花咲く庭におほる月夜が射してくる時の様な、心

身を何か温かなものが包んでくれる様な、ほのぼのとした神の啓示の訪れでした。

それは日本がこの度の戦に負けたのは、天子様の我々国民を子の如くに慈しんで下さる大み心に変りは無かったのに、それに応へまこたつる我々国民の真心が足りなかったことによるのでなかったか、といふ啓示だったのであります。

天子様と我々国民が、親子の様に慕ひ合ひ慈しみ合ふその強い繋りつなが、それが国体といはれるものの核心であり、その繋りが揺がぬ限り、神洲は不滅である、といふみ教へだったのであります。皆様はお笑ひになられるかも知れませんが、このほのぼのほのぼのと訪れた啓示によって私の積年の疑問が、嶺を被おほつてゐた深い霧が晴れてゆく様に解け、清々しい気持に恵まれたのであります。

第七回

百姓をやめ大学へ

私は生涯、百姓をするつもりで居りましたが、食べてゆく為には、それ相当の田畑が必要です。私は開墾して百姓をしたのではなく、父祖が残してくれた田をいくらかづ、小作人から返して貰って百姓をしてゐたのでした。ですから私が百姓として自立して行く為には、小作人から相応の田を返して貰はなくはなりません。しかし田を返させられる小作人は小学校しか出てをらず、その田を返せば食べて行けなくなります。私は少なくとも専門学校まで行ったのですから、いざとなれば何処どこかで働くことも出来ます。その事に気付いた時、私は百姓を止め、いま一度勉強し直さうと決心し、子供は既に三人ありましたが、百姓五年目にして、決然村を去りました。

死にももの狂ひの受験勉強三ヶ月、運よく、昭和二十五年春、東北大学法学部に入学しました。

大学時代私の心を捉へたもの

入学してから私の心を捉へて離さぬ問題は、日本の国体は守りぬけるのかといふ問題でした。当時、世の中は見る見るうちに變化し、街には三輪車が、やがて自動車があふれる様になり、人々は口を開くと「民主主義」を称^よへる時代となり、世界も第一次大戦以来多くの君主国が次々と姿を消し、民主国（共和政体）へ移りつつありました。法学部で勉強するうちにも、いつもこの問題が心を捉へて離れませんでした。私は幾冊か本も繙^{ひもと}き、また朝夕折にふれてはこの問題を考へ続けましたが、明確な答へは得られませんでした。大学を卒^をへてからも、この問題は私の心を捉へ続けました。

さうした永い年月を経て、私が四十三歳の時でした。ある朝、神棚の前でいつもの如く、明治天皇の御製を拝誦してをりましたところ、不思議に、「國」と題された

世はいかに開けゆくともいにしへの國のおきてはたがへざらなむ（明治四十四年）

といふ御製が出て参りまして、その御製を拝誦してをりますうちに、異常な戦慄の様なもの
が身体をつきぬけました。その瞬間、明治天皇の大御姿おほみすがたが神棚の前に顕あらはれ、私に向つて「世
の中は如何に進んでも、万世一系の皇統を戴く、天皇を中心とするこの尊い国柄くにがらは決して
変へてはならぬぞ。長内しつかりたのんだぞ」と仰おほせられた様に思はれたのであります。こ
のことは私の心の秘密として、決して口外してはならぬことであり、明治天皇の大御稜威おほみいつを
汚すことになることを畏おそれますが、「心（信）解」といふものは如何にして恵まれるものか、
をお伝えしたい一念で、口憚はばかれることを申しあげた次第であります。

それと申しますのも先日、高橋竹山師ちくざんの「三味線の本当のところは弾ひいだことのある人で
なければわからねえ、いちばんよくないのは人の話を聞いてしゃべることだ、人の話を聞いて
でなんぼ上手にしゃべったり書いてだりしても駄目まいね」（『津軽の三味線弾き』長谷部日出雄著）
といふ言葉を読んで胸を打たれ、実際身につまされた体験を語るしかないのだと思はせられ
たからであります。

ある神秘的体験

私は「君主政体」と「民主政体」の優劣について「知解」の世界をさ迷ひ歩き、ほとほとに疲れ果ててゐた時に、天の声を聞く思ひで、明治天皇の大み声を聞いたのであります。

親鸞上人は「歎異抄」のなかで、「親鸞にをきては、ただ念佛して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念佛は、まことに浄土にむまるゝたねにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまひらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自余の行をばげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはゞこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。」（第二章）と言つてをられるのであります。

自余の行―自力（修業）と人智（知解）―の限界を身に沁みて自覚せしめられた親鸞が、つひに心から信ずる方（法然上人）のお言葉を信ずるしかないといふところまで行きつかれ

て、吐かれたこの言葉（独白）が、私に「お前の一番お慕ひ申し上げてゐる、明治天皇の
み言葉を、ただ信ぜよ」との啓示を恵んでいただいた思ひがするのであります。

その時（それは瞬時の間でした）恵まれた、ひろびろとした気持は嘗て味はったことのない
様なひろやかな安らぎを伴ふものでした。私は二十年近く「知解」の林をさ迷ひ歩き、つ
ひに「心（信）解」の世界を恵まれたのであります。

少年時代、「幸福の青い鳥」を外に求めてさ迷ひ歩いたチルチル・ミチルの兄弟が、疲れ
果てて我が家に帰ったときに、最も当り前の自分の家庭のなかに、真まことの「幸福の青い鳥」が
居ることを発見した物語りを聞いた時の感動が甦よみがえってくる様な思ひでした。

概念の遊戯を逃れて

さうした啓示を頂いて、ふと気付いてみると私は丁度、果物と野菜の優劣について考へて
ゐた様なものでした。まことに他愛もない概念の世界での優劣に、骨身を削る苦勞をしてゐ
た訳であつたのであります。果物屋に行つて、「果物を下さい」と言つたり、八百屋さんに行つ

て「野菜を下さい」と言ったら笑はれるでせう。「俊ちゃん欲しいのは大根ですか、りんごですか」と問ひ返されるに決つてゐます。

君主制、民主制といふのも概念です。そんなものは実際に存在しないのです。実際あるものは、アメリカといふ国であり、イギリスといふ国です。そして一番肝心なことは、アメリカはアメリカ人にとつて国であり、イギリスはイギリス人にとつて国であるといふことです。私達日本人にとつてはアメリカもイギリスも国ではありません。私達日本人にとつてお国とは、天子様を中心に喜びも悲しみも共にしつゝ、同一国語で語り合ひ、この美しい国土に共に住む同胞との結びつきを感謝し合ふ、我が祖国日本のみであります。

私の母は一人しか居りません。母一般といふものは存在しない概念にしかすぎません。(試みに辞典を開くと「母とは両親のうちの女の方」としか書いてありません)

小さな児が、母親の姿をみつめて遠くから「お母さん!!」と呼びながら、いまにも転びさうにして走つて行つて母親の懐に抱きつく。「お袋」といふ言葉を口にするだけで懐かしさに胸が潤む、その様にこの世で最も尊いお袋の定義が、木で鼻を擗む様なものであることを知つたなら、所謂学問(知解)の世界の底も知れるといふものでせう。

国も同じです。私達にとって国とは日本しかないのです。久保木君のお母上は素晴らしい方だと尊敬はしても、自分のお袋にはなれないといふことをしつかり自覚してゐることが、人として子として最も大事な心構へである様に、私達にとって逃げることも避けることも出来ぬ唯一の祖国は、この日本しかないことに深く気付き、フランスの日本大使だったポール・クロードルが「どうしても亡びて欲しくない国」と言はれた如く、心ある外人も賞讃して止まない、天照大御神様あまてらすおほみかみ以来、天子様を宗家と仰ぎ、そのもとに睦み合つて来たこの尊い国柄を守り通すところに、我々日本人の真の幸があり、それが世界、人類に対する日本民族の責務であるとの、啓示による「心（信）解」だったのであります。

第八回

知解と体解と「心（信）解」の違ひのまとめ

前回までは、私の拙い体験を申し上げながら、知解、体解、「心（信）解」の特徴とその違ひについてその都度述べさせて頂きましたが、ここで一応そのまとめをして置きたいと思ひます。

その第一は、知解は人智（意識）を働かせて思索するところから得られるに反し、体解と「心（信）解」は、意識の働きといふ仲介を必要とせず、瞬時に或ひは、ほのほのと向うの方から自おのづから訪れて来るものであるところに大きな違ひがあります。殊ことに「心（信）解」は異常な感動と共に、直感的に天の声とでも言ふべきものが、真心に響いてくる——真心をゆさぶると言った方が良くも知れませんが——そんな知り方があります。知解（思索）の世界をさまよひ歩き、ほとほと疲れ果てた時、また思ひもかけぬ時に遠くから母の呼ぶ声が聞えてくる様

に、天の聲が、大きな喜びを伴って聞えてくる、そんな知り方であります。

第二の違ひは、知解は自分から、能動的に知らうとしなければ得られないものであるのに反し、体解と「心（信）解」は向うから語りかけて来ると申しますか、遠くから呼びかけてくる様な受動的な知り方であります。

第三の違ひは、知解は新たなことを知ったといふ知的満足や知解の産物である、電気や機器や電話や電信や化学製品などの便利なものの発明や、応用による生活力を我々に与へてくれるに反し、「心（信）解」は感謝や感動といふ人として生きてゆく力―生氣とでも言ふべきもの―を生きる智慧と共に我々に恵んでくれるところに大きな違ひがあります。生活力があつて大きな家に住み、自動車を何台も持ち、家中便利なものが揃ひ、人も羨む様な食事をしてゐながら、親子喧嘩が絶えず、隙間風が吹き荒れてゐる様な家庭もあります。それに反し、生活は貧しいながら、父母を大切にし、兄弟仲よく、人も羨む様な睦まじい家庭を営んでゐる方々も居られます。

その違ひは、一体何処から来るのかといふことに私達日本人は、今漸く気付き始めた―戦後追ひ求めて来た知解の産物である、科学文明の発展に基く、経済力の発展に伴ふ飽食の夢

から醒め、我々の祖先達が大切に出来た「勿体ない」と言ふ言葉に象徴される様な、物の生命をいとほしむ心解と体解の世界の大事に気付き始めた—と言つていいでせう。

最近、「心の教育」といふことが言はれ始めてゐるのも、その大事に気付き始めたことの一つの現はれでありませう。(しかし「心の教育」とは、然く口で言ふ程容易いものかどうか、このことについては、後程あらためて考へを述べさせて頂くつもりであります)

第四の違ひ

次に知解(知識)は、それをいくら多く身につけても、生活態度が変らぬだけでなく、高慢になり勝ちになるに反し、「心(信)解」と体解を恵まれた方は見違へる様に謙虚しくなり、懸命となるといふ様に、生活態度が一変するといふ特徴を持つてゐることです。

吹雪の激しい朝まだき、自分の弁当をつくるために、母親が凍てつく台所に立ってゐる姿を見て、「あ、自分は何といふ親不孝者だ!! こんな母を悲しませることをして」と、愕然として目覚めた(心解した)少年の話をも申し上げましたが、私も幼い頃にそれに少し

似た体験をいたしましたので恥かしながら申し上げませう。

先にも一寸申し上げたかと思ひますが、私は、四歳から十二歳になる迄、下北半島の大畑村（今は町です）の分村・二枚橋といふ戸数七十戸ほどの漁村で育ちました。父がその分教場の教師になったからであります。ですから私が小学校に入ることになれば、その分教場に入るのが順序です。しかしどうした訳か（父は自分の子供は教へにくかったからでせうか）、私は一年生になると同時に、小さな峠を一つ越えた一里近くある本校に通はせられたのでした。

夏の間は、凧たこの日は磯いそを通過して、蛸舟たこふねや珍らしい貝殻を、ときには若布わかめなどを拾って帰ったり、陸の道を帰るときには、峠の土場に積んである、あすなろの丸太の上に登って弁当を開きながら津軽海峡に眺め入り、大きな船が沖を通るときなどは、その姿が見えなくなるまで見惚れて時を過したりしましたが、冬になると、雪の中の山道を通って学校へ通ふのがつらく、或る大雪の朝、「わ、学校さ行きたくね、行きたくね」と、ごんぼをほり、母を困らせてをりましたところへ父が出て来て、私をいきなり裸にしたと思ふや窓の外の雪の中へ放り投げ、大きな火箸ひばしを持って来て尻を叩きながら「これでも学校さ行がね、て言ふが!!」と

怒鳴りつけました。私は、おっかなくて、おっかなくて「今度から学校さ行がねって喋らねはで、堪忍してけろ!! 堪忍してけろ!!」とあやまりました。

叩くなら学校から帰ってからにしろ

それから泣きじゃくりながらとほとほと、一人で雪道を漕いで学校にたどり着きました。当然遅刻です。担任の先生が「どうして遅刻した?」と言はれるので、今朝あったことの一部始終を話しました。さうしましたところ、先生は「今日家へ帰ったら、お父さんに、今度から叩くなら学校から帰ってからにする様に伝へなさい」と言はれました。私は家に帰るや否や父に「今度から叩くなら学校から帰ってからにしろ!! っって先生喋ってらきゃ」と告げました。父はただ頭を掻いてゐるだけでした。

私は父のこの折檻セツカにより学校へ行かないことが、どれ程いけないことなのかを身体(体解)と心(心(信)解)に沁みて知らされたのでした。その日からは、どんな雪の日でも「学校へ行きたくない」と決して言はなくなりました。私はそのことについて父を怨んだりした

ことは一度もありません。それは一生にただ一度、その時その場面でしか出来なかった、父と私の真剣勝負だったので。

父は後に、私が中学生になった時、私を自分の前に正座させて「今日からお前は中学生だ、今迄はいろいろ細かい事を注意して来たが、今日からは父は何も言はぬ、自分で判断して行動しなさい」と、言ひ渡されました。私はその後生涯、父母から「勉強しろ!!」とか「遊んでばかり居るな!!」などといふ小言を言はれたことはありません。

父は僻地教育に生涯を捧げ、昭和三十九年に六十七歳で世を去りましたが、父が二枚橋分教場時代に詠んだ和歌を、教育に於ける大事はなにかといふことを示唆してくれる様に思われますので、その和歌を記させて頂き今回の稿を終りたいと思ひます。

長歌

山奥の 小さき校舎に うち集ひ いとやさしくも 物学ぶ 単級の子ら 人の世に
かはゆきものの 数あれど よろづに勝りて いとしきは この子らならし 朝まだき
始業のベルに 組々に 列をつくりて 教室に ならび終り 壇上に われの立てれば

一様に 視線そそぎて 「おはやう」と あいさつをなし 業終へて 帰るまきはも
さよならを 皆忘れずに 礼しつ つ 手と手をとりにて かへりゆく 姿のいと かはゆ
しも 品よき着物は 身につけね 品よき靴は 足にはつけね 保つ心は 神のごと
澄める心は くもりなき 鏡のごとき この子らに 幸多かれと われは祈るも

反 歌

さいならをいつも忘れず帰りゆく単級の子らはかはゆきろかも

(単級：分教場で学年の違ふ子供たちが一つの教室で過すこと)

第九回

知解と体解と「心（信）解」の違いのまとめ（その二）

前回私の少年時代の体験をお話し申し上げましたが、そんな話を致しますと、多くの方は「どうしても一年生になったばかりの子が、学校へ行きたがらないからと裸にまでして雪に放り投げ、火箸で撲つ様なことをしなくてはならないのか、もっと適切な方法はなかったのか」とか、挙句の果には、「暴力は是か非か」といふ様な抽象的な問題に摩り替へてしまひます。

さうです。「知解」と「体解・心解」の違いの第五は、知解の世界に於ては抽象的な物の考へ方をするといふことであります。この作用が科学を今日見る様な段階まで発達せしめた原動力であり、心の働きの重要な部分を占めてをることは御承知の通りであります。それは、血の通つてゐるありのまま、の現実をそのまま、うらやかな眼で観照する心解と異なり、

生きてゐるものを分断し、分析し、その部分に於ける真理を探究するところから得られる理屈であります。

「あ、それは俊平さんとお父様との間に、火花を散らした真劍勝負だったのだなあ、俊平さんもお父様もどんなに苦しかったらう。しかしそんな真劍勝負があつたからこそ俊平さんの今日があるのだなあ!!」と素直に受けとめる忍耐がなく、すぐ「子を撲つことは果して良いことかどうか」といふ抽象的問題に摩り替へてしまひ勝ちです。

知解の世界を代表する科学は、現象のうちの特殊なものは切り捨て（捨象して）、共通するもの（普遍的なもの）だけを抽出して、論を組立てることによつて成り立つことを見れば、この様なことが人生問題の処理についても起りさうなことは納得されるでせう。

物事の生きたる姿をそのまま直感的に感得する総合的観照の世界—心解の世界—は、理智の働き、即ち意識的活動を仲介とせず、直ちに真心で受けとめるところにその特徴があります。

分教場で学んだ者は、人生問題につき抽象的思考はしないといふこと

私は、面白い話を、青少年教育に生涯を捧げてをられる柴田学園の理事長、今村城太郎さんから聞いたことがあります。それは「分教場で教育を受けた子は、人生問題につき抽象的なこと(即ち理屈)は言はぬ」といふ言葉でした。この一言は、深く私の心に刻まれてをります。

先にも述べました二枚橋分教場(一年生から四年生までの一クラスで総数二十名位だったでせう)へ通ふ児童は、男の子は幼い時から父の船に乗って烏賊釣りに出かけ、女の子は三歳位になると弟や妹の子守りをしてをりました。(兄弟は五、六人あるのは当り前でしたから)そして村から漁に出たまま帰らない舟が出ると、村中の人が総出で、幾晩も浜に篝火を焚き、友の名を、親の名を、子の名を沖に向って呼び続け、連絡船から投身自殺した若い女性の遺体が浜に上げられる様なきには、自分の肉親の死を悲しむかの如く、村中の女性が薪を持寄り手厚く茶毘に付して廻向を手向け、村から入営する青年が出ると、村をあげて祝入営の幟を何本も立てて峠まで見送るといふ、さうした村人達の姿を見ながら育った人に、「社会奉仕」などといふ抽象的思考など入り込む筈がありません。

健全な魂の持主にとって、社会とは先づ父母であり兄弟であり、村人達であり産土様であつ

て、抽象された「社会」などといふものは、この世に実存しないことを心と身体（心解と体解）でよく知ってゐるからであります。私が百姓時代、青年団長をしてをつた頃、村の若い衆は、その日の各自の仕事へ行く前の朝まだき、また仕事が終わった後のたそがれに、年寄りだけで暮らしてゐる家の田植系や稲刈りをする事は当り前のことでした。

近頃我々老人が舌を嚙む様な、「ボランテア」だが何だがつてよく喋ったり、新聞に載つたりして居りますが、私に言はせると、「そしたら（そんな）暇あつたら、爺ちやの肩でも揉んでやらなが!! 学校の教室でももつとまで（丁寧）に掃除しながら!! 家の雪掻きでも手伝はなが!!」とでも言つてやりたい位であります。若し日本中の生徒や学生達が、学校の行き帰りに会ふ人毎に「お早うございます」と挨拶を交し、道路に落ちてゐる空缶や紙屑を拾つて歩く様になつたら、世の中はどんなに明るくなるだらうと思ふ。

自分の目の前のこと、足元のことおろそが疎かになつて、抽象的觀念だけが發達して、云く「人類の為」「世界平和の為」などと菌の浮く様な抽象觀念が、一王様でも通る様に――白昼堂々まかり通つてゐるのが、今日の日本の姿であります。「一人ば背負おほるのも楽でねのに、世界ば背負おほるだなんて笑はへるなぢや、潰つぶれてまるべね」とソクラテス様に言はれさうであります

す。

屁理屈へりくつ

抽象的に物事を考へるといふことは、理屈を捏ねると同義であります。

このことにつきまして、私が学生時代より尊敬申し上げて参りました、河村幹雄先生（九州帝国大学工学部長をなさり、名著『名も無き民のこころ』を残され、昭和六年四十六歳で逝去されました）は、大変面白いことを教へてをられますので、ご紹介申し上げます。

——自然科学（筆者注・社会科学、人文科学も同根です）を人生まで持込みますと、人を殴つておいて『何故人を殴つたか。』と詰つまられるれば『いやなに、物体が衝突したに過ぎないよ。』と返事してすまして居る事が出来ます。『怪けしからん事を言ふな。貴様の手が俺の頭の方向へ運動したから衝突が起つたのではないか。』といはれ、ば、『いやそれは君の身勝手な主観に禍された粗雑論だよ。君は自分の頭を座標軸の中心にして考へるから、僕の拳骨けんこつが君の頭

の方向へ運動した様に考へるのだが、僕の拳骨を座標の原点にとって考へれば、君の頭が僕の拳骨へ向つて運動したことになる。ちと相対性理論でも研究したまへ。」と逆襲する。「人を馬鹿にするにも程がある、兎に角君の手は何ともあるまいが僕の頭には瘤こぶが出来た。痛くて堪たらない。これをどうして呉れる。」といはれたならば、『それは生理的現象だから、物理学では取扱はない。生理学者の所へ行き給へ。物理学的には「動あれば反動あり、動と反動とは大きさ等しくして方向相反す」で僕の手が君の頭を圧しただけ君の頭も僕の手を圧したのだから両方五分五分さ。それを僕に謝まれといふのは君の無理といふものだよ。』といつて詫わびないですます事も出来ませう。(上記書一三七頁所載)――

(筆者註 先生の文の冒頭に「自然科学を人生まで持込みますと」とございしますが、これを「自然科学的論理(理屈)を人生にまで持込みますと」と読みかへてお読み頂くと、なほよく趣旨をお分かり頂けると存じます。)

と大変面白いことを書いてをられます。私は「何といふうまい理屈を捏ねねるものだなあ」と感心させられながら、思はず吹き出してしまひました。しかしこれは、本当に一笑に付たしてすますことの出来る物語りでありませうか。今、私達の廻りには、これに類した屁理屈が

白昼堂々とまかり通つてをりはしないいでせうか。

先生が生徒を叩かうとすると、「先生暴力はいけないよ」と言つて先生の手を掴んだり、ぐれてゐる子を論さうとすると、「俺は父さん母さんに生んでくれと頼んだ筈はないよ」とか、「俺がかうなつたのは皆、社会が悪いからだ」と言ふ様な発言や行動をとる若者が決して稀でないと思はれて聞かされてをります。知解至上主義の世界に、我が祖国日本もなつて行きつつある様に思はれ心配でなりません。私の父母は「今日は先生にかういふことで叩かれたよ」と報告しますと、翌日はその先生に「よく叩いてくれました。有難うございました」と丁寧な礼を申し上げて居りました。

本居宣長は「故古語に、あしはらの水穂の国は、神ながら言挙せぬ国といへり」（直毘霊）と言つてをられます。心解・体解の世界に知解（理屈）を持ち込んでならぬ。知解の果す役割とその限界をよく心得よ、それがわが国の神ながらの直き道である、との教示かと仰がれるのであります。

第十回

第六の違ひ―論証―（承前）

次に「知解（知識）」の世界は論証されないものには価値がないとみる世界であるに反し、「心解と体解」の世界は、論証されないものなかにこそ人生の秘密が潜んでゐる、と確く信じてゐる世界であるといふことであります。よく聞く「以心伝心」といはれてゐる世界であります。

大方の人々は、靈魂は不滅である、と信じてをります。朝、仏壇に在りし日の如くお膳を供へ、香を手向けつ、「おぢいちゃん、おばあちゃん、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、お早うございます。今日は何もおいしいものを供へられずごめんなさい。明日はおぢいちゃんのお好きな雲丹を買つて来ます。それでは行って参ります。」などと挨拶することは、大抵の家庭で欠かさず続けて来てゐることでもあります。それは心のうちで、祖先の魂はいつまで

も私達を見守ってくれてゐると確く信じてゐるからであり、さうすることが心に無上の平安を齎もたらしてくるからであります。

しかし知解の世界では、魂を離れた肉体は無く、肉体を離れた魂はない。故に肉体が減びると魂も共に減びる筈であると考へます。もし魂が永遠なものであると言ふならば、それを証明せよ、と言ふことになります。それを何としても証明しようとして、さまざまな実験が試みられて参りましたが、未だに万人を納得させうる様な明確な証明はなされてをりません。

アレキシス・カレルの生命観

一九一二年にノーベル生理・医学賞を受賞し、『人間 この未知なるもの』並びに『生命の知恵』といふ名著を残されたフランスのアレキシス・カレル博士は、魂の不滅について次の如く述べてをられます。

—— 肉身から分つことの出来ない精神（筆者註・ここでは「精神」を「魂」と読み替へて下されば、よくお分り頂けると思ふ）が、如何にして肉身なしに存在し得るか……この謎の秘密

が私たちに明かされるには、何世紀も恐らく何十世紀も流れ去ることであろう。差し当つて、電球のタングステン線によつて造られる光に似た、脳の発出物として、精神を見做すことは恐らく可能であろう。光は線の中で生れる、その如く思想は脳の中に誕生する。しかし光を構成する光子は、ランプから出でて、空間の中で決して終ることのない旅を企てる。ランプが消える時、発生した光子は滅しない。カリフォルニアの天文台は、恐らく四十億年前に死滅した星から発した光子の到着を、その写真版の上に記録する。時空間を超えて位置する領域に脳から発生された精神的エネルギーが、私たちの死後この未知の世界に存在し続けること、光の小分子が、消燈後相変らず無限の空間にその経路を延長して行くのと一般であると信ずるのは不条理ではない。（『生命の知恵』二二六頁）——

と述べられ、我々が魂の不滅を信ずることは決して不条理ではないことを暗示してくれてをります。

しかし、カレルが言はれる様に魂の實在について何世紀か或は何十世紀か経った後に、果して万人が納得する様な論証がなされるでありませうか。私は否であると信じてをります。

この世には論証出来ぬ世界があること

その理由は、この世では論証出来る世界と論証出来ぬ世界があり、魂の問題は論証出来ぬ世界に属するからであります。

あれ程の著述を残したプラトンが、晩年親友に送った便りのなかで「私が本当に述べたいと思つてゐることは何一つ書いてゐない」といふ意味のことを言つてをられますが、この世には、心の眼を以つて直観的に観ずるしか覺り得ない世界があるのだ、その世界は人間の小賢しい^{ざか} 理知を以つては一指も触れることの出来ぬ世界であり、その境地は文字を以つては到底現はし得ない、ただ合掌せしめられる靈妙な世界であることを、親友への便りのなかで独自されたのであらうと思ひます。

先にも一寸述べました如く「そもく天地の^{あめつち} ことわりはしも、すべて神の御所^{みしわざ} 爲にして、いとものく妙に奇しく、靈しき物にしあれば、さらに人のかぎりある^{さと} 智りもては、測りがたきわざなるを、いかでかよくきはめつくして知ることのあらむ」(本居宣長)の靈妙不可思議なのが、実はこの世の実体なのであり、我々はその生きてる全体から分断された部分、部

分についての知識を僅かに知ってゐるにすぎないのです。

水は靈妙なものである

私達は学校で水の分子式は H_2O であることを習ひ、摂氏四度で密度が最大となり、百度で水蒸気となり、零度で氷となる、と言ふ様な水についての部分的な知識を持つてをります。

しかしその水が、我々人間のみならず、生きとし生けるものの生命を育み、一滴の水が集つて小川となり、泉となり清流となり、瀧となり、雨となり、雪となり——しかも津軽には七つの雪が降るとか——海となり、方円自在に従ひつつ、溢れては巨岩をも流し、霞となり霧となり雲となり七色の虹を空に描く、恐れ畏むしかない、その靈妙不可思議の働きをするこの水を一体誰が考へ、誰がこの世に齎してくれたかについては、私たちの理知の及ぶところではないのみならず、一指だに触れ得ぬ世界であります。さういふ世界を私達の祖先は、神としてひたすら畏み祭つて来られたのでせう。

さうした世界は、心の眼（真心）によつて総合的に直観的に感得するしかない世界であり

ます。悠久なるもの（美）、崇高なるもの（善）、理につきたるもの（真）は証明不可能な心解の世界であります。「人生いかに生くべきか」といふ大事も、知解による論証の一指も触れ得ぬ心解の世界でありませう。

証明を生命とする知解の世界に於てさへ、「公理」といふ、証明は不可能であるが、万人が真理と認めざるを得ない領域もあるのです。（中学時代の幾何で学んだ「三角形の二辺の和は他の一辺より大なり」は証明できないが公理であると学んだのが、そのよい例でせう）

また証明を生命とする科学の世界に於ても、その画期的な発見には、直観的なひらめきによる予感（心解）が、糸口になってゐることが多いことを知って置くことは大事であります。最後に証明出来ぬ靈妙な世界について、心に沁みる一文を紹介して今回の稿を閉ぢることとします。

——古来日本人は、宇宙のあらゆるものを信仰の対象とし、生き物や草木はもちろんのこと、自然現象にまで命の存在を思い、それを大切にす文化を育てて来た。それが近代技術革新の中で崩壊し、人類があたかも、自然界を征服し、意のままに支配することが出来るかのよ
うな錯覚に陥ってしまった。その思い上りのつけが、環境破壊という形で地球全体に回って

きているのだろう。

南部霊場おそれざん恐山で過す錦秋の一刻は、死者の霊を信ずる者にも信じない者にも、自然のあり様そのものが、失ってはならない貴重な財産だということを思い出させてくれる。――

(むつ市カメラクラブ「悠々」代表 佐々木三男氏の「しもきた四季を歩く・恐山の秋」・平成十一年二月二十七日東奥日報夕刊所載の写真と文より)

第十一回

私達に今求められてゐるもの

前回まで、永々と「知解」と「体解」と「心（信）解」の違ひとその特質について、拙い体験を基にして述べて参りましたが、今、私の到りついてをります結論は、「文化」とは、体解と心解の生み出した私達の生き方であり、「文明」とは、知解の生み出した生活技術である、と言つてよいのではないかと言ふことであります。

そしてこの知解の産物である文明といふ怪物の欠点を、剔抉統御して真に人類の幸の糧たらしめる為には、我々の文化力を強靱なものにして行くところにしかならないことに気付き、それを身につける努力を力を併せてやつて行くことが、実は今、私達に最も求められてゐることだらうと思ふのです。

その大事に氣付く―氣付くといふことは私の体験では、答へが半ば用意されてゐるといふ

ことであります——導きとして、しばらく先達の言葉に耳を傾けたいと思ひます。

福田恆存先生の言

福田恆存先生は、祖国日本の前途を深憂され数多くの至言を残して下さいましたが（平成六年逝去）、今から四十年近い昔の昭和三十七年、九州阿蘇で行はれました、『第七回全国学生青年合宿教室（社団法人・国民文化研究会主催）』に於て「現代の思想的課題」と題して話をして下さったなかで、次の様に訴へられました。

——文化は英語で言へばカルチュアです。だが逆に、カルチュアは日本語で何と訳すかと言へば、「文化」と答へる人もあるだらうし、「教養」と答へる人もあるでせう。カルチュアにはこのやうに二つの意味がある。それでは私たちはこのカルチュアといふ言葉にふくまれてゐる「文化」と「教養」といふ二つのものをどのやうに使ひわけてゐるかと申しますと、大体「教養」といふ場合には個人に属するものとして使つてゐる。「あの人は教養がある人だ」

「教養のない人だ」とはいふけれども、「あの人は文化のない人だ」とはいはなひのです。教養といふのは個人の身に備はつたもの、文化といふのはある時代だとか国家だとかいふものの、身についた生き方を称してゐるわけなのです。このやうに外国語ではカルチュアといふ一語で言ひ現はせるものが、日本語では文化と教養といふ言葉に二分してゐるわけです。従つて私たちが文化といふ言葉で喋つてゐるときには、教養といふ要素が一つもはいつて来ない。私はここに問題があると思ふのです。

西洋人が「あの国のカルチュア」と言つてゐる時には個人の教養といふことと同じ言葉を使つてゐるのでから、教養といふ意味が「カルチュア」といふ言葉の周辺には常にまつはりついてゐるわけです。それから教養と使つた時にも、それが拡がつて行けば文化といふことになる、さういふ含みをもつて使つてゐるわけです。それが日本の場合には、文化といつたら、そこには個人といふものが全然入つて来ないといふ弱点をもつてをります。ですから「文化国家」とか「西洋文化」とかさかんに文化、文化と言ひながら、個人には一つも教養のない人間が出て来る。——と述べられ、つゞいて次のやうに述べてをられます。

教養と教育

——教養といふのは教育とは全然違ふので、教育は知識を与へるものですが、教養といふのは、その人の身についた生き方なのです。これも一度書いたことがございますが、秋口のこと、ある田舎の電車の中で、たまたま隣に座った老婆から言はれた言葉から、ふとそのことを思ひ出したことがあります。その電車は座席が進行方向に向って相對して平行についてをりましたが、隣の老婆が窓を開ける前に「この窓を開けていいか」と私に聞いたのです。

方言であつたので初めはよくわからなくて、一、二度聞き返しましたが、要するに「窓を開けたらあなたの迷惑になるか」と言つてゐるのです。そのお婆さんといふのは決して学校教育を受けた人とは思へないのです。小学校もろくに出たか出ないかわからないやうなお婆さんなのです。

私は大磯に住んでゐて、湘南電車で時々出かけるのですが、私にさういふ言葉をかけた人には一度も出会つたことがない。ところがこの湘南電車で東京へ通つてゐる人たちは大部分インテリであります。その時私は学校教育と教養は違ふといふことを改めて強く感じました。

そのお婆さんの言葉は、普段の細かい家庭の躰の中で身につけたものでせう。しかしまさか電車の中で窓を開ける時の挨拶の仕方までは教はらなかつたと思ふのです。教はつてはゐないが、しかし、自分が行動を起すときに、絶えずそれが他人の迷惑になるかならないかといふことを考へる躰は、その人の心の中にしみ込んでゐたにちがひない。

私は先程、交通機関は簡単に西洋のものを輸入することが出来るが、交通道德は輸入出来ないと申しましたが、もし本当に文化といふもの、教養といふものが身についてゐたら、新しい文明の利器が入つて来ても、それにすぐ即応することが出来る、といふことなのです。

西洋で私は何度も「窓を開けてもよろしいか」といふ事を聞かれたのです。さういふ教育を全然うけてゐない、いはゆる封建的な躰に育てられたお婆さんが、それを口にすることが出来て、近代的な西洋の教育を受けたわれわれが口にすることが出来ないといふ事に思ひ至つた時、大げさに言へば、愕然とせざるを得ない。教養とか文化とかいふものは一体何か。このお婆さんの方がわれわれよりよほど文化人ではないかといふことになります。——と訴へられたあとに、次の様に述べられました。

文化とは過去の時代の集積、あるいは成果ではない

——しかしながら私どもの間では決して文化といふ言葉がさういふ含みで使はれてはゐらないのです。文化といふと何となくフワフワしたもの、ハイカラなもの、西洋的なものといふことになってをります。極端に言へば「文化だはし」とか「文化七輪」とかいふ程度にしか使はれてゐない。「西洋の文化」とか「平安朝の文化」とかいふ時も、実際は同じやうに使つてゐるのです。要するに何か自分とは離れたもの、高級で便利なものといふ風に使つてゐます。

従つて文化といふものを具体的な物として受け取つてゐるのではなく観念的な価値として受け取つてゐるわけです。それは西洋のものに限らず、「平安朝の文化」といふ場合でも、要するに自分とは縁のない、一つの過去の時代の集積、あるいは成果として使つてゐるので、すなはち自分と関係のない離れたものとして使つてゐるのです。

T・S・エリオットが「文化といふのは生き方である」と申しましたが、大抵の場合さういふ意味では使つてゐないのです。なにか高級なもの、便利なもので、そして自分から離れ

たものとして使つてゐるので、日・常・の・私・た・ち・の・生・き・方・と・して・は・使・は・れ・て・ゐ・な・い・の・で・す・。・も・し・
生・き・方・と・して・文・化・と・い・ふ・も・の・を・考・へ・る・な・ら・、・カ・ル・チ・ユ・ア・を・教・養・と・訳・す・場・合・の・、・教・養・と・い・ふ・意・
味・も・ち・ゃ・ん・と・通・じ・て・来・る・わ・け・で・す・。——（社団法人国民文化研究会刊『新しい学風を興すた
めに』所載）

と訴へられました。何度読んでも身に沁みるお言葉であります。

（なほ傍点は筆者が勝手につけさせて頂いたものです。以下各回同様です）

第十二回

文化観光立県宣言

前回は、福田恆存先生の憂国の至言に耳を傾けさせて頂きましたが、そのお言葉から、「文化」とは自分の外にある何か華はなやかなものではなく、民族のいのちいのちとして我々一人一人の日常の生活に作用し続けてゐるもの、表現を変へて申し上げますと、私達一人一人の何気ない行動や吐く言葉のなかに自づから滲にじみ出る様な民族共有の根本情緒（何を尊く感ずるか、何をはしたなく感ずるかなどを中核とする情緒）を指してをることに気付かせられるのであります。

当県では昨年、「文化観光立県」を宣言致しましたが、津軽の文化とは一体何か、と聞かれれば、それは津軽を訪れてくれた他所よその方々が、津軽に抱いて帰ったものである、と端的に言ふことが出来るだらうと思ひます。

行く小径にも紙屑や空き缶などの姿は無く、行き合ふ県人は大人も子供も「お早うございます」「今日は!!」と声を掛けてくれた。運転手さんも宿の女将さんも皆親切だった、魚も山菜もうまかった、あのねぶたの大きく揺れる武者姿、ねぶた囃子の響き、跳人の姿がいまなほおもかげに見えてならない、と言はれるならば、我々が一番大事にして来た「あづましい」といふ津軽弁にこもる津軽衆の生き方―文化―が他所（他国）の人達にも分つて貰へたと言ひ得ると思ふのです。

この六月、友人の誘ひで越後の一の宮である弥彦様に詣りましたが、門前町（弥彦村）を通つてゐる時に、行き会つた村の中年婦人が、「今日は!!」と声を掛ける私に「お参り下さい!!」と温かい越後訛りの声で挨拶を返してくれました。

弥彦様の御神威が、弥彦山をはじめ、麓の森、野、里のたたずまひ、そして里人の一人一人にまで行きわたつてゐることを身体に感じ、いまだにその婦人の温い言葉と姿が心に深く残つてをります。それが越後の文化といふものでありませう。

あづましい

我々津軽衆にとつて、けやぐ（親友）と津軽弁で話し合つてゐる以上の心の平安はありません。要するに「あづましい」のです。

いまは「虱着物しちりみかっちゃんに（裏返しに）着たいんた」と言ふあづましさは味はひ得なくなりましたが、小さい頃は文字通り、その「あづましさ」を何度いくたびも体験したものでした。

他国の方の為に一寸解説致しますと「あづましい」といふ私達のお国言葉は、「気持ちがいい」などといふ標準語では到底言ひ表しかねる気味合ひのもので、例へば、住んでゐる家は小さいながらも、清潔で且つ何となく高雅な感じさへするとき「なんぼあづましいねし」と言つたり、生活はあまり豊かではないが親子兄弟が膚はだを暖め合つて、仲良く暮してゐる様な家庭を、「あづましく暮してゐるつきや」といふ様に使ひます。つつましいながら、何とも言へず心が平安になる様な感じのする時に、自づおの「あづましい」と言ふ言葉が出るのです。この「あづましい」の語源はよく分りませんが、私は勝手に「吾妻わがつまらしい」と思ひ込んで悦えつに入つてをるのであります。かっちゃん（嬢かか）位、めぐふて、もぞこい、ものはねい（ない）、何もい、着物コ着なふても、清潔さっぱりした形なりコさへしてをれば、そのめんこい匂ひコ、めんこい

しぐさ、そのめんこい声コ、どれもこれもめんこい——したばて（さうではあつても）ぶた
きたくなる程にぐらしこともあるばたて——

昔の人は（萬葉集卷二十・防人の歌）

筑波嶺のさ百合の花の夜床にも愛しけ妹ぞ昼も愛しけ

と詠み、日本武尊様は、足柄峠から、ご自分の身代はりになって海に身を投じられた弟
橘比売命を偲ばれ、はるかにその走水の海をみさけられつ、「吾嬬はや」と三歎かれた
と古事記は伝へてみます。

私は青年時代に古事記を読んで以来、この「吾嬬はや」のお歎きが耳を離れず、「あづましい」
と言ふ津軽弁は、きつとこの「吾嬬はや」の「吾嬬」に深く関係してゐるに違ひないと勝手に
思ひ込んでをるのであります。沖繩と津軽は大和言葉の宝庫である、と聞いてをります。
私の当てずっぽうもまるまる的外れではあるまいと一人悦に入つてをる次第であります。

少欲知足

法螺話はらからいきなりむづかしい話に変わりますが、津軽の文化の中核をなすものは、この「あづましい」といふお国言葉に籠こもる津軽衆の物のうけとり方、美意識であると信じてをります。この美意識の中核をなすものは、仏典維摩經ゆい（菩薩行品ぼさつぎょうほん）にある「少欲知足」即ち聖徳太子様が「少欲知足とは分に過ぎざるを言ふ」と御解釈下さった、人としての分を知る（人は自然の一部であり、生きとし生けるものは我が兄弟であり、それらのお蔭で自分は生かされてゐるとの自覚）と言ふ人生観が、その根本にある様に思はれるのであります。

他県との国民所得の比較をし、その多寡たかを以つて県民の幸の尺度とする様な軽薄な考へをするのではなく—モンゴルの国民所得は、我が国の数十分の一位しかないであらうが、旭鷲きよくしゅう山さんは年に一度の帰国を何よりの心のよりどころとし、「モンゴルの星空が見たい」と言つてゐるその言葉に、人の幸あきの在所ありかを教へて頂いてゐる様に思はれ、肅然とせしめられるのであります—、祖先から受け継いで来た「あづましい」と言ふお国言葉に籠る、つつましきのなかに人の幸を見出して来た文化感覚を、私達は一体どこに置き忘れて来たのかと自戒せしめ

られますと共に、この「あづましい」といふ、何とも言へぬ心の平安をもたらしめてくれる素晴らしいお国言葉が、すたれてゆくことのない様にと切に祈られるのであります。

明治天皇様は「民戸煙」と題されて

國民くわんたうのかまどのけぶりほそくともながく久しくたてつづけなむ（明治三十七年）

とお詠み下さいました。また「家」と題されて

ことそぎし昔の手ぶりわするなよ身のほどほどに家づくりして（明治三十八年）

ともお詠み下さいました。（著者註、ことそぎしとは、簡素な、といふ意です）

世界には今も飢ゑてゐる方が沢山をる

世界では十七億人もの人々が飢ゑてをられると聞いてをります。それを食糧の自給率僅か四十%の国でありながら、私達の食生活は一体如何どうでありませうか。食べもしない料理を並べるだけ並べて、本当に食べるのは半分にも満たず、残りは惜しげもなく残飯として捨て、しまふ様な生活をしてゐながら、景気回復のみが声高こゝろたかに叫ばれてをります。

農業や漁業や伝統工芸などの後継者が無く、また、その人のお嫁さんになる人も少なく、外国からお嫁さんに来て貰つたり、不法入国の外国人を農業の仕事に使つたり、油や食料品を運搬する輸送船の船員の大半は外国人であるといふのに、雇用問題について機会均等や、男女平等などの観念かんねん的文明思想のみが、大手を振つて歩いてをります。

油一滴取れない国でありながら、国民の二人に一人は自動車を持ち、狭い国土を乗り廻し、年間一人もの交通事故による死亡者を出し、百万人に及ぶ負傷者を出してをります。

また、冬でも油で沸かした温水プールで泳ぎ、人工の雪を降らせ、街にはネオンを不夜城の様に灯したりして、あげくの果てには、空気の汚染、地球の温暖化、ダイオキシンのなどの問題を起してをります。

この慎みを失つた私達日本国民の行く末は、一体どうなつてゆくのかと思ひますときに、

「國民のかまどのけぶりほそくともながく久しくたてつづけなむ」と、祈らせ給ふ篤き大御あつ だいみ心が、そして祖先達こきょうが營々として身につけて來た、「あづましい」といふお国言葉に籠る、文化力を、なき母のごとくに恋しく思ふこのごろであります。

第十三回

観光といふことについて

ここで観光といふことについても一言申し上げて置きたい。

もともと「観光」とは、外とつ国の優れた文物を観て、み国の発展の資とすることに由来し、我が国が西洋から初めて輸入した船に「観光丸」と命名したことを以ってしても、当時の我々の父祖達の新鮮な志の程を知らしめられる思ひが致します。

また「観」といふ語には、宮本武蔵が『五輪の書』のなかで「観かんの目強く、見けんの目弱く……」
と言つてをられる様な願ひが込められてゐるものと思はれます。

即ち武蔵は、物を見るには「見の目」と「観の目」とがあると述べ、「見の目」といふのは、相手の剣先や足の動きなどの部分的なところに目が行くことであり、「観の目」といふのは、相手の剣先も足元も見えるのだけれども、併せて相手の体全体の動きが見える、さらに心の

中まで見える、さういふ目だと言つてをります。ひと口に申しますと、我々の肉眼で見えるものが在るものだと見るのが「見の目」であり、心眼で見えるものが真に在るものだ、とみるのが「観の目」といふことでありませう。肉眼でみえるものにとらはれず、全体をうらやかな目で観る、といった気味合ひが、「観」といふ語に込められてをることを省みることは大事と存じます。

外国への観光旅行者は、一時より減つたとは申せ、今なほ我が国を訪れる外国人の三倍にものぼる同胞達が外国を訪れてをります。「百聞は一見に如かず」とは先人達の永い間の生活体験から生まれた金言でありませうが、私の備忘録にはそれに続いて、「百見は一考に如かず、百考は一験に如かず」とあります。深思せしめられることであります。

ねぶた

わが青森県も、観光客が多く来てくれる願ひを込めての「文化観光立県宣言」でありませうが、本当に良いもの素晴らしいものは、自分で宣伝しなくても、自づ人の知るところとなり、

思はぬ客の来訪となることは、誰しも一度や二度、体験せしめられてみるところであります。青森の「ねぶた」も我々里人の祭りから、観光客を呼ぶ見世物になって来てゐる様に思はれ心配でなりません。

暮しと神々への祈りが一体であった、村や町の生活のなかから自づ生れた祭りは、神々祖先への感謝の祈りと共に、産土様うぶすなを中心に睦み合つて来た村人達への憩ひと、明日への希望と勇気を恵んでくれる最勝の営みであつた筈であります。その村祭りには、近隣の村々の親戚やけやぐ（友人・知人）などを客として迎へ、自分の村の祭りを誇り、また来客もその祭りを賞めそやし、心ゆくまで馳走ちせうになつて帰つてゆくのが習ひでした。

我が青森の「ねぶたコ」も、今は人に見せる為なのか、やだらど大きくなつて（つぶれたみたいに横広くなつて）しまひました。その上、お金がかかるので、出すところは大企業中心となつてしまひました。

私達のちやつこい頃は、町々でねぶた小屋を造り、そのなかで、だんだん「ねぶたコ」になつてゆく様子を胸をわくわくさせながら、竹馬の友と誘ひ合つて覗のぞきに通ひ、いよいよ出陣のときが来ると、父母から蠟燭ろうそくを貰つて持つてゆき、「ねぶたコ」のあとをついて歩くの

が少年時代の感動でした。要するに「ねぶた」は、村や町の里人達の日常の生活と一体として、即ち文化としての祭りでありました。

近頃はさうした生活と祭りの一体感が薄れて来た結果が、カラス跳人と呼ばれる者達が現れ、祭りを汚す様なことになって来てゐる気がします。

家の母は根っからの安方衆（青森衆）で、「ねぶたコ」てば帰つて来る棟方志功さんに跳人の着付けをよくしてあげたものだ、と言つてをりましたが、「観光」といふ言葉のもつ元の意義を、皆で少し落着いて考へてみるべき時に来てゐる様に思はれてなりません。

「ねぶたコ」は決して他所の人達にみせるためにあるものではなく、まして他所に出かけて行つて、他人にみせるものではない筈です。津軽衆のわ（我）の村、わの町の、永い冬の雪と寒さに耐へて、じつとして来た村人達と共に、須臾の間に過ぎゆく夏を惜しみながら、祖先のみ霊と共に、神々に稲や畑物の稔りを感じ、またやがて足早に訪れて来る冬に備へて、生命を燃やす祭りであつたことを、いまいちど原点に立ちかへり、沈思すべきときに来てゐるのではないでせうか。「大ねぶた」より「子供ねぶた」の方が観に行つてゐて、心安まる様に感ずるのは、私が三十年近くも、他郷ものだった為だけでありませうか。

三坪の庭

徳富蘆花は「自然と人生」の一節に

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。

誰か云ふ、狭くして且陋なりと。

家陋なりと雖ども、膝を容る可く、

庭狭きも碧空仰ぐ可く、

歩して永遠を思ふに足る。

神の月日は此処にも照れば、

四季も来り見舞ひ、風、雨、雪、霰

かはるぐに到りて興浅からず。

蝶 児来りて舞ひ、蝉来りて鳴き、

小鳥来り遊び、秋蛩また吟ず。

静かに観ずれば、宇宙の富は

殆んど三坪の庭に溢るゝを覚ゆるなり。

(註 秋蛩は こほろぎ)

と詠んでをられます。

達磨は石の上に八年坐して、宇宙を達観されたときいてをります。とてもその境地になど逆さになつても近づき得る身とは思ひも致しませんが、せめてソクラテスが、祖国アテネを愛し、生涯のうち戦争に従軍した二度を除いて、アテネから一步も外に出なかつたと伝へ聞く、その心根を懐かしく思ふ心だけは持つてゐたいものと切に思つてをります。

日本中を、北は北海道から西は四国まで、幾度か異郷に生を送り、今漸く、父祖の魂の眠る故山に帰り住むことが出来、僅かの畑に朝夕出て、郭公や不如帰や鶯の声を聞きながら、裏山を流れゆく雲に心を移し、春の萌黄の若葉の色香に酔ひ、やがてところどころに見えはじめる山桜に眼を濡らし、裏山に夏の知らせと湧き上がる入道雲に、地に赫々と沈みゆく夕

陽が、名残りの茜の色を放つを見つ、暮れゆく一日を惜しみ、萬山紅葉に染まりゆく秋の空にゐる雲の静けさにみとれ、やがて明治節（今は文化の日）を境に、舞ひくる風花に冬の訪れを感じ、家内が美しいと嘆ずる白雪が、日をおかず降り閉ざす冬の厳しい寒さと雪の深さに耐へつ、やがて訪れる雪代（雪どけ水）のさやけき音を恋ひ待つ永い冬の夜々、今は亡き父が

かちかちにも凍る音の頭に沁みる深夜家人らの寝息かなしき

と詠んだ、その冬も、立春の声とともに、地より忍び寄る地熱の暖かさに、ゆるみゆく雪の下から顔を出すばつけ（露の臺）をみつけては春の訪れの近きを予感しつつ、春を待ち望む故山の生活を、いま心から楽しんでをるのであります。

柳田国男先生は「どんなにすぐれた学問をもつてしても、旅人の目や滞在者の目で捉へうるものには限界がある。その土地のその常民の最深の心意現象は、その定住者にしか感得することは出来ない」（昭和五十三年九月十三日、朝日新聞所載・色川大吉「水俣湾をみつ

めて」より」と言つてをられます。

ここで言はれる「最深の心意現象」とは、我々津軽衆を津軽衆たらしめてゐる、言葉では到底言ひ表しきれぬ、否、我々津軽衆が、自らは、はつきりそれだと気付いてゐないところの、「津軽の匂ひコ」文化とは、実にそのことを指してゐるのだと思はれるのであります。

その匂ひコ（かまりコ）が薄らいで来てゐると思ひませんか。心コ、ぢやわめいでありません。

第十四回

「時」と「時間」と

唐突な様であります、忘れぬうちに留めて置きたく「時」と「時間」について感じてるるところを記さうと思ひます。

先日ある塾で、高校一、二年生を対象とする「立志講座」といふ京都での研修があり、私も呼ばれて若者達と行を共にしました。初日は塾の講師による明治維新で活躍された志士達の人物像の講義を中心とする研修でありましたが、実に熱心な態度での受講でした。

翌日は朝礼のあとラジオ体操が始まりましたが、塾生達の動作が実に情け無い。体操をしてゐるのか、格好をつけてさへ居ればいいとも思つてゐるのか、だからだとして青年らしい懸命さが無い。体操が終つた後、私は受講生達に次の様に話してやりました。

——昨夜は心の故郷ふるさとである「真心」の大切さを語らせて頂きましたが、一所懸命といふことも「真心」の発露であり、物事を一所懸命にやるのが、また真心を磨くことにもなるのです。ですから、やるなら懸命にやり給へ。やりたく無かつたら、はつきり「私はいやです」と断つたらよからう。いい加減なのが一番いけないことです。——と話してやりました。

「時」とは文化である

私達は、時とは時計で計れる時間の経過であつて、万人に平等に頷ち与へられてゐるもの、とのみ思ひ勝ちであります。彼女を待ちこがれてゐる一分間は、数時間の永さにも思はれることは何方どなたでも体験していらつしやるどころです。

平等に与へられてゐる時間も、その与へられた時間に如何に生命いのちを込めた生活をするか、そこに人の価値が左右され、その込められた生命の蓄積がその人の、人となり（人格）を形成する、この込められた生命いのちの蓄積を「時」と言ふのだ、と私は聞いてをります。私といふ人格は、遠い祖先から脈々と受けつがれたこの「時」そのものだ、別な表現をすれば、私と

は私の過去の一切である、と教へられました。

私は戦時中、下手な戦斗機乗りでした。入営しましたのは、昭和十七年十月、弘前の北部第十九部隊（騎兵）でした。そこから東京の機甲整備学校へ進みましたが、やがて日本は戦車では勝てない。戦斗機乗りが足りない、といふ声を聞いて勇躍航空兵を志願し、昭和十八年十一月太刀洗飛行学校菊池分校（熊本県）で赤トンボの初級訓練を受けたのち、翌昭和十九年三月、満洲の蒙古に近い白城子といふところで、実戦に近い九七式戦斗機の訓練を受け、同年八月芦屋（福岡県）にあつた実戦部隊に配属されました。

着任の挨拶を終へると将校は営外に宿をとる様に命ぜられました。その日は内地に接近してゐる台風の余波で強い風が吹いてをりました。同日着任した戦友達と宿屋への道を辿つてをりますと、丘の上の方にぽっかりと灯が一つ見えます。私は何故かその灯に強く心を引かれ、戦友達に「先に行つてみてくれ」と頼み、一人でその灯を頼りに長い石段を登って行きました。灯は丘の上にあるお寺の縁側の雨戸が一枚開けてあるところから漏れてみたのでした。

私は雨戸をドンドンと叩きながら「今晚は!!」と声を懸けました。やがて五十歳ばかりの

上品な御婦人が出て参りました。私は「実は本日、こちらの航空隊に満洲から赴任して参りました長内といふ者です。嵐のなか、丘の上に灯が見えましたので、心ひかれるままに登つて参りました。何とか宿を借してくれませんか」と申し上げました。御婦人はあまりの突然のことで大変驚かれた様子でしたが、「私の一存ではご返事出来兼ねます。主人（方丈様）ともよく相談してみますので、明日またおいで頂けませんでせうか」と言はれました。

眼にみえぬものの導き

ご応待は至極当然のことでしたので、「それでは明日また参ります」と申し上げて帰りました。翌日お訪ねしたところ、「いままで何方にも宿をお貸したことはございませんが、貴方が丘の上の灯あかりに心が引かれ、それを慕つておいでなされた、といふことは、み仏のお導きの様に思はれますので、お泊まり頂くことに致しました」といふご返事を頂き、やがて山口県の防府に転進する迄の二ヶ月間、この光明寺にお世話になったのであります。

お寺では私の為に、海の良く見える二階の客間を空けて下さり、絹布の布団、そして涼や

かな麻の蚊帳かやなどを用意して下さいました。その上たびたび「今夜は食事をせずに帰って来て下さい」といふ連絡を頂き（当時は食糧難で、将校も宿だけは営外にとりましたが、食事はすべて営内で摂とってをつたのです）、その都度下にも置かぬもてなしをして下さいました。

思ひ出話が長くなりましたが、その間、私は「隼」はやぶさ（一式戦）の単独訓練を急ぎ終へ、最新鋭の「疾風」はやて（四式戦）の操縦の訓練を受けたのでした。一方B二九の本土爆撃が始まり、部隊の古参の方々が迎撃に飛び立つといふ緊迫した日々が続きました。B二九の来襲に、私は居ても立っても居れなくなり、練習中の隼で体当りしようとして隊長に見つかり、飛行機から引きずり降されたこともありました。

さうした緊張した日々の芦屋での二ヶ月間は、今の数年にも当ると思はれる程、生命いのちを燃焼させた二ヶ月でした。勿論、弘前の騎兵隊に入営し、やがて戦闘機乗りとなり、明日は沖繩へ飛立つといふ前日、終戦となるまでの一日一日は、それに劣らぬ生命の凝集した年月でありましたが、光を求めて丘の上のお寺を訪ねたといふ、不可思議の縁が尊く思はれ、代表的なものとして記した次第であります。勿論先の戦争では、私など到底思ひも及ばぬ辛苦を嘗なめられた方々ばかりでありますので、恥かしい限りであります。明日ありと知れぬ生命

を燃やし尽す歲月と、今の様な平穩な日々を送る歲月とは、己おのが生に刻む生命の密度が違ふといふことは、何方どなたでも納得頂けることだと存じます。その刻んだ生命が「時とき」であり、それは万人に普遍的な「時間」とは全く違ふものであることを、知らしめられたのであります。

この「時とき」こそ実は、文化と言はれるものの内容であると思ふのであります。私達の祖先方が自然（人も風土も自然の一部であります）と如何に深く関はり、それと共に生命を刻んで来たか、その実内容を私達は文化と呼び、その文化（生き方）を、日常の生活のなかで培つちかつてゆくことが民族として、またその民族の一員としての大事であると気付かさせられるのであります。

この「時」を共に刻んだ（喜びも悲しみも共にした）友が、竹馬の友であり、戦友であり村人であり、その集まりが民族であり、その思ひ出が神話であり、伝説であり、その営みが歴史、伝統と言はれるものの内容であります。

「時」とは如来様

一方、過現未^{かげんみ}を貫き流れてゆく時間は、無心であるとして一般に思はれてをります（文明思想）が、明治天皇様は

ふく風もたえてふけゆくさ夜なかにただひとすぢの水のおとする（「水」明治四十年）

わがこころおよばぬ國のはてまでもよるひる神はまもりますらむ（「神祇」明治三十六年）

とお詠みになっていらつしやいます。

私達（木も草も生きとし生けるものすべて）が眠ってしまったてゐる間も、一時の間断おととろもなく変はらぬ慈愛で見守つてゐて下さる神々―如来―それは悠久に流れる「時」そのもの―の温い生命のみ守りに包まれて生かされてゐることを信知せよ、との御教令とも戴きまつらしめらるるのであります。

この目にみえぬ尊いものの存在を直観する心解の力、即ち文化力が、人類否我々日本人に、いま強く求められてゐる様に思はれてならないのであります。

第十五回

文化力といふことについて—生き方としての文化と国の盛衰—

ここで再び先達の憂国の至言に耳を傾けてみたいと思ひます。

小生の学生時代から学問の師と仰ぎ御教導を賜って参りました加納祐五先生が、標題のもとに社団法人国民文化研究会の会誌『国民同胞』第四〇五号（平成七年七月刊）に次の様な文を書いてをられます。

——これは他所にも書いたことであるが、福田恆存氏の一文によって、**文化力**といふ觀念について考へさせられるところがあつた。その文章とは次の通りである。

私は太平洋戦争といふ名の大東亜戦争が侵略戦争であつたかどうかといふ事には余り興味を感じません。侵略と自衛とは紙一重の差でしかないからです。私が最も口惜しく

思ふのは、あの戦争が文化とは何の関係も無い戦だったといふ事であります。勿論、戦争もまた、平和がさうである様に、文化の、即ち私達の生き方の表れである以上、文化とは無縁の戦争を行ったといふ処に、私達の文化の型が、詰りその空しさと惨めさがあるのです。私達はあの戦争でアメリカの物量と戦つたのではない、アメリカの文化と戦つたのであり、そして敗れたのであります。日清、日露の両戦争では私達の文化が清とロシアの文化に勝つたのであります。さう言へば経済や軍事力や外交を無視した空論の様に聞えませうが、私は単に戦力としての文化的エネルギーを強調してゐるだけの事に過ぎず、平和も文化的エネルギー無くしては、空疎な合言葉と成るか、さもなければ他に底意を秘めた口実に終るか、どちらかでありませう。文化共同体を基盤としたナショナルリズムこそ、戦力にも平和にも利用し得るものなのです。今日の戦力なき平和は文化否定の結果として生れた化物以外の何物でもありません。(昭和四十年「知識人の政治的言動」)

これは必ずしもわかり易い文章ではないが、ここに言及されてゐる文化的エネルギーといふ観念は迂闊には見逃せない重要な内容を含んだものの様に思はれる。福田氏は、戦後は言

ふまでもなく、戦時中に於てさへ、私達はこの文化力に乏しく、それが敗戦を招き、また戦後の不様な状況をもたらししてゐるのだとされてゐるやうだ。文化力の意味するところの究明に心誘はれる所以である。

「文化的エネルギー」といふ場合の「文化」について福田氏は、私達の、また一国民一族の生き方であり、それはつねに歴史と習慣のうちになく、それを否定してしまへばただ混乱あるのみ、といったものだと言はれる。その肝所は「生き方」といふところにあるのだから、それは便利で快適な生活のための資材や方便ではないことは勿論のこと、所謂文化遺産と称される様な思想、文学、芸術等々でさへなく、一口にこれといつて目の前に差出すことの出来ないものである。別の言ひ方をすれば、吾々自身の主体の外にあつて客体として扱ふことの出来る様なものではなく、主体のうちにあつてその心に生き生きと働き、おのづから吾々の姿、形として表れるやうなものを指して言つてゐるのである。その様な文化にこそ、私達は生きる意味を見出し、意識的に無意識的にそれを愛しみ守らうとする、そこに力が生れるのである。

英国ウエールズ大学教授であつたジムマーン氏が嘗て「貴国は何故に文明国と呼ばるる資

格ありとせらるるやと問ふに、独人答へて曰く、我學術、技芸、大學、教育機關、我文芸、音樂、繪畫、彫刻を見よ、我ルーテル、デユラー、ゲーテ、ベートーヴェン、カントを見よ、と。英人答へて曰く、我等英人を見よ、我等が何を為しつゝ、ありやを見よ、と。又恐らく英國發達の由來を抒し、無名の兵士の家信の如きを挙げべし。」と語つたことを引用して、九州帝國大學教授の故河村幹雄博士は「余はジムマーンに賛す。一國の文化は國民の良風美俗によりて知らるるとなす。而も是れ南洲翁が半世紀前に喝破せる所」と言はれ、続けて、日本史上に見られた若干の事例を挙げた後に、だが然し、それは是等幾つかの知られた事蹟、限られた一部の人達の行為の上に見られるばかりではない、知られざる巷間の一車夫、山間の一老嫗おやうの如きにさへもその例證すくまからずとしてその体験談を披露されてゐる。大正初期の頃、岡山県下の旅行の途次、偶々道連れたまたまとなつた車夫と雨の一日を旅した時、彼は語つた。「世の中は住み難いものです。人はなかなか自分の心を知つては呉れず、痛くない腹を断えず搜られねばなりません。弘法様は、空海の心はお釈迦様の外知らぬと仰つたが御考です。私の様なつまらぬ者の心すら人は知つては呉れませぬ」と。その言葉は人生経験の直接表現として其時以來頭を去つた事はなく、この一車夫―ではない、車夫を職業とする一哲人の経験は

此頃（大正十一年―筆者註）になつて漸く余のものとなつて腹の底からほとばしる。南洲翁の城山に死ぬ心を誰が知つたか。かかる人生の懊（なぐさ）みを知る、人生の悲劇なるを知るは偉大な心ではないか、と。もう一つ。既に久しい以前、地質調査の爲上州を旅した時のこと、段々山奥に入り最早や人家はあるまいと思つてゐると突然一軒家の前に出た。恰度雪のチラつく十二月、家の前に一人の老嫗がゐて頻りに「入つて火に温つて休んで行け」といふ。「有難いが道を急ぐから休まずに行く」と言ふと「やれやれえらい事ぢや。私の孫も今日は萱（かや）を馬につけ、自分も背負つて、この雪の降るのに坂道を下つて村に売りに行きました。馬の背も子供の影も萱にかくれて見えぬ程運んで行きましたが、雪の三里もある此の山を上り下るのですから骨が折れます。貴方達のやうに此の山の中まで絵図を書いて調べなされるのも、無学の私の孫達が馬と一緒に苦勞するのも、何になつたとて楽なものはない。務めは誰も皆一つ、情（なま）けては居られません。まあま氣をつけて行らっしゃい」と言ふではないか。この話をさる旅での行きずりの一米人に話したところ、この異国人は「実にそれは哲人である」といたく感嘆したことであつた、と。

これらの挿話は、或いは余談の様に聞えるかも知れないが、筆者としては余談を書いたつ

もりはない。博士は是れを「之れ日の本の名も無き民なり。名も無き民の心のまこと實に貴きかな。名も無き民七千万（当時の人口―筆者註）の心のまこと、之れ實に陛下の大御宝なり。真に之れ世界人文界の誇ならずや。之れ我が信ずる日本の文化なり。」と喝破されたのである。先にあげたジムマーン教授の言葉も、そこに表れた英独兩國の文化觀の相違に、第一次世界大戦における兩國の勝敗を分けた根源を見てゐるのは言ふまでもない。敗戦に終つた大東亞戦争に、当時の日本文化の型の空しさと惨めさを見た福田氏の、文化とは生き方なりとする文化觀は、ジムマーン教授、河村博士のそれと見事に通底してゐるのではあるまいか。「あの戦争が文化とは何の關係も無い戦ひだった」といふ同氏の痛言は、この様な文脈に於て受取つてこそ領解することが出来る。戦時下、この様な事態を深憂した私達の先達、田所廣泰氏は「世界戦争の動乱に於て人類はいまその信を問はれつつあり」「各国民族はその歴史的生活に於て生成し來つた民族生活の諸価値を、世界史の上に客証すべく迫られて居る」にも拘らず「現代日本国民の信を見ると、筆者は深憂を禁じ得ない」といふ表現をもつて痛嘆されたのであつた。ここに所謂「歴史的生活に於て生成し來つた民族生活の諸価値」とは、決して單なる思想、理念の教説、教条や体系ではなく、広く国民の生き方として信知され生

きられてゐるところの文化を指してゐるのである。――

私には先生のお言葉を要約してお伝へする力はない。次回も引き続き先生のお言葉に耳を傾けることとしたい。

第十六回

文化力といふことについて—生き方としての文化と国の盛衰—(承前)

前回に引続いて加納祐五先生のお言葉に耳を傾けることとしたい。先生はその後を、

——「王道楽土」といひ「東亜新秩序」といふ、その他様々の形で提唱された当時の政策や宣言は、成程、西欧の侵略的支配的植民思想とは類を異にする日本の善意を表明したものはあつたが、真に口惜しいことにはそれらの提言が日本歴史伝統のうちに生成し、生きて働く力としての文化とは無縁のものであつたが故に、それを実現する威力と方途とを持ち得なかつたのである。当時流行の国体論も、多くは日本の歴史をあるがままに究明することなく、個人の恣意的主張を展開する為の方便と化してをり、田所氏はこれを「重大な兇兆きようちゆう」であると断じて憚おそるところが無かつた。

ではどうして此の様なことになったのか。言ふべきことは数多あまたあらうが、一言にして尽せば明治以来の教育の失敗によると言ふべきであらう。福田氏は、日清、日露の戦は日本文化の勝利であるとされたが、この両役について河村博士は概ね次の如く説かれてゐる。

日清戦争は学制発布前に生まれて小学校の課程など経なかつた人達が戦をした。日露戦争を戦つた人達も明治十五、六年以前に生れた人達で明治教育の影響は殆ど受けて居らぬ。殊にその時、日本を背負つて立つた政治家、軍人の幹部は皆明治以前の人であつた。明治、大正教育の本当の価値が明らかになるのは今後二、三十年の後であり（この趣旨を語られたのは昭和二年の講演「日米不戦論」——筆者註）、明治に生まれ、明治に育つて、明治の教育に依つて一人立ちした人々が文武の枢要の地位を占めたときに大戦乱があり、その結果日本が勝利を得たならば、そこで初めて明治大正の教育が謬あやまりでなかつたと言はるべきだとしてをられる。この設問に明治以降の教育は何と答へるであらうか。世上一般の定説は、戦前の教育は皇国史観や軍国主義の押付けで、それが日本の不幸を招いたといふが浅見も甚だしい。それらの史観や主義が厳密には何を意味してゐるかは知らないが、戦前の教育や学問もそれが上級に至る程、日本の歴史伝統とは無縁となり、そこに育つた人達が、名も無き民のまごころ

を覆ひ隠して戦争指導を謬つたのだとすべきであらう。

明治新政府の教育が、それに先立つ教育よりも文化力の充実に資するところ尠すくなかつたとは
檢けん覈かくを要する問題であるが、それが「心」を失つた教育であり学問になつた為だといふ観
点を逃すわけには行かない。それ故に、文化力の充実のため日本の伝統にかへるといふことは、
日本の歴史に外部から近づく事ではなく、日本の眞の伝統に連なるモニメンタルな人物と
その業績に、己を空しくし心を開いて参入することである。さういふ教育と学問を我々は失つ
て来たのである。世界人類の文明史を大観すれば、それは漸次「心」を失つて来た歴史である。
西欧の主たる史観はそれを進歩としてきたが、そして進歩の力と恩恵を否定することは出来
ないが、一方それが心を失つてゆく歴史でもある一面に目を蔽おほふわけには行かない。その中
にあつて日本の歴史は、言ことば靈たまの幸はふ国と言ひ伝へた古から明治の近代化に至るまで多くの
偉人天才が進歩と心の長養との相克統一のために心を砕いて来た。明治以降の教育の衰退も、
独立維持のための文明開化との相克の辛らさには同情すべきであるが、その辛らさを忘れる
とき日本の文化力は衰へる。戦後はその辛らさを忘れ果てた。いま日本の文化力の回復に努
めることは、日本の国運を開く為にも、また現代文明主潮の民主主義に人間の見識と品位を

確保する上にも喫緊きつじんの要事である。――

お前はよく分るのか

以上、加納先生のご論考の全文をそのまゝ、記させて頂きましたが、誰方からか一体お前にはよく分るのか、と言はれさうであります。

言はれる通り、幾度読み返しても良く分りません。しかし何か最も大事なものが潜んでゐる様な気がして心を深くとらへて離さぬのです。この気分は丁度、高橋竹山師の津軽三味線を聞いてゐる様なあの気分です。何だがよく分らねばて心コゆすられで、演奏が終つてしまつても、まだ聞いてゐてなあ、と思ふあの気分です。それは地から湧いて来る土の声の様であり、森から聞えて来る声なき声の様であり、海原の底から聞えてくるいのちの囁ささやきの様に思はれるのであります。

「名も無き民七千万の心のまこと、之れ実に陛下の大御宝おほみたまなり。真に之れ世界人文界の誇ならずや。之れ我が信ずる日本の文化なり」と言はれる河村先生のお言葉に涙を流すとき、

先生の言はれる、名も無き民のまことを長養すべき道を求め、その道を共に進む営みに、私達日本人は今こそ力を尽さぬことには、我が国の将来は、国籍を失った流浪の民となつて行く様な深い憂ひをどうすることも出来ない思ひに駆られるのであります。

勿論、明治以降の教育を身一杯に受けて来た私でありますから、先生方が深憂される、日本の文化から遠のいた生き方を身に附けてしまつてをるかもしれぬとの戦まのきをどうすることも出来ませんが、それと気付かせられた今からでも、友と声を掛け合ひながら、先生の言はれる「心を失つた教育」の奪回に、力を尽さねばならぬとの思ひを深めしめられるのであります。

しからば、加納先生が「明治新政府の教育が：「心」を失つた教育であり学問になつたのだ：」と言はれる明治時代の最上級の教育機関、即ち東京帝国大学の教育はどの様に行はれてみたのでありませうか。

「せいゆき聖諭記」に仰おほがるる大御心みこころ

明治天皇は明治十九年十月二十九日、東京帝国大学に行幸なされ、教学の実情をつぶさに御覽遊ばされ、お帰りになられてから侍講元田永孚を召されて次の如く仰せられます。

——朕過日大学ニ臨ス。設ル所ノ学科ヲ巡視スルニ、理科、化科、植物科、医科、法科等ハ益々其進歩ヲ見ル可シト雖モ、主本トスル所ノ修身ノ学科ニ於テハ曾テ見ル所無シ。

和漢ノ学科ハ修身ヲ専ラトシ、古典講習科アリト聞クト雖ドモ、如何ナル所ニ設ケアルヤ過日觀ルコト無シ。抑大学ハ日本教育高等ノ学校ニシテ、高等ノ人材ヲ成就スベキ所ナリ。然ルニ今ノ学科ニシテ、政治治安ノ道ヲ講習シ得ベキ人材ヲ求メント欲スルモ決シテ得ベカラズ。仮令理化医科等ノ卒業ニテ其人物ヲ成シタルトモ、入テ相トナル可キ者ニ非ズ。当世復古ノ功臣内閣ニ入テ政ヲ執ルト雖ドモ、永久ヲ保スベカラズ。之二繼グノ相材ヲ育成セザル可カラズ。

然ルニ、今大学ノ教科、和漢修身ノ科有ルヤ無キヤモ知ラズ。国学漢儒固陋ナル者アリト雖ドモ、其固陋ナルハ其人ノ過チナリ。其道ノ本体ニ於テハ固ヨリ之ヲ皇張セザル可カラズ。故ニ朕今徳大寺侍従長ニ命ジテ渡邊総長ニ問ハシメント欲ス。渡邊亦如何ナル考慮ナルヤ。

森文部大臣ハ師範学校ノ改正ヨリシテ三年ヲ待テ地方ノ教育ヲ改良シ、大ニ面目ヲ改メント云テ自ラ信ズルト雖ドモ、中学ハ稍改マルモ大学今見ル所ノ如クナレバ、此中ヨリ真成ノ人物ヲ育成スルハ決シテ得難キナリ。汝見ル所如何。——と仰せられます。

この大御言葉に対して、元田侍講がどの様にお対へ申しあげたかは次回に譲りますが、明治天皇の御慧眼と御深憂にただただ合掌低頭せしめられるを覚えるのであります。

第十七回

侍講元田永孚の奉答

明治天皇の御懇篤なお諭しに対し、元田侍講は謹んで次の様に奉答致します。

——臣嘗テ大学学科ノ設ケヲ聞クニ、修身ノ学科ナシ。和漢ノ学ハ文学科ニ和漢文アリト雖ドモ、僅カニ和漢ノ文章ヲ作ルノミ。哲学科ニ東洋哲学アリト雖ドモ、是亦僅カニ經書聖賢ノ話ヲ述ルノミ。加之僅カノ時限ヲ以テ勿々ニ經過スレバ、和漢修身ノ学ハ僅カニ名ノミニシテ其勢將ニ廢棄セラレントス。其ノ教科ニアル教官ハ、物集高見・島田重禮等僅々タル一、二員ニシテ、其余ハ皆洋学專修ノ徒、而シテ此人タルヤ、大抵明治五年以來ノ教育ニ成立シタル者ニシテ、西洋ノ外面ヲ摹仿シ、曾テ国体君臣ノ大義仁義道德ノ要ヲ聞知セザル者共ナリ。彼ノ某等ノ著書ヲ一見シテモ、其放言スル所ニ依テ其思想ノ赴ク所ヲ概見スベシ。

此等ノ脳髓ヲ以テ生徒ヲ教導セバ、後來ノ害実ニ恐ル可キナリ。今ニシテ此ヲ停止セザレバ、復挽回スベカラズ。(中略)

：抑教育ノ重大ナル夙ニ

陛下ノ深ク慮ル所、幼學綱要ノ欽定(筆者註、明治天皇のご意向に基づいて元田侍講が編纂、明治十五年に宮内省より刊行され、全国の学校に頒布された)アリシヨリ漸クニシテ米國教育ノ流弊ヲ救正シ、世上再タビ忠君愛國ノ主義ニ赴キ、仁義道德ヲ唱フル者アルニ至リシモ、去々年ヨリ又復洋風ニ傾キ、昨今ニ至リテハ專ラ洋學ト變ジ、和漢ノ學ハ將ニ廢絶ニ至ラントスルノ勢、有志ノ士皆大ニ憂慮スル所ナリ。(中略)今西洋教育ノ方法ニ由テ其課程ヲ設ケ、東洋哲學中ニ道德ノ精微ヲ窮ルニ至ルノ学科ヲ置キ、忠孝廉恥ノ近キヨリ進ンデ經國安民ノ遠大ナルヲ知得スルコトヲ務メタランコト、真ノ日本帝國ノ大學ト稱スベキナリ。今ノ設ケノ如クシテハ

聖諭ノ如ク、名醫ハ多人數成就ナルモ、政事ハ執ルコトハナルマジク、法学ニテ君德ノ補佐モ充分ナラズ、理化植物工科等ニテ其芸ニ達シタリトモ、君臣ノ道モ國體ノ重キ脳髓ニ之無キ人物日本國中ニ充滿シテモ、此ヲ以テ日本帝國大學ノ教育トハ云ベカラザルナリ。――

と奉答申し上げたところ「聖顔喜色麗シク、更ニ又反復懇諭アリ。一時間余ニシテ退ク。」と『聖諭記』に記してあります。

修身の学とは

明治天皇のこの御聖旨は侍従長を通じて、渡邊総長に伝えられますが、果して御聖旨が大学に受け入れられ、学問の道が正されたでありませうか。

その答へは細部の検討を待たなくても、拙稿の第二回で既に触れて置いた如く、それから三年後の明治二十二年二月十一日「帝国憲法」が發布せられた日に、『日本』といふ新聞を発刊された、陸羯南先生が、「近世の日本は其の本領を失ひ自ら固有の事物を棄つるの極、殆ど全国民を挙げて泰西に帰化せんとし、日本と名づくる此の島地は漸く將に輿地図の上にならばただ空名を懸くるのみならず」と、当時日本の指導的立場にあつた知識人達に警鐘を鳴らし、日本古来の道を説きつづけられたこと、次いで明治二十三年十月三十日には、親しく「教育に関する勅語」を賜つただけを拝しても、大御心が大学人にゆきわたらなかつ

たことを雄弁に物語ってくれてゐる様に思はれるのであります。

しからは、明治天皇が今の大学には大本をなすべき「修身の学」が欠如してゐる、とご深憂遊ばされた「修身の学」とは如何なるものを指してをられたのかを、しばらく皆様と共に考へてみたいと思ひます。

申し上げる迄もなく、その語の出典は、儒教の経書「大学」に説く「格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下」によることとはご承知のところでございますが、この「修身」について元田侍講は、明治天皇への「進講録」のなかの第一論語学而章で次の如く述べてをられます。

——初めに何の為に「論語」を採り上げるかと申しますと、日本の国は、皇孫瓊々杵尊様が国土を開造なされ、天祖の訓を奉じて、徳を修め、民を化し、列祖代々継承して教を布き、政を施して来られました、皆是は生知安行の徳（筆者註、天性聡明で、生れながらにして道義に通じ、安んじてこれを実行される御徳）、以心伝心の妙（筆者註、大和の国は古より言挙げしなくても心の通ひ合ふ国柄である、といふ意でせう）、其の理は、神器に寓して神遠奥穆、曾て学問講習の迹あるを見ず（筆者註、その理は三種の神器にすべてこめられて

をり、到底口では言ひ表はすことの出来ぬ奥深いものであって、ことさらことあげして伝へられたといふことはない。) 然し代々世を重ねてゆくに従ひ、人は自然に智巧に赴いてゆくので、至徳の大道も正純を保つことが困難になつてくる心配が起きて来た。そこでその道を講明して拡充するには、はつきり目にみえる書伝講説に由らざるを得ない。然し我が国は未だ文字に富まないのです、これを講誦する由がない。幸に『論語』といふ書が百濟から伝はつて来た。其の書は説く所、我が国の道と違ふところがない。そこで応神天皇様(筆者註、第十五代天皇、八幡宮の御祭神、お子様には後に仁徳天皇となられた大雀命と日嗣を互に譲り合はれた宇遲能和紀郎子がおいでになる)はこれを講誦なさり、更に王仁を師として、太子であられた宇遲能和紀郎子を弟子とされ、『論語』を学ばせられ、天祖伝来の至徳の大道を發揮拡充なされたのであります。…さうした理由から『論語』を御進講申し上げるのであります。——(以上筆者の下手な意識による)

と前置きして次の如く進講されます。

学んで時に之を習ふ

——論語開卷「まなんでときこれならふ、またよろこばしからずや学而時習^レ之不^二亦説^一乎^〇」と云ふ者は、二十篇の主旨、只此^〇学の一字なり。凡そ人、天地の間に生れ、自^{てんし}天子^{よりしよ}至^{みんにいたるまでひつせい}庶民^{びつせい}畢生の事業、只此^〇学の始めを為し、終りを為す者なり。故に此の学あれば、其の天職を全うす、此の学なければ、其の天職を失ふ。此の学達すれば聖人となり、此の学達せざれば、庸愚となる。此の学明かなれば、天下平かに、此の学明かならざれば、天下乱る。人間天下万事の成敗、只此^〇学の明暗にあるのみ。故に孔子の人に教ふる、只此^〇学の一字にて、論語開卷、学^{シテ}而時^ニ習^フ之^セと云ふ。一言一行、学の事に非ざるはなし。然るに学に正あり、偏^{へん}あり、大、小、本、末あり、孔子の所^い謂^ゆ学は至中至正の、大本^〇達道^〇にして、修身^〇平天下^〇の道德学なり。当世の所^い謂^ゆ学は、一科々々の学、異端末技の謂^いひにして、大本^〇達道の学に非ず。是れ此章、学^〇の字を講ずるに於て、始めに弁ぜざるを得ざるなり。(中略)

人君の学は、天下を治むるを学ぶに在^{あり}て、天下を治むるは仁に止まるのみ。然るに仁に止まらんと欲して、心正しからざれば仁に止まる能はず。心を正しうせんと欲して、意誠ならざれば心を正しうする能はず。意を誠^{まこと}にせんと欲して、天下の理に明かならざれば、意を誠

にする能はず。所謂明德を天下に明かにせんと欲せば、正心、誠意、致知、格物布て天下の理を明かにするに始まりて、一旦己れに克ち、礼に復りて、而後天下仁に歸する者、是れ人君仁に止まる、学問の次第順序にて、此章の学んで時に之れを習ふとは此事なり。——
と言つてをられます。

尊い言葉と思ひ永々と引用いたしましたものの、とてもその深遠な教への一端をもよく知ることが出来ませんが、修身といふことについて、何かほのぼのとしたものを恵まれる思ひがするのであります。今、私なりにその恵まれたものを大胆に申し上げますと、修身とは、真心によつて物事の本質を直覺し、それを己れの生き方として身につける智慧を長養する学のことであり、しきしまの道の修練であり、物のあはれ（人の哀なる事をみては哀と思ひ、人のよろこぶをき、ては共によろこぶ、是すなはち人情にかなふ也、物の哀をしる也——本居宣長・紫文要領）を知る生き方の奪回であり、自然と人生を自己の体験に照し合せながら、その本然のいのちを感得し、それを我が生き方となるまで深めて行く修行を、広く「修身」と言はれたものと思はれるのであります。

そしてそれは、人として誰にも求められる最も大事な学問であり、所謂今日、学問と言は

れてゐるもの―その中心をなしてゐるのは申すまでもなく科学（自然科学・人文科学）であります―を学ぶ者にとつても、といふより科学を学ぶものこそ修身の学がしつかりなされなければならぬことをも知らしめられるのであります。

キュリー夫人（ラジウム発見で御主人と共にノーベル賞受賞）は、弟子をとるとき、その人の人物を先づみたと**言はれて**をすることは、この間の消息を知る上で大きな示唆を与へてくれる様に思はれるのであります。

第十八回

人類は自然の秘密を利用出来る程成熟してゐるであらうか（承前）

前回、結びの言葉として、唐突の様にキュリー夫人が弟子を採^とる時、その人の人物をよく相^みられたといふことを申し上げましたが、それは、今の世に言ふ学問（その中心は科学）をする人はその基本に人間が出来てゐること、即ち素直な心を中核とする文化力が身についてゐることが求められるに因らず、その基本の学（修身）がないがしろにされてゐることを、明治天皇が御深憂なされたのではないかといふことの大事を、極めて分り易く教へてくれてゐる様に思はれたからなのでした。

キュリー夫人はまた、先逝かれた御主人の業績を顕彰される言葉として、ノーベル賞受賞の折、御主人が述べられた「犯罪人の手にかかればラジウムは非常に危険なものになりかねない。…人類は自然の秘密を知つてはたして得をするであらうか。その秘密を利用できるほ

ど人類は成熟してゐるだらうか。……」といふ言葉を、夫の業績に捧げた彼女の著書の巻頭にあげてゐるとき、ます。(戸田義雄著「祖国と人類の悲劇」一五九頁所載) このキュリー夫人があげられた、御主人の言はれる「成熟」した人になる為の学が、実は「修身」の学であらうと私は直覚したからなのであります。

即ち我の外にある外界を客観的に観察して、そこにひそむ眞実を実証的に推理する科学(知解)は、一見、独立して存在しうる様に考へられますが、己自身を見つめる、内に向けられた目によつて直覚される(心解並びに体解)宇宙・人生の眞実を求め、これを己の生き方として身につける(文化力を身につける)、修身を中核とする教学がその根本に備はつてゐなければ、まことの科学も技術も十全な発達をなし得ないことを知らされるのであります。

科学を学ぶのも人であり、その人が如何なるものに興味を持ち、また如何なる予感を与へられて眞実を発見するか。(世界的な科学の発見と言はれるものは、すべて神の啓示の如く、ひらめく予感から出発したと聞いてをります)

またその成果を如何にして人類の幸のために活用するか(技術)は、すべてその人の人柄(教学によつて身につけたもの)によるものであることを、キュリー夫妻は、確しかと見抜き、その

大事を、人類の行く手の不安に戦^{その}く思ひを込めて、私達に訴へかけて下さった様に思はれるのであります。

渚の憩ひ

ここで一寸息抜きのために、戦後の河川改修について、私達が歩んで来た道を振り返ってみたいと思ひます。

科学の成果を如何に人類の生活に適應させるかと言ふことは、最も身近かな問題として、日々の生活で実感せしめられてゐるところであります。戦後の河川改修はその典型的なものとして、他人を責めるといふことではなく、お互ひ身に沁みて省みさせられるのであります。

治水といふと、溢れる川水を最短距離で海へ流し込むといふ手法がとられ、コンクリートによる直線の堤防だけの殺風景なものになってしまひ、(青森の堤川も昔は学友達と語り合ひながら堤の上を徘徊^{たもとほ}り、やがて土手の草の上に腰を下し、暮れゆく一日を惜しみながら人

生を語り合つた思ひ出。その懐かしい土堤どてがなくなり、今は散歩も出来ぬコンクリートの垂直に近い護岸になつてしまひました。お蔭で水際に生える植物や、それによつて生きる魚や小鳥達の遊び場や産卵場が無くなり、蛇行することによる大地の保水力・流速の減殺や、渚での水汲み、洗濯や水遊びなどの人々の憩ひ、また瀬のせせらぎ、河鹿かじかの鳴き声、測の静謐ひびを織りなしながら、春の柳、秋の紅葉を映して流れゆく清冽な川、人と人、人と自然を無言のうちに結びつけてくれた大切なものが、文明といふ科学・技術の効率一辺倒の怪物によつて、失はれて来たことに漸く私達は気付き始めてをります。

その理由は、科学・技術を学び応用する人やその利益をうける私達が、それらをと・こ・ろ・あらしめる文化力を失つて来たからではないだらうか。言ひかへると、幼い頃から産土うぶすな様を中心に、村人と共に自然を友として親しみ馴染なじむ、教学の基本となるべき生き方をして来なかつたことに由来する様に思はれるのであります。

効率・合理性のみを求め、人間の、否いな、生なまきとし生なまけるものもの真の幸とは何かを、言葉では確しかとそれと表現出来ないながら、心身にほのかに感得してゐる人にしか、実は科学・技術は勉強して貰つては困ることは、サリン事件を引合ひに出すまでもなく、この身近かなこと

でも身に沁みて知らされ省みさせられるのであります。

「教育者に与ふ」といふ論考

私が生涯の師と仰いで参りました黒上正一郎先生（『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』といふ御著書を残し昭和五年三十一歳で御逝去）の、兄弟の様に親しかった梅木紹男さん（当時東京帝国大学生）は、「教育者に与ふ」といふ論考（昭和四年、享年二十八歳御逝去直前のご執筆）のなかで、科学の授業に携はる教育者の心得として、物を見るとき、全体との関聯に於て、うらやかな眼でみる慧眼（教学）を、自らの日々の真摯な生活を通じて身につける大事を、私達後に続く者への熱い思ひを込めて次の如く訴へてをられます。

——自然科学の教授の最初に於て観察と実験とが尊ばれてゐ乍ら、それが統一に於ては真に然るか危ぶまるゝ所が多いのである。言語は先づ概念の表現として尊ばれ、無理矢理に一定義の下に言葉が与へられ、各個人の過去の経験による類推よりそれ／＼の内容を言葉に表

はさるゝ概念の内包として実験観察を統一してゆく、ここには恰かも代数式に於ける既知数を a 、 b 、 c 、 \dots 等によつて表はす時その a 、 b 、 c 、 \dots の値を各人が定めて然る後未知数を求める様なものである。その時 a 、 b 、 c 、 \dots の数値を何故にそれだけの値に与へたかといふについては明瞭なる信念を欠いてゐる。

今物理学について考へてみよう。力といへば腕力による押したり、引いたりする力が表象せられそこから一般の力が類推されよう。また分子原子の存在といへば箱の中に入れた豆粒が想像されよう。波動運動と言へば水の波が考へられよう。もつと個々の問題に於て考へてみたならば、目に見えない存在、又は力はいかにした各種の推理から生れてゐるのである。その推理は論理的帰納演繹の推理と共に無意識に働く可視的現象の類推が大きな力をなしてゐる。こゝに経験法が重要な位置を占めてきた近代の特徴が生れたと共に、現象の個々の認識が余りに過重せられてそれから一切の法則に対する關係を見出すのでなく、個々の現象に孤立的法則を持たしめて、然る後現象各自を結ぶのである。

エネルギーの思想がさうである。力学的エネルギー、熱のエネルギー、電気のエネルギー、その様な量を持った力の存在といふことは労働者が腹に充分食物を入れて一令の下に仕事を

しようとする時の力を連想し、熱エネルギーが仕事のエネルギーに変わる様なエネルギー相互の変質は恰も一コップの水が他のコップにうつさる、や、薬品の為に、真赤になる様なマジックと同様に見はしないか、こゝには工学が物理学を支配するのである。

適用の便宜が、理論の真理を動かすのである。之を如実に示す例として、力学の各種問題を論ずべきなれど、適例として慣性について考へてみよう。物体はすべて現在の運動状態を保持せんとする性を有すと考へるのである。そこには可視的物体が個々別々に存在すると考へる如くに力も亦個々の物体に保有せられてゐると考へる。そして宇宙に漲る力線の網の目は考へられて居ないのである。故に外部から全く作用をうけざる場合には運動せる物体は何時迄も速度を變ずることはないと考へる。この場合外作用を摩擦によつて代表せしむる時、摩擦が多い丈運動体はマイナスの加速度をうける。故に少くすればする丈、負の加速度が減ずる故、数学的に極限を考へ得たのである。けれども摩擦のあるといふことは運動体の周囲の物質に力線の結合のある証明であり、即ち宇宙の力線網の中に存在するといふ証明である。故に摩擦を零にする世界があるとすれば運動体自身は運動し得ないのみならずそのもの自身が破壊しなければならぬのである。何となれば自分自体のみ力線を出して活動し周囲に之

に・応・ず・る・も・の・が・な・け・れ・ば・力・線・は・結・合・の・相・手・を・失・つ・て・、・内・部・に・親・和・す・る・短・力・線・と・、・外・部・に・伸・び・
る・長・力・線・と・の・調・和・を・失・ひ・、・表・面・張・力・の・破・壊・を・起・す・か・ら・で・あ・る・。

此の便宜が、事実を変形したことは多くの学生を誤らしむるのである。宇宙力線網を離れて、個々物体個々の力を想像することは、全体の人類生活を離れて個人生活を考へることにもなるのである。個々の現象を個々のものとして考察するところに純客観をモットーとして他の生物を人類と分離せしめ而もそれは人類をも他の生物から類推してくるのである。

是が現代の自然科学の研究方法論が学生の精神教育を誤つて了つた原因である。現在如何に精神教育を別科として学生におしこまんとしても現在存在する明瞭なる教育即ち自然科学に対する研究方法論をこの儘まゝに放置するに於ては何の効果を見得るであらうか。――

第十九回

自行化他（承前）

梅本紹男さんの『教育者に与ふ』といふ御論考は、この続きを次々お書きになられる予定であられたところ、胸のお病で急逝なされた為序説と、前稿でその一部をご紹介申しあげた第一信を以って絶筆となつたのであります。

第二信、第三信で如何なることをお書きにならうとして居られたかは到底私などの思ひも及ばぬところでありますが、序説のなかで

——一即一切行と云ふことがある。それは一つの研究はそれを究めることによつて真理の奥底に達することが出来ることを云ひ現はしたものである。一課目の教授といへどもそれが教授を専念することによつては、学生にいかにか大いなる薰化を与ふるかもはかり知れない。

教育者自身が学科に興味なく俸給に対する責務として荷厄介にやつかいといふ態度を以つて、生徒の前にひきずらるゝ如くに立ち、自らの正しき理解なく、またその内容に深き信念を持たずして、あり来りの其の場ごまかしの講義をする時、いかにして学生が真剣になり得よう。真剣は真剣によつて呼び醒まさるゝのである。

教壇に立つものが其の学課に対する苦しみ抜いた体験より溢れ出づる講義を聞くに及んでいかに其の学課に不忠実なる学生といへども、大なる感銘により何者かを与へらるゝであらう。今体験といふ言葉を使った。学課に於ける体験とは、その教へんとする内容即ち本に書いてある事柄を鵜呑みにすることではなく、或は自らの心に照し合せて其の真偽を極め、或は実験に依つて其の当否を究めなくてはならぬ。化他は先づ自行に始まらなくてはならない。(筆者註、聖徳太子様は、維摩経義疏のなかで「若し天下の道理を論ぜば、悪を遣り善を取るは必ず己に始まりて方に能く人を勧む、若し自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得む」(文殊問疾品)と仰しやつて居られます。)常に実物にあたつて真摯なる態度を執ることは、学生を空理空論の迷路より救ひ、正しき決定を心に与ふるであらう。

歴史教育が現代の思想界を救ひ、正しき道を教ふるものとの叫びを聞く。然し、今日の如

く萎微したる歴史、事實羅列の教育は、却つて唯物史觀に材料をあたへる結果となるやも計り知れない。歴史教育者自身が人間の踏来つた過程を考察し、将来の日本が如何にあるべきかを自ら苦しむ人にあつて、眞の歴史教育は達せられるのである。

古の大和の民が言挙を嫌ひ直接体験に生きようとしたその思ひは、今我々に於ては経験に重きを置く、——即ち経験内容を持つ理論に進むことで無くてはならない。——と述べてをられる言葉にその思ひが籠められてゐる様に思はれ、このお言葉を私達は「修身の学」の枝折として大切にして参りましたので、多少前後致しますが、ここに留めさせて頂きます。

生きてる全体と部分

さて前回ご紹介申しあげたご論考の初めの方で実は、梅木さんは次の如く述べてをられるのであります。

——今一学生に一年間一草木について観察し続けて行く事と、一ヶ月間その草木に関する諸文献を集めて研究するのとどちらが真に勉強した気がするかと尋ねたならば、恐らく多くの学生は後者によって真に勉強したと云ふ自覚を感じるであらう。

「無知なる者に発見多し」と或碩学せきがくが云った。確かに過去の文献に亘わたつてゐない者は、既に発見せられた事実とも気付かないで自らの発見として喜ぶ愚を演ずるであらう。しかしながらその愚は決して笑ふべき愚ではない。自ら発見したと云ふ努力と其の精神傾向は必ず又あらゆる方向に向つてしかあるであらう。研究すべき対象が自然そのものしぜんそのものにあるに拘らず、他人がその自然を研究したその結果を総すべてと考へるならば、未来に対する発展はあり得べくもない。我々の師は自然しぜんにあり、研究対象も又自然しぜんにある。——と述べてをられます。

梅木さんは、我々が師とすべきは、自然そのものであると言はれます。そのお言葉に籠るものは、自然は到底我々人間の限りある覚さとしりを以つては計はかり知ることが出来ない、靈妙不可思議な、生きたる存在であるとの畏敬の念おもひと慎みを持たねばならぬ、といふ大事を、私達に切に訴へかけてをられる様に思はれるのであります。

宇宙の力線とは、生きたる自然の、目に見えぬ如来の働きであつて、その力線網に生きと

し生けるものが包まれて、いのちを保つてゐることへの合掌感謝の思ひが欠けてゐるとき、我々は個々の物体の部分的存在や法則に執とらはれ勝ちとなる過あやまちを犯すことになるのだ、と言はれ、それを正す道は、草木に関する山と積まれた文献を漁あさるよりも、その草木を愛育しながら熱心に観察することによつて、自然を觀照するうらやかな眼を養ひ、我々生きとし生けるものが、宇宙の温かい力線網に包まれてその存在を得てゐるといふ、をさな心（真心）による感得を得ることが出来るのだ。さうした感得を持たぬ者が、科学を学ぶとき、部分の真理に執とらはれ、生きたる全体との繋つながりを無視した結論を導き出し、さうした勉強をしてゐる者はまた、部分たる個人の存在を重視し、お祖先・親兄弟・友人・隣人・村人との繋りのなかにしか我といふ存在はあり得ないといふ自然の摂理を忘れた、抽象論を称とこへる様にもなるのだ—個人といふ存在は抽象的に考へられた概念であつて、実際に存在するのは、長内俊平と云ふ日本人であり、青森県民であり、父健喜、母いしの長男であり、姉節子の弟であり、良平、浩平の兄であり、妻静枝の夫であり、子供三人の父親であり、多くの友人達の友であるといふそのつながりのなかでしか、我たり得ない、長内俊平といふものしか具体的には存在しないのだ—と言はれるのであります。

修身といふ学

そして、「修身」といふ名前をつけた教科書で、壇上からいくら祖先や親を尊み、兄弟、友人、隣人と仲よくせよ、と教へたところで、科学の研究方法がいまの様に文献中心の知解ちげの伝達に終始してゐる限り、そんな「修身」の授業など何の役にも立たぬと言つてをられるのであります。

まして入りて相しやうとなるべき人材を育成すべき大学に於て学んでゐる学問と称するものは、或は人文科学と云ひ文化科学と称し、精神科学と名付けたところで、すべて科学であつて、その科学をして処ところあらしめるところの真の意味の修身（教学）——それは、自己とは何か、と自らの内心を深くみつめ、外を観るときも必ず己とのつながりに於て観るところから得られる生きる力としての文化力（智慧）、即ち天の恵み、地の恵み、人の情に合掌感謝する魂を身につける様な学問——の奪回を深憂を以つて訴へられたのであらうと思はれるのであります。

福田恆存先生のお話にありました、「この窓を開けてもよろしいですか」と声をかけられた老嫗（拙稿第十一回参照）の心のなかには、「生きとし生ける者はわが隣人であり、その隣人の情なしには平安な人生は送ることが出来ない」との深い自覚が、家庭の芳縁による薫化や、竹馬の友と兎を追ひ小鮒こぶなを釣った、産土様うぶすなを中心とする村人達との隣へだてぬ生活のなかに、自然と身に沁みつき、自づおのからの言葉として発せられたものでありませう。

この老嫗の様な生き方を身につけることが、明治天皇の仰せられる「修身の学」といふことであらうと思はせられるのであります。

第二十回

修身の学を奪回する道（承前）

永いこと自分でもよく分からぬことをくどくど述べて参りましたが、私の様な世の爲にならぬ老人でも、今日のとめどなく文明拝跪はいきへ傾斜して行かうとする祖国の現状をみてをりますと、このままではいけない、何としてでも後に続く若者や素直な子供達に、我々の祖先達が営々と育んできた智慧―生きる力としての文化力―を身につけさせる道を、皆で力を合せて考へ実行して行く方途をと祈らずには居られません。

然し、その様に申し上げると「俊平君!! 君は後へ続く者達へ伝へて行く道と言はれるが、一体そんな健全な若者達が末広がりについて行くのか、今みられる少子化の波は、我が祖国日本の将来に暗い陰を投げかけてゐるのではないか、そのことを先づ心配しなくてはならないのではないのか」と言はれさうであります。

まことにその通りでありまして、このまま行くとな我が国は、子供や孫達の数が減って行き、文化力の奪回どころかそれだけで、日本の将来は寒々としたものに見えてくる様に思はれるのであります。

このことが心配でなりませんので、先に進む前に、若い人達に何としても気付いて欲しい幾つかのことを申し上げることに致します。

レーナ・マリアの「希望の歌声」

平成十二年五月二十日の午後、朝日放送のテレビでスウェーデンのゴスペル（福音歌）歌手レーナ・マリアさんの「希望の歌声」と題する放映がありました。

生まれながら両手が無く、片足も殆んど無い位短い障害児—この表現が果して正しい表現かどうか、私の様に正常者とみられてをる者こそ、肝腎の心が病み萎なえてしまつてゐるのではないかと折々思ふことがあります—として生れ育つた彼女（二十歳代かと拝見しました。美しい方でした）の歌声に聞き惚れつつ胸が詰まる程の感動を覚えました。

彼女の生ひ立ちを綴る画面では、「中学時代に級友から『一本足』といふ綽名を付けられたことがあります。何とも感じなかつたので、苛めもありませんでした」と言はれた言葉が、闇夜に一条の光明をみる様な、貴いものに照らされてゐる様な思ひにさせられ、その歌声に「希望の歌声」と名付けられた秘密を垣間見る思ひを致しました。（古語に、「自ら卑下して後に他人これを侮る」とあります）

片足で字を書き、片足でオルガンを習ひ弾き、片足で料理をつくり、両手片足の無いその身体で泳ぐ姿は、魚が水を得た様な美しい動きでした。（ちなみに障害者世界大会の平泳ぎ、自由形、背泳ぎで、それぞれ六位以内の成績と伝へてをりました）

ストックホルムの大学で歌手を目指して研鑽を積み、今は全世界を廻って人々に、殊にも身障者の方々へ生きる勇氣と希望を与へ続けてをられる姿に深く感動せしめられました。

彼女は「私は人の価値は外面ではなく内面にあるといふことを、幼い時から信じておりました」と言つてをられました。大学で知り合つた御主人との間に、「子供が授かることを切に望んでゐます」と結ばれた言葉に籠る無限の思ひを、私達の後に続く若い方達が汲みとつてくれることを切に祈つたことでした。

このレーナ・マリアさんのお言葉は、「このまま人口が増えたら地球の限られた農地で養ひ切れなくなる。子供は多く産むべきでない」とか、「障害児の生れる可能性のある者は子を産むべきでない」「人類の発展のためには、アインシュタインの様な優秀な人の精子を別け与へるに如くはない」「何人も産んでは十分な教育は出来ない」などと言ふ様な、限りある人智から生れた文明思想の、一指だに触れることの出来ぬ威厳に満ちたものでした。

「私の今の夢は、今のひと時ひと時を大事に生きたいことです」と結ばれた言葉こそ、さうした想像を絶する生を授かった方の、言語を絶する苦闘のなかから生れた、「生の威厳」とも言ふべき至言かと思はれ、魂に深く刻み込まれたことであります。

松山千春氏のライブとトーク

自分でもよく分らない様な片仮名の見出しを使ひ不快であります、テレビの題名がさうなつてゐたのでそのまゝ、使はせて頂きました。

話は一寸遡りますが、昨年十二月六日夜、家内が観てゐた「松山千春氏のライブとト

ク」といふテレビ放送に付き合つてゐるうちに、「ミイラ取りがミイラになる」の喩への如く、小生の方が逆にのめり込んでしまつて遂に最後まで観てしまひました。床に入つても心が昂つてなかなか眠れぬま、午前四時に至りました。そこで眠れぬままに

父母を姉を故郷を心より称へて恋ふる唱ぞ悲しき

といふ下手な歌を一首詠み、やがて眠に落ちました。

松山さんのお話のなかで、「ナンパーワンになることはない。誰でもないオンリーワンたれ」と言はれた言葉にも胸を衝かれましたが、最後に言はれた、「お父さんお母さん私を生んで下さつて有難う。光ちゃん（松山さんのお子さんの名）生れて来てくれて有難う」と言ふ言葉が身に沁みました。

そんなことをあれこれ思つてゐたところ、四月二十四日の東奥日報の明鏡欄に、「案ずるより産むがやすし」と題する一主婦の方の投稿が載つてゐまして、救はれる様な心の安らぎを与へられました。その方の言葉は次の様なものでした。

——私は一歳四ヶ月の娘を持つ専業主婦です。先ごろ本欄に二回、主婦の方からの投稿がありました。内容に少し違和感がありました。「専業主婦になれるのは一部の恵まれた方だけ」という書き方をされた方がいましたが、そうではないと思います。確かにそれなりの収入がなければ、やりくりのしようもないと言われればそれまでですが、わが家も収入の三分の一近くの住居費を払うと、かなり節約しなければ生活できません。私たち専業主婦は周りの人が思っているよりずっと努力しているのです。決して優雅で気楽な立場ではありません。

「子供をつくる」という言い方も好きではありません。子供は授かりものなのです。生活を整えた上で子供を迎えたいという気持はわかりますが、そんなに都合のいいものでもないと思うのです。また育児は体が勝負です。私ももう少し早く産みたかったと思うくらいです。周りの大人の方たちはきつとそういうことを知っているから「早く子供を」と言ったのではないでしょうか。

わが子は本当にかわいく、いくら愛しても愛し足りないくらいです。子供を育てるのにお金がかかりますが「案ずるより産むがやすし」。まさにその通りです。産んでしまえば何とかなるものです。昔の人はいいことを言ったものですね。——とありました。

そんなことを思つてゐるときに五月二十日、英国のブレア首相夫人が四十五歳の年齢でありながら、第四子を出産されたとの報に接し、深く胸を打たれるところがありました。

祖神の祈り

天照大御神様は、皇孫瓊杵尊様をこの国へ降しまつる時に「宝祚の隆えまさむこと当天壤と窮り無けむ」（日本書紀）との御神勅を賜りました。私達日本国民は遠い昔からこの御神勅を畏み、祖国の永遠を信じて参りました。

この御神勅に相違がなければ、伊邪那岐命様が、先立たれたみ妹（お妃）伊邪那美命様を恋ひ慕はれて黄泉国まで訪ねて行かれ、約束を破つたために妃様に追はれて、黄泉比良坂で最後の別れをなさいます。その時伊邪那美命様が「愛しき我が那勢命、如此したまはば汝の国（大八嶋国—日本）の人草一日に千頭絞り殺さむ」と申されます。このお言葉に対し、伊邪那岐命様は「愛しき我が那邇妹命、汝然かしたまはば、吾はや一日に千五百産屋立ててむ」と答へられます。「是を以て一日に必ず千人死に、一日に必ず千五百人なも生るる」と

古事記に記してある如く、我が国は弥栄いひさかえに榮えてゆくことを信じ、「親として子にしてやれる最大の贈り物は兄弟である」といふ昔人いにしへびとの智慧ある言葉をこれにつけ加へて、若き友らへ贈る言葉としたいと思います。

第二十一回

勝鬘は我が女なり

先へ進まうと思ひますが、最近の相繼ぐ少年達の凶悪犯に暗澹たる思ひにせしめられ、これに一言せず居れぬ思ひにせしめられてをります。さうは申しましても人様に偉いことを申しあげる資格はありませんので、祈る様な思ひで一、二のことを述べさせて頂きます。

見出しに書きました「勝鬘は我が女なり」といふ語は、仏典、勝鬘經の初めの方に出て参る仏語であります。印度の舍衛国の国王であつた波斯匿王とそのお妃様の末利夫人が、隣国の阿踰闍国王、友称の妃として嫁いでゐる娘の勝鬘様にお釈迦様が説かれる大乘の信に帰依する様に勧める便りを出されようとして、「共に相謂ひて言はく、勝鬘夫人は是れ我が女なり。聡慧利根通敏にして悟り易し。若し佛を見たてまつらば必ず速かに法を解して心疑無きを得む。宜しく時に信を遣はして其の道意を發すべし」と話し合はれます。

この仏語について、聖徳太子様は、「是れ我が女なり、とは讃重の辞なり。言ふところは、子を相ること父母に過ぐるはなく、臣を知ること君王に如くはなし。我が子の称は自他を別たず、唯善に在り。今勝鬘は既に己が子たり。且明德ありて応に勝道を聞くべきが故に、亦自ら我が子と称するなり」と解釈なさつてをられます。（勝鬘経義疏序説）

このお言葉は拝する度に尊く思はれ、験が熱くなるを覚えます。

このみ言葉に隠るものは「子は授かりものであり、縁あつて自分達の子供として生れて来たけれども、己の所有物ではない。同じ様に他人のお子さんも他所様のお子さんとして生れて来たけれども、皆我々同胞の後へ続くお子さん達であり、共に慈しみ、力を合せて善導してゆく務を持つてゐるのですよ」といふお教へではないかと頂かせられるのであります。

我が村・我が母校・我が国

私達は「我が村」と呼ぶとき、産土様で共に遊んだ竹馬の友、いつも優しくしてくれた村人達、日の暮れるのも知らずに泳ぎ廻った懐しい海、野苺や菜萵を竹馬の友と共に採つて食

べた裏山、「祝入営」の幟のぼりを幾本も立てて入営する若者を、村人のあとについて峠まで見送つた思ひ出や、漁に出たま、帰らぬ村人の舟の帰りを願つて、幾晩も幾晩も村中の人が出て海岸に篝火かがりびを焚き、夫の名を、子の名を、親の名を、友の名を沖に向つて叫び続けた光景など、「我が村」と呼ぶとき、どつと一度に胸に甦よみがへつて参ります。

また「我が母校」と呼ぶとき、懐かしい先生方の姿、語り口、悪戯いたづらをして廊下に立たせられた思ひ出や、学校の帰り道を、わざと遠回りしながら人生を語り合つた学友達、数々の思ひ出の籠る校舎など、「我が母校」と口に出しただけで、一時にどつとそれらの懐かしい思ひ出が心のなかに甦よみがへつて参ります。

それはまた私達が「我が国」と呼ぶとき、この懐かしい美しい大和の国に共に生れ、同じ国語こくごで語り合ひ、同じ天神地祇てんじんちぎを祭り、お国の至るところに田圃たんぼがあり、稲穂が稔り、その出来秋あきを、農夫と言はず漁師と言はず商人と言はず勤人と言はず学生と言はず、国民こぞ挙つて心配し合つた懐かしい祖国こくが魂たまのなかに湧き上つて参ります。

この「我が…」といふ表現は、聖徳太子様が「我が子の称は自他わかを別わかたず唯善ただにあり」と仰せられたみ言葉に、そのまま連なる同胞一体感の表現と仰がしめられるのであります。

いゝふりして青年に殴られた話

昔は―と申しましても、私の体験出来ました少年時代は大正の終りから昭和の初め頃までしかありませんが―その頃の大人の方は、他人の子供さんでも良くないことをしてゐると、「こら!! 何してるんだば」とよく叱つてくれたものでした。また親が畑に行ったりして留守にしてゐる子が居ると、わが子と一緒に畑辺みばたに当たらせて世話をしてくれましたものでした。

そんな経験をいたしましたので、私も成人して東京に住んでをりましたころ（三十歳代から七十歳代まで前後三十数年住んで居りました）は、電車の中で喧嘩してゐる青年などを見ますと、見過ごす訳に行かず、つかつかと寄って行って「日本人同士喧嘩して如何どうするか、止め給へ!!」とよく注意しました。素直に聞いてくれることも少くありませんでしたが、一緒に電車から降され、逆に「いらん口出しをするな」と凄すごまれた上に殴られたこともありました。

しかし一番の失敗は、私が七十歳の時でした。その夜は、友人が営んでゐた銀座の居酒屋

で飲んでゐるうちに興に乗り、地下鉄の終電に近い時刻になったことに気づき、有楽町の地下鉄駅に急いでをりました。さうしましたら地下鉄のホームへ降りる階段の途中に、一人の青年が酒に酔つて寝てゐます。風采から学生と思ひましたので、つかつかと寄つて行き、「起き給へ!! 終電が間もなく来るぞ、御両親が心配して居られるだらう。一体君は何処へ帰るのだ?」と呼びかけたところ、「横浜です」と言ひます。「横浜だったらこの地下鉄は行かぬぞ、横浜行きの国電(JR)のホームまで送つてやるから肩に掴まりたまへ」と言つて青年を起し、国電の有楽町駅まで送つて行きました。

しかし私も地下鉄の終電に乗らなければなりません。そのことが心配になりましたので、その青年を横浜行きのホームに出る階段の途中まで送り、「もうここまで来たら一人で行くのだらう。この階段を上つたホームの右側に来る電車が横浜行きだから、それに乗り給へ」と言ひました。ところがその学生は、「ここまで送つて来て敵に後を見せるとは何事だ!! ちゃんと電車に乗せて、無事に発車したことを確かめてから帰れ!! それが出来ないなら俺を元の寝てゐた階段まで連れて帰れ」と言ふのです。

私も少々腹が立って、「よし、それならもと君の寝てゐた所まで連れて帰るから来い!!」

と言つて、また肩にその青年を載せて、地下鉄のさつき青年が寝てゐた階段の所に下し、「此処こゝでいゝか」と言つたところ、「俺がが寝てゐたのは、もう一段下だ、もう一段下まで連れてゆけ!!」と言ふのです。私もいよいよ腹が立って、「それなら勝手にしろ!!」と言つた途端たん、青年の腕が延びて来て、私の眉間みけんを思ひ切り殴りました。その青年は拳闘けんとう(ボクシング)の心得があつたのでせう。その一突きひとつは、極めて強烈なもので、私は向う側の壁まで十米近く飛ばされ、蹲うつすまつてしまひました。

騒ぎを聞きつけて駅員がやって来て、その青年を押さへて連れて行きました。やがてもう一人の駅員が来て、蹲うつすまつてゐる私に「貴方も交番に来て下さい」と言ふので従つて行きました。私の眼の上は真赤に腫はれ上り、物もよく見えぬ程でした。交番のお巡りさんが「貴方はこの青年を訴へますか」と聞きますので、「私は訴へません。どうかこの若者を御両親のもとへ無事届けてやって下さい」と申し上げて帰りました。それから三ヶ月程、眼の上の腫が引かず、眼も翳かすんでよく見えませんでした。

恥かしいことを書きましたが、私は青年のことを、我が子の様に思つて世話をしたつもりでゐながら、終電車に乗り遅れては困る、といふ自分のことを思ふ心を払ひ切れなかつたこ

とで、こんな結果になつてしまつたのだと気付き、聖徳太子様の仰しやる様に、人様の子も我が子の様に慈しむことが、いかに至難なことを、つくづくと身に沁みて知らされたのであります。

家内は、「い、齢ですから、もうこんなことは二度としないで下さい」と申します。私も家内の言葉に絆されさうになります。しかし、聖徳太子様のお言葉が遠くから囁きかけて参ります。「長内君、若い者にはもう肩は貸せなくても、隣近所の子供達に、『お早う、行つてらっしゃい』『おお、お帰り』『そんなことをしてはいけませんよ』のひと言を掛ける位は出来るだらう」と。私は、いまそれだけは行じたいと念じてをる次第です。

少年の凶悪犯を防ぐ手だてについて、世上多くの論がなされてをりますが、それらの論をして処あらしめるものは、私達一人一人が同胞に対する「肝苦りさ」(第四回参照)の思ひを深め、自分の出来る小さなひとことを実行してゆく、さうした自他の二境を別たぬ生き方(文化力)を心を合せて互に身につけてゆく、たどたどしい道しかない様に思はれるのであります。

第二十二回

道は近きにあり

小学生時代の様に道草ばかり食ってゐるうちに、約束の回数を超えて仕舞ひました。急いで本道へ立ち帰らなければなりません。

祖国日本の今日の昏迷の基は、明治の初めより、文化と文明を履き違へ、我国の文化の尊さを忘れ、東大を筆頭にひたすら、一見普遍的に見える文明を採り入れようと―陸羯南先生の言葉を借りると「殆んど全国民をあげて泰西に帰化せんと」(拙稿第二回到詳細)―突っ走ってきたことにあり、その結果祖国の現状は、あたかも、釣りの感触が良いからと故山の湖沼にブラックバスを放流し、幼子達の好き友だった鮒っコだの泥鰌っコだのが、姿を消してしまひつつあることに象徴されてゐる様な、文明といふ怪物の持つ魔性に荒されてしまつて、祖先達が営々として蓄積して来た美しい祖国の文化伝統が、まさに消え失せようとして

ゐる様に思はれてならないのであります。

「勿体ない!!」「お蔭様で」(これに類する言葉はアメリカにはないと聞いてをります)といふ尊い美しい日本語を聞くことも稀まれになってしまった祖国の現状は、食糧の自給率僅か四十%しか無いといふのに、世界中から食物を輸入し、天照大御神様が「是の物は顕見うつつしき蒼生の食くつらひて活いくべきものなり」(日本書紀)と授けて下さった、それだけで栄養が完備されてゐる尊い稲(お米)——麦はそれだけでは栄養が充分ではなく、必ず肉類その他の副食物を摂とらなければならぬ、と聞いてをります——を大切にせず、世界で数千万の方達が飢餓で苦しんでゐるといふのに、世界中から食べ物を買ひ漁あさり——しかもその食べ物を惜し気もなく食べ残し——且つ休耕田を年毎に増やして田園を荒れさせてゐる現状は、「驕おごれる人も久しからず」の誠言まことげんを目の前に突きつけられてゐる様に思はれてならないのであります。

稲作は私達日本人の文化力の根源をなしてをり、祈年祭・新嘗祭を中心とする神祭の昔の手振り——南部の「えんぶり」も津軽のお山参詣も、皆よい年(稲の豊作)を神に祈ることに起因し、これに伴ふ獅子踊りなどを中心とするお神楽も、芸能も工芸も——は、皆稲作に深い関はりを持つてをります。

文明の手法の大規模耕作、化学肥料、農薬使用は、母なる大地と自然に対する感恩の念を薄らさせ、我々日本人の文化力を衰弱せしめつつあります。

有機農法、無農薬が漸く顧みられる様になりましたが、一坪の土地からより豊かな稔りをさせて頂く、神々への感恩奉仕の業としての農を取り返さなくてはならないと存じます。そして机に向かつて働く方も、工場で働く方も出来る限り、土に親しみ農作物をつくる生活を――僅か数坪の土地でも、鉢植えしか出来なくても――取り戻すことを、そして有機農法・無農薬で、手をかけて育んだ作物は、仮令、高価であっても喜んで購める生活をとり戻さなくてはならないと思ひます。

人も自然の生んでくれた生物の一つに過ぎません。自分の歩いて行ける範囲の土地や海、河の成り物を戴いてゐるのが一番心身に良いことは、穢の無い子供達が一番知つてゐる筈です。人は風土と一体の存在であることを自知つてゐるからであります。幼い頃、野苺や菜萁や桑の実、そしてあけびや野葡萄を竹馬の友らと採つて食べ、野蒜、路、蕨や茸採りに興じ、磯では海苔や布海苔や昆布、若布を採つて帰つたりしましたが、さうした食べ物（齢老いた今でもそれが一番の好物であり、それを頂いてゐると心身が健康である様に思ひます。地物

は栄養学では説明出来ぬ生氣せいきとでも言ふべきものを恵む様であります）を摂ることが、自然の子である私達人間の基本生活でありませう。

アフリカの百獣の王ライオンが、アメリカの牛肉が安くて美味しいからと聞いて、輸入して食べてみると聞いたことがありません。すべての動物は（その限りに於て人間も同じです）、自分の行動範囲のものを食べ健康に暮らしてゐることに気付くことは大事であります。

働くことは心身の平安を得る最勝の道

天照大御神様は御自ら田圃たんぼを耕され、また機はたを織おっていらしたことは古事記しよるに記すところであります。

私達の祖先方がなさったことは、文明思想で言ふ「労働」（キリスト教では、アダムとイブが禁断の木の実を食べたために楽園を追はれ、その罰として労働が始まったと考へてをります。即ち働くといふことは、喜びでなく苦役であるといふ思想です）とは全く違って、人として生まれた者の自おのつからの道であり、それが己れを磨く道でもあることに気付き、働いて

来たと思はれるのであります。即ち働けることが有難いのであり、働くことに喜びを持つといふ祖先以来の道を行んでゆくことが、日本人としての文化力を身に付け、心身の平安を得る最勝の道と思はれるのであります。余白が少なくなりましたので、文化力を身に付けるために、私が心掛けたいと念じてをります一、二のことを簡単に述べ、拙稿を閉ぢさせて頂きたいと思ひます。

一つは、明治天皇が「をりにふれたる」と題されて

おもふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも (明治四十五年)

とお詠み下さった大み教へに勇気を戴いて、をりにふれて和歌を詠むことに励みたいものと念じてをります。明治天皇はまた、「述懐」と題されて

ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとはおもはざらなむ (明治四十年)

ともお詠み下さいました。人智（知解）の産物たる文明をして、処（ところ）あらしむる文化力を培（つち）かふ道は、体解、心解を中核とする、まごころの修練にあり、その最も近い道が、まごころを詠（うた）ひあげる和歌の創作と鑑賞にあるとの大み教へのままに、よろこび、かなしみを折にふれて和歌に詠み上げたいものと念じてをります。

いま一つは、よき師、よき教へ、よき友を求め続けたいと念じてをることでもあります。聖徳太子様は、憲法拾七條のなかで、「篤（あつ）く三宝（さんぼう）を敬（や）へ」（第二條）と仰（おほ）せられました。道元（ぜん）禪師はこれを「仏（ほとけ）は是（こゝ）れ大師（だいし）なるが故（ゆゑ）に帰依（きゐ）す、法（ほふ）は良薬（りやうやく）なるが故（ゆゑ）に帰依（きゐ）す、僧（そう）は勝友（しょうゆう）なるが故（ゆゑ）に帰依（きゐ）す」（修證義（しゆじやうぎ）第三章）とうけとつてをられます。

人は尊敬する師（生きてをられる方と限らず歴史上の人物で師と仰ぐ方）を持つ時、その師の様になりたいものと懸命に励みます。何が善で何が悪かなど、如何にこの小さな至らぬ頭で考へてみたところで分るものではないでせう。よき師の教へのままに信ずる外に、安心の境地が恵まれないことは、親鸞も嘆ぜられたところでもあります。（歎異抄）

修身の道は、よき師を持ち、よき教へを戴き、そして心から信じ合ひ、励まし合ひ、睦み合へる友を持つことに尽きる様に思はれるのであります。このよき友と折にふれて、先に述

べた和歌の便りを交し合ひつゝ、まごころを磨き合つてゆくことを、私は残る生命いのちの尽きるまで、行じて参りたいものと念じてをるものであります。

文明思想について

いつかは触れようと思ひつつ触れ得なかつた文明思想のいくつかについて、稿を結ぶに当り一言づつ申し上げて置きたいと思ひます。

人權——これにつきましては、フランス革命を起した方達の子孫にあたる、同国人で、ノーベル生理・医学賞を受賞された、アレキシス・カレルが述べられた次の言葉で充分であります。即ち、「フランス革命の祖先たちは、人間と市民の権利の实在を、真面目に信じていた。このような権利が、観察によつて検証されたものではなく、唯ただ単に、心意の構成物（筆者註すなはち抽象）に過ぎぬことを、彼らは疑つてもみなかつた。実際には、人間は権利権利を持つてはいないが、要求要求を持つてゐるのである。」（『生命の知恵』一六頁）の一言です。

山の中で道に迷つた者が、「俺には生きる権利が与へられてゐるのだ!!」と如何に叫んで

みたところで、誰も救^{たす}けてはくれないでせう。そろそろこんな人智の生んだ文明思想に、引^ひ導^{どう}を渡すべきときに来てをりはしませんか。

自由—真の自由とは、例を短歌にとつてみますと、五・七・五・七・七の制約のなかにありながら、如何に我が思^{おも}ひを詠^{うた}ひ晴らせるか、それが出来た時の喜びこそ、真に「自由」といふ名にふさはしい境地でありませう。明治天皇の御製に「歌」と題されて

むらぎもの心のうちに思ふこといひおほせたる時ぞうれしき (明治三十八年)

とございます。

また、ゲーテは「言論の自由を叫ぶ者は、自分の意見だけを通したい者である」と言はれたと聞いてをります。これだけで充分でありませう。

平等—キリストは、姦淫^{かんいん}した婦人に石を擲^{なげ}たうとしてゐる人々に向ひ、「汝等^{なんぢ}の中罪なき人、先づ石を擲^{なげ}て」と言はれたところ、一人去り二人去り、遂に誰も居なくなつた時に、「我も亦汝^{また}を罪すること能^{あた}はず、行きて再び斯^かかることを為すこと勿^{なか}れ」(ヨハネ伝)と言はれ

ました。

それは聖徳太子様が仰おつしゃられた、「共に是凡夫これほんぶのみ」(『憲法十七條』第十條)の御痛感に相ひ通ふ、人と人とが真に平等となり得る道は、この己を深くみつめる内省を措おいてはな
いことを知らしめられるのであります。あんな立派な方が、如何どうしてこんな苦しい目に遭あは
なければいけないのか、とは誰でも痛感せしめられてゐる、人生の不可測の秘密であります。
外的平等に人生の価値を求めて、声高こゝろだかに叫ぶ哀れさに、早く氣付かなくてはならない氣が致
します。

男女同權——これについても一言ひとことで充分でせう。母上にまさる、尊い存在はこの世にありま
せん。我が国で一番尊い神様は、女神めがみであられる天照大御神様でいらつしやいます。

昭憲皇太后様は「男女同權といふことを」と題されて

松が枝えにたちならびてもさく花のよわきこころは見ゆべきものを (明治十二年以前)

とお詠みになつていらつしやいます。女性の方々に静かに拝誦はいじゆして欲しいと念じられる御歌みうた

であります。明治天皇は「女」と題されて

なよたけはすなほならなむうつせみの世にぬけいでむ力ありとも（明治三十八年）

とお詠み下さいました。これが我が国の文化と言ひ得る女性の生き方でありませう。男女同権といふ文明思想を、理屈で押し進めて行く時、一番迷惑を蒙るかまむのは女性自身でありませう。

真に普遍なるもの

青森テレビで毎週日曜の夜十時から、「世界ウルルン滞在記」と題して、世界の辺境の部族の家族の一員として、日本人が生活を共にする記録の放映があり、心が引かれるままによく観させて頂いてをります。

僅か一週間の滞在なので、どこまで本然のものに肉迫し得てゐるかは分りませんが、その部族の方々の着てゐる衣裳や、踊りや、音楽には、その都度深い感銘を覚えます。そして僅

か一週間の滞在でしかないのに、生活を共にした家族や部族の方々が、いよいよ別れを告げようとする折に、別れを惜しんで流される涙には、私達が忘れかけてゐた真心まごころに、灯ともしを点して頂く様な深い感動を覚えさせられます。

これ程にも、人との別れを悲しめるものなのか、言葉もよく通じない異国の訪問者を、母は吾が子と、子等は兄弟と別れる如くに、地にも消え入る如く、五体を震はせて「行くな!!」と言って悲しむ姿に、誰か心を動かされぬ者が居りませうか。人と人の心を繋ぐものは、共通語であるといふ文明思想は、かういふ嚴肅な姿を見た時、それは如何に皮相な考へ方であるかに気付かせられるのであります。

真に人の心と心を繋ぐものは、人の真心まごころであり、その真心は各自の民族的共同生活の中でしか磨かれないことに、確しかと気付かなければならないと知らしめられるのであります。一針ひとはり、母は子の為に、娘等は恋人の為に、縫ふ美しい民族衣裳に、また身も心も空にして踊り狂ふ民族舞踊に、知らず知らず身を乗り出して共感共鳴の思ひを一つにするもの、そここにしか世界の人々の心を繋ぐ道がないことを知らしめられるのであります。

ゲートルも「真に民族的なものこそ、最も普遍的なものである」と言はれたと聞いてをります。

我々日本人が今為さねばならぬこと

世界の心ある方々が憧憬して止まない、百二十五代も絶ゆることなく続いて来てゐる、皇統を宗家として戴きまつり、昭和天皇様が七十歳になられた折に

よろこびもかなしみも民と共にして年はすぎゆきいまはななそぢ (昭和四十五年)

とお詠みになられた如くに、君と民と、喜びも悲しみも共にして、營々と培つて来た、この美しい国民生活を守り続けてゆくことが、人類に対する最大の貢献であることを確と自覚して、その清朗にして慎しみ深く、「勿体ない」「お蔭様で」と言ふ言葉が自から発せられる様な生き方―文化力―を奪回し、文明といふ人智より生れた怪物の欠点を剔抉して、その処を得しむる手本を示すことが、いま我々日本人に求められてゐるのだ、と切に思はれるのであります。

それはまた我々青森県民に、縄文以来祖先達が営々として培って来てくれた、あづましい生き方を、美しいお国言葉と共に奪回し、麗うるはしい風土と共なる、津軽らしさ、南部らしさを取り戻すことであると信ぜしめられるのであります。

永い間誌上を穢けがしましたことを深く謝し上げつゝ、これを以って拙稿を閉ぢることと致します。まことに有難うございました。

(完)

著者略歴

- 一、大正十一年青森に生まれる。
- 一、昭和十五年青森県立青森中学校卒業、同年仙台高等工業学校機械科入学。
- 一、昭和十五年「菅平」・昭和十六年「御嶽」・昭和十七年「西教寺」に於て開催された日本学生協会（社団法人国民文化研究会の前身）主催の「全国学生夏季合同合宿」に参加。
- 一、昭和十七年九月繰り上げ三年終了、同十月北部第十九部隊（騎兵隊）に入営。
- 一、昭和十八年十一月陸軍航空兵志願、太刀洗菊池分校入校。昭和二十年八月まで戦闘機操縦、終戦帰郷。
- 一、昭和二十年九月より同二十四年十二月迄青森県平賀町大光寺で百姓。
- 一、昭和二十五年東北大学法学部入学、同二十九年卒業後、電源開発(株)に入社。
- 一、昭和五十五年定年退職、同年より昭和六十二年まで開発電子(株)取締役。
- 一、昭和六十二年より平成八年十月まで社団法人国民文化研究会常務理事・事務局長。
- 一、現在 同会副会長。

著書・編著

- 一、『若き友らへ語りかける言葉』（国文研叢書No.37・平成十年）
- 一、『文化と文明』を月刊『春秋東奥』に平成十年六月より平成十二年十月まで連載執筆。
- 一、『黒上正一郎先生のうたと消息』（昭和五十七年）を編集、『いのち ささげて』（国文研叢書No.19・昭和五十三年）、『続いのち ささげて』（国文研叢書No.20・昭和五十四年）、高木尚一著『ひとすぢの信』（昭和五十九年）、『青砥通信鈔』（昭和六十二年）他を共編す。

表彰

- 一、平成十八年度社会教育功労者として文部科学大臣表彰受賞。

その他の活動

社団法人国民文化研究会主催の「全国学生青年合宿教室」においてたびたびの講話を行ふとともに、昭和五十五年より平成八年までそれぞれ毎月一回、大学生数名に正大寮及び自宅で、黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読を指導す。

あとがきに代へて

「はしがき」にも触れましたやうに、今回の再版作業には復刻のためのワープロ作業・編集作業を通じて二十九名ものが関りました。年齢は記載してをりませんが、二十代から六十代の方々まで年代は様々であります。ここに「あとがき」に代へてお一人一人に「感想」を書いていただきました。

十人十色と申し上げればよいのでありませうか、著者・長内先生を温かくつつみ込むそれぞれの思ひが表現されてゐるやうに思はれます。それはまた、著者と手を携へて、「文化と文明」に示されるところに歩み出さうとする足音のやうにも聞えてまゐります。

(岸本 記)

山内 裕子 (鎌倉市・主婦)

自分が担当させていたただいたところに出てくる、陸羯南先生に関する御本を探しに隣市の図書館に行きました。高架書棚に古い本を見つけたら明治の先覚者を身近に感じました。今、私たちが享受してゐる幸せは祖先からの贈り物でせう。長内先生の文章を読み進むうちに祖先の心が懐かしく思はれました。

日本人の心は私達の深い処にあるのですから、心の鏡を磨き、よく味はひつゝ、日々を過し

たくなりました。そして、皆様と力を合はせれば少しづつでも何かできさうです。よい機会を与へていただきました。

北国の津軽言葉の温ぬくもりに人の情けをしみじみと思ふ

明治人己も国も卑下せずに独立自尊勝ち取られけり

志高く掲げてよき友と力合はせて為なすこと楽し

池松 伸典（北九州市・若築建築株式会社九州支店）

「お国言葉」には互ひの真心ちかが直ちかに触れあふ様な心地よさがあります。東北で暮らした経験がない私にはとても下北弁の良さを実感できない訳ですが、僅かでも触れなくなる思ひに駆られます。仕事で四月より北九州若松に移り住んでみますが、最近ではこの街に親しみを覚え、早朝に近くの神社やお寺を散策してみますが、地元の方がお参りされてゐる場に出会ひます。先日風が吹いた翌朝、神社の石畳の上にたくさん銀杏ぎんなんが落ちてゐて、天からの恵みかと友人の分も持ち帰り一緒に秋の味覚を味はりました。小高い丘からは昔石炭船で賑はつた洞海湾が見下ろせ、その光景には祖先の方々の深い真心が籠こもつてゐる様に感じます。さう

いふことが最近大切に思へます。

高木雅史（府中市・不二サッシ株式会社）

いまから十年ほど前、国民文化研究会の合宿教室でのご講義で初めて長内先生のお話を伺いました。ご出身の津軽のお国言葉での語り口や、その立ち居振る舞ひから長内先生のやさしさ、温かさが伝はってくると同時に、なぜか懐かしいやうな気持ちになり、言葉の一つ一つがずっと素直に体の中に入ってきたのをよく覚えてをります。

今回作業に携はり、初めて『文化と文明』を読ませていただきましたが、まるで長内先生がすぐそばで語りかけてくださるやうな心地がし、十年前に初めてご講義を受けた時の感動を思ひ出しました。一人でも多くの方がこの感動を味はってくださることを願っております。

桑木 康宏（福岡県飯塚市・株式会社ハウインターナショナル）

「肝ちじぐ苦りさ」といふ言葉が、心に響きました。

私は、ソフトウェア開発業界に身を置き、常にお客様の新しいビジネスを提案してゐます。

正にテウトのやうに、便利になる方法を提案するのが仕事です。経験上分つてゐるのは、お客様の立場になり、お客様の心になり、お客様よりもお客様の事が分るやうになつて初めて、お客様に喜んで頂ける提案にたどり着けるといふ事です。テウトのやうに、自らの生み出すモノの本質を見誤らず、「肝苦りさ」を実践することを大切に進めていきたいと思ひます。

とても深いと同時に、日々の生活に役立つ「智慧」を学ばせて頂けました事に、心より感謝申し上げます。

野村 亮（東京都・株式会社紀伊國屋書店）

自然を思ふには征服や保護といふ対立的な心持ちではいけないといふ、長内先生のお考へを知りました。

私はヒラリー卿の悲しみを思ひました。「征服」と題名をつけた人々は、共に登頂したスタッフか、少なからずヒラリー卿のよき支援者だったのかも知れませんが、ヒラリー卿の心に刻まれたエベレストへの思ひを深くは理解できなかつたやうです。「静かに登つた」といふ言葉には、ヒラリー卿が山の変化する風景やその恵みから心が離れずにゐたやうに感じられま

す。そこからヒラリー卿の受け取った偉大な何かは、段々とエベレストへの崇敬の念になったのでせう。この真直ぐな姿を、身近な人々に征服と題されてしまった悲しみは、深いものだったと思ひます。

小柳 辰介（東京都・日本大学法学部）

このたび長内俊平先生の『文化と文明』のワープロ作業に参加させていただいた切っ掛けは、父、従兄、岸本先生のお誘ひでした。はじめは父からの誘ひに軽い気持ちで引き受けたものの、その直後僅か二、三分の間に従兄、さらには岸本先生から直接に電話をいただきました。それぞれの誘ひを受け、私はなにか温かい気分になりました。

それは自分と家族とのつながりは当然ながら、従兄や岸本先生、延いては長内先生へと続く繋がりを感じられたからだと思ひます。さうした方々から引き受けたのだから、自分の分担は出来る限り正確なものにしなければといふ強い責任も感じ、慣れない作業でしたが無事終へることができました。本当にこの出版作業にお誘ひいただき、また参加させていただきありがとうございました。

「知解」と「心解」といふ言葉がこの御本の中に出てまゐります。

私はどちらかといへば楽観的な方で、あまり物事を深く考へることはないのです。それで考へ事をするときは、やはり「知解」の方へ傾いてしまひます。なかなか実際の経験に結び付けて―難しい問題になればなるほど―考へることが出来ません。

しかし長内先生は永い年月をさ迷い歩いたと書いてをられますので、自分は真理に基づく心解といふことは何か難しく、そんなこと出来ないんじゃないかと思つてしまひがちなのですが、これから自分が生きていく上で、大切だと思ふことは、常に心の片隅で持ち続ける、考へつづけることを大切にしたいと思ひました。

谷口 耕平（福岡県飯塚市・九州工業大学）

第四回に「知解」と「心解」の違いについて『「知解」は物の意味を知る、即ち理解の段階で止るに反し「心解」は物のいのちの本源に立ち返る様な知り方である』と述べてをられ

ます。

僕は情報技術に携はってをりますが、そのやうな技術の発達に伴って、ここで言はれてゐる「心解」の大切さといふものをしつかりと認識しなくてはいけないと感じてゐます。本文中でいくつか「心解」の具体的なエピソードを述べてをられますが、どれをとつても瑞々しい人間的な心の動きがあり、感動を誘はれます。さういふ文章化できない心の動きにこそ、大きな価値がある。そのやうに強く感じられました。

小柳雄平（東京都・伊佐ホームズ株式会社）

私の祖父が敬慕する友であられ、また父が殊ことに尊敬してゐる長内先生に初めてお会ひしたとき、先生は「雄平君か」と私の両肩に手を置かれ、目をつむられて何度か頷うなづかれながらしばらくの時が流れた。一分間にも満たなかつたのかもしれないが、とても長い時間に感じられ、その時のことを思ひ出すと涙が込み上げてくる。

『文化と文明』は、我が家族、先生、友、会社の方々、また祖国に殉じられた英霊、そして御皇室に対し、恥づかしくないやうに生きたいと願ふ私に、「文化とは何か」を教へてい

ただいた、とても畏く、温かい文章でありました。

先生の面輪み声を思ふかな「文化と文明」を説き給ふ文章に

真心をもちてま直ぐにゆく道をおだにしるけく照らさるる文

師の文章を読みつつおのづと偲ばるる故郷のうからを我が友がきを

庭本 秀一郎（宝塚市・東洋紡績株式会社）

何年も前、長内先生とご一緒した全国学生青年合宿教室で研修中のことでした。先生は同じ研修施設で研修をしてゐた、別団体の（私にとっては見知らぬ）子供達にお声を掛けてをられました。先生にとつても初めて出会つた子供達だったに違ひなく、子供達は警戒するやうな素振りも見せてゐましたが、先生は一向にかまはず、優しく語りかけてをられました。当時の私にとつて、先生のご行動は不思議に思はれましたが、何かしら強く心を惹かれました。

今にして思へばそのお姿は、「我が子の称は自他を別たず」といふ聖徳太子のみ教へに懸命に沿つていかうとされるお姿であり、先生にとつては、「見知らぬ子供達」ではなく「我々

同胞の後へ続くお子さん達」であったのだ、と感じさせられます。

友情を我らに教へつつ歩まれし一日一日を尊しと思ふ（共同作業・妻 和香子）

大日方 学（横浜市・神奈川県立氷取沢高校教諭）

私は現在県立高校二年生三十九名の担任をしてをります。四月当初より遅刻する者多く、授業中は私語や居眠りをし、教科書すら開かず、休み時間になると嬉々としてトランプに興じる。さうした生徒たちを相手に説教をしたり、時には大声を張り上げて怒ったり、個別に呼んで話をしてをりますが、なかなか改善できず、暗澹たる気持ちを抱くこともしばしばです。

しかし、長内先生の御文章を読み、まだまだ自分には生徒を「我が子の様に慈しむ」心が足りないのだと痛感いたしました。生徒たちが美しい日本人の心情こころみを抱くことができるやうに力を尽して参りたいと思ひます。

生徒らの心を信じ真心を尽しゆきたし御教へを胸に

本間隆宏（国分寺市・小金井市障害者福祉センター）

長内先生の聲咳けいがいに触れるが如きまごころの籠められた文章に、自然と感応して生きてをられる先生のお姿がしきりに思はれた。決して観念的にならず、体験に即して語られる先生のお言葉には、確かな重みがあり、直接心の底に響いてくるやうであった。「頭でなく身体で考へなさい」と先生はかつて云はれたが、その最良の手本たる先生ご自身の文章に、「真剣に考へるとは真剣に生きることだと、ひしと感じた次第である。読後、長内先生に初めてお会いした時の「ああ、僕も先生のように生きたい」といふ感動を思ひ出し、昨今いかに漠として生活してゐたかを反省させられるとともに、再び、真剣に生きようといふ力を恵まれた。

大橋 広和（府中市・警視庁）

私が長内先生の御講義を初めてお聞きしたのは、平成十三年の御殿場での夏合宿であった。その御講義を聴き、先生の母上を思慕される思ひが強烈に伝はつて来て、私は鳥肌が立ち魂を揺さぶられたことを覚えてゐる。それまで学校の先生の話聞き、これほど感動したことはなかった。爾来、夏合宿等で長内先生の御講義を聴くことを心待ちにし、先生の聲咳けいがいに接

する度、日々の生活に流されてゐる己を反省することも多々あったが、自分の悩む問題の答へを見出すこともあった。

この度、『文化と文明』の再版に際し、微力ながらお手伝ひさせて頂いたことは、日々仕事のことしか考へてゐなかつた私にとって、何より有難いことであつた。

鷺頭 祥平（福岡市・九州工業大学大学院）

私は今回の『文化と文明』のワープロ作業を通して、ただ文章を読むよりもより深く文章に触れることができた気がします。私は普段文章を読むときは、文章の内容や意味のみに注意を払つてをりました。しかし、今回のワープロ作業や例会での輪読の場合には、「て・に・を・は」などの助詞・助動詞にまで注意を払つて文章と向き合ひますので、普段は気づくことのないやうな細かい心の動きを感じることができました。

今回のワープロ作業は私にとってはただの作業ではなく、改めて文章と深く向きあふことができた良き経験でありました。また今回、長内先生の『文化と文明』に深く触れることができたといふ経験は本当にありがたいことであると感じました。

若き日に命を込めし「時」のなかに丘の上の灯ともしびみつめたまふと

最知 浩一（北本市・MSグループ本部総合企画部）

今年五月半ば頃、突然岸本さんからの郵便物で、長内先生の『文化と文明』を頂いた。

私のやうな者にまでお送りいただき恐縮です、とお葉書を差し上げたなら直ぐに丁寧なご返事を頂き二度恐縮した。岸本さんからお送りいただくまで、この長内先生の『文化と文明』の事を存じ上げなかつた。早速、有難く第一回目から順に読ませて頂くと、学生の頃夏合宿で私が一番楽しみにしてゐた、あの津軽弁訛りの長内先生のご講義を聞く思ひがしてならなかつた。

戦後青森でお百姓をされてゐたお話や東北大学への進学のお話など、これまで先生から断片的にはお聞きしてゐたが、『文化と文明』を読ませて頂き、改めて当時の先生の人生観や思想について伺ひ知る事が出来た。

今回の岸本さんの呼びかけに、少しでもお役に立てればといふ思ひで迷はず手を挙げさせていただいた。読者の一人として、国文研の会員の一人としてご本の完成を今からとても楽

しみにしてゐる。

内海 勝彦（千葉県・株式会社アイ・エイチ・アイ・エアロスペース営業部）

かつてこのご文章を拝読して以来ずっと、このご著書こそ今日の混迷した日本において、広く、特に若い方々に読んで貰ひたいものと念願してをりましたので、今回一冊の本として出版されるに当たり、微力ながらお手伝ひさせて戴ける機会を与へられましたことを嬉しく思つてをります。

この中で述べてをられる「真に人の心と心を繋ぐものは、人の真心であり、その真心は各
自の民族的共同生活の中でしか磨かれなしかいことに、確しかと気付かなければならぬ」とのご指
摘を深く胸に刻んで日々を過ごしてまゐりたいと思ひます。

師の君のみ書ふみあまたの人々に読まれむことを直ただに祈るも

内田 巖彦（宇部市・S I S株式会社企画管理部）

この御本を拝読してゐると、そのつと長内先生の御顔、御表情と眼差しが目に浮かび御声

まで聞えて来る気がして、聴衆の一人として聞いてゐる気がしてならなかつた。

師の君の御講話を我は津軽衆と間近く侍りて聞く心地する

「文化と文明」と云ふ最も難しいテーマを語られながら、この御講話には「近代日本及び我々日本人が辿つて来た道は斯うだつたのではないか」と、謙虚そのもので聴衆を包み込むやうな温かさが感じられ、聴衆を唖らせずにはおかないほどの説得力があつた。

さうして、「明治天皇への侍講元田永孚の奉答」を引用され、現在の混迷の元は明治以降の学問が、西欧一偏倒で一科一科の学に走り、教学の中心たる日本の大学に和漢の修身の学が全く欠如してゐたことに帰因することを喝破された。

長内先生が大東亜戦争末期、戦闘機乗りを志願されたこと、戦後、一旦百姓をなされたものの、小作人が生活できるやうに農地を還されたこと等、捨身の決断とも言へる祖国への信と同胞への深い思ひやりには尊敬と思慕の念を覚えました。

久保田 真（熊本市・熊本県立熊本高校教諭）

長内先生には学生時代、東京正大寮で行はれてゐた『太子の御本』の輪読会でご指導をい

ただいた。その頃先生は六十代前半であられたと思ふ。

親の葬式でも困らないやうにと、一時間は正座をさせられ、その後私たちは足を崩すのだが、先生は二時間ずっと正座を続けてをられた。読み間違ひは指摘されたが、知識として分かつては仕様がないと、解釈は一切されなかった。普段は冗談を言つては「フフフ」と笑つてをられる先生であつたが、輪読の場では、読み間違へて一座に笑ひが起こつても決して笑はれることはなかった。そんなところにも、先生の厳しく道を求められるお姿を垣間見る思ひがした。

聖徳太子様やソクラテス、御皇室を大切にされ、いつも私たちには「ご両親によろしく」と言はれた。先生へのご恩返しは何も出来ないが、せめて皇室の尊さと家族を大切にしようといふことぐらゐは、これからも生徒に語り続けたいと思ふ。

武田 有朋（福岡市・西日本電信電話株式会社）

学生時代、初めて参加した合宿で一番印象に残つてゐるのが、長内先生のご講話です。「国とは、公とは」といふ問題について、概念的にしか考へてゐなかつた自分にとって、長内先

生のお言葉は非常に衝撃的でした。家族を大切に、真心を尽して生きることが、国のため、公のために生きることとまっすぐに繋がってゐるのだと感じました。

それから十年ほど経ちましたが、そのやうな経験をしたことが、今の自分に大いに生きてゐると実感してゐます。長内先生のお言葉に触れる機会を再び恵まれるこの仕事に携はることが出来たのは、望外の喜びです。

あたたかき御心みこころあふるるこの御文みぶんは若き我らのしるべなるらむ

森田 暁子（調布市・アトラスプロ株式会社）

この度岸本さんから長内先生の『文化と文明』の復刻版のお手伝ひの依頼があり、大変光榮に思つてをります。

長内先生は「大学に入学してから私の心を捉へて離さぬ問題は、日本の国体は守りぬけるのかといふ問題でした。」（第七回）とおっしゃつてゐますが、私は「国体とは何か」がまだ不明瞭なままですので、長内先生のお言葉一つ一つにその答へがとてもわかりやすく書かれてゐるやうに思へました。

つい先日、天皇陛下御即位二十年をお祝ひする「国民祭典」に出席することができ、陛下のお姿を遠くに拝見致しました。二千年を超えた我が国の歴史を目の当たりにした感動にとらはれ、一瞬気が遠くなりかけましたが、日本人であることの誇りをひしひしと感じました。私はこれからも日本の「文化」を大切にしていきたいと思ひます。

須田 清文（秋田県由利本荘市・羽後信用金庫石脇支店）

電源開発の青森事務所に先生をお訪ねした時、壁に「事を成すは人にあり、たゆまず励め我が友よ　されど事の成るは天にあり、たゆまず祈れ我が友よ」といふ木下道雄先生のお言葉が掲げられてゐた事が思ひ出される。

今上天皇が皇太子殿下の頃、青森においてになられた折、隣で長内先生が腹の底から万歳三唱をなさり、私も驚きながら倣った事、青森の「酒壺」で高橋竹山さまと会ひ、先生の言はれるままに「隣の若い者ですが一杯いただけませんでせうか。」とお願ひしたところ球磨焼酎を賜り、私の言葉遣ひでわが出身地を当てられ驚いてゐたが、高橋竹山さまと長内先生がいかに昔からの知己の如く話し合はれてをられた事、斯様な不思議なご縁は『文化と文

明』のなかにちりばめられてゐる。

大町憲朗（札幌市・日本ユニシス株式会社北海道支店）

私は十九歳の時に、私の故郷函館の、函館東高校裏の静かな林の後ろにお住まひの、長内先生ご夫妻をお訪ねしたのが、先生とのはじめての出会いでした。その冬、畏友・故皿田宏兄（山口県出身・東工大土木昭和五十三年卒・防衛施設庁奉職）と二人でお伺ひし、大変ご馳走になり、若さにまかせて酔ひ、深夜二人で肩を組みながらご夫妻にお見送りしていただいたことが今も忘れられません。

自分に課せられた今回の作業を、『文化と文明』を「読経」するやうな思ひで承うけたまはりました中で、昨年九月二十一日に、中一の息子・眞弘をつれて青森に長内先生と奥様をお訪ねし、感無量の思ひ出となりました。切に先生と奥様のご長寿をお祈りし、先生のみ心を若き人々に伝えるべき使命を、今、痛感してゐるものであります。

吾子あことともに秋深みゆく津軽路に訪ねし思ひ出消ゆることなし

ご夫妻のやさしきみ心に包まれて満たさるる吾子の笑顔うれしも

山本 朝美（富山市・株式会社シキノハイテック電子機器部）

富山の例会「かたかこの会」で『文化と文明』（第二十回）を輪読し、レーナ・マリアさんを知りました。彼女は障害を持ってゐながらも、明るく前向きな生き方をされてゐて、世界中の人々に愛と希望を与へてゐることを知り、とても尊敬することができました。

自分のお腹の中に子供がある今、親として我が子はどうか五体満足で生まれてきて欲しいと願ふばかりですが、どんな苦難があらうとも、彼女のやうに笑顔を絶やさず、明るくみんなから愛される子に育ってほしいと思ひます。

私のお腹の中に命が宿ってゐることがわかった時から早七ヶ月。最近はお腹の中で元気に動き回ってゐるのがわかり、お腹の子に話しかけるのが日課です。そんな我が子に会へる日を主人と二人で心待ちにしてゐる毎日です。『文化と文明』につながりをいただきありがとうございました。

奥富 修一（川越市・東急建設株式会社前技師長）

勤めて間もない頃（今から四十年前）、新宿の先生のお勤め先の会議室で毎週輪読の手ほどきをお受けした。終了後に居酒屋で飲んだ後、ご自宅におしにかけて「球磨焼酎」をご馳走になったのが忘れられない。その時に知解・体解・心解のお話をしてくださった。このお話は先生が生涯に亘って抱いてこられた大きな主題であったのだ。百姓をなされたお話をお聞きして、勤めを辞めて土を耕すことを真剣に考へたこともあった。ふりかへると、社会人のスタートの時から今日まで、先生に導かれてきた自分であるとあらためて知らされる思ひである。本書が心ある方々に読まれて、わが国が直面してゐる課題を克服する道を共に歩んでいただければと切に願ふ。

小柳志乃夫（東京都・興銀リース株式会社）

この度は岸本先輩のご尽力で長内先生のご本が新たに世に出ますことをうれしく思ひます。私も先輩のご指示で校正作業を若干ながら協力させていただきました。原本を読んだときからですが、作業中にも、お国言葉を交へた先生のお姿、お声が懐かしく偲ばれました。先生の温かいお心がこの本には一杯詰まっております。ご体験に根差したご著述でありますので、

読みやすく、しかも意味するところの奥深いご本であると思ひます。私の心に残ったお言葉を一つあげますと、先生は、ご本の中で、

《生涯に一度もカンニングなどしたことはない》とか「心のささやきさへ聞いたことがない」といふ方がをられたら、その方とは杯を交す気になれませんが」と記されてゐます。私を救ひとっていただけのやうなありがたいお言葉ですが、先生の「信」を求められるお心の強さが感じられるお言葉でもあります。

このご本を先生とお会ひしたことのない若い学生諸君にも是非読んでいただきたい。先生のお心をお偲びしつつ、学生諸君とこのご本を読み、語り合ふことを楽しみにしてをります。

磯貝 保博（府中市・元株式会社講談社）

「はしがき」の中で岸本さんは、この本を市販本として出版社から再販することが出来なかつた経過に触れられてゐます。市販本の可能性を出版社に打診してみたかどうかとの提案をしたのは私でした。全国的に流通する市販本にはならないとしても、青森県の方々や国文研関係者を対象として多少とも可能性があるのではないかと考へたのです。残念ながら市販

はできませんでした。しかし、その後も岸本さんが自費出版として再販したいとの強いお気持ちに心動かされ、出版社に居た経験もありお手伝ひしてきました。初版本は手製本としての良さがありましたが、印刷本にすれば一般の方にも頒布して読んで頂き易くなるのではないかとの思ひで手軽な新書版と致しました。

長内先生には、私が大学二年生の時（四十五年前）に合宿教室に参加して以来、合宿教室のみならず読書会やご自宅にも伺はさせて頂きご指導を賜はってまゐりました。さうした中で、私は自分自身が一人の日本人たり得たいと思ひつつ今日まで生きてきました。この本を拜読させて頂き、この本の中には「一人の日本人がある。私の目指す日本人がある」との心強い思ひが致しました。そして、若い人達もこの本を読めば必ずや心を動かされると確信致しますので一人でも多くの若い人に読むやう勧めてゆきたいと思ひます。

読みゆけば情こころで語る言の葉のゆかしさ沁みて力湧きくる

小柳 左門（宮崎県都城市・国立病院機構都城病院院長）

五十年ほども昔、父のもとに友人から葉書が届いて、差出人に「青森の熊より」とあって

愉快であった。初めて国民文化研究会の合宿で長内先生にお会いした時、この方こそがその熊ご本人と知ったが、いかにも大きくて髪の毛も眉も濃く、しかも親しい熊の親父おやぢさんといふ印象であった。津軽なまりのお話には、何ともいへず強く惹きつけられるものがあり、余興で歌はれた「津軽じよんがら」に心を揺さぶられた。先生は、本当に自分が感じたものを、心をこめてお話される。土のほひそのままに、ご自分の手でつかんだものそのものを、体ごとぶつけてこられる。先生の大きな魅力であった。

このたび先生がお書きになった『文化と文明』の文章の校正を岸本先輩より頼まれて、幾たびか読ませて頂いたが、このご本には先生のお声そのまま伝はってくるやうな、懐かしくて深い響きがある。知解を越えて、体解、さらに心解まで行きつかないと、本当のものには出会へないんだよ。そのやうな生き方を、また学問をしたいぢゃないか、と呼びかけられるやうなご本である。それは先生が、戦ひに敗れてふるさとに帰り生きていかれる中で、祖国日本の心を甦たらせたい、それにはまづ自分自身に真に向ひあふことだと苦闘され、たどりつかれた処かと思ふ。このご本は、混迷の只中ただにある今の日本にあって、私たちの行く手を灯すほのほのとした光ともなると思ふ。

今年も先生の一字一字に心をこめて筆でお書きになった年賀状を頂き、年の初めを心ずがしく迎へることができた。先生、いつまでもお元気で。

(平成二十二年正月記す)

平成二十二年三月二十六日 第一刷

平成二十二年十一月一日 第二刷

頒価 六〇〇円

著者 長内俊平

〒〇三〇一〇九五四

青森市駒込字月見野二九九一四六

電話〇一七―七四三―七三四二

発行者 岸本弘

〒九三二一〇八三六

富山県小矢部市埴生二〇三六一三

電話 〇七六六一六七―四八八三

印刷所 三光社出版印刷(株)

東京都品川区上大崎二―一―二

文化と文明

— 祖國再生の道を念じて —

